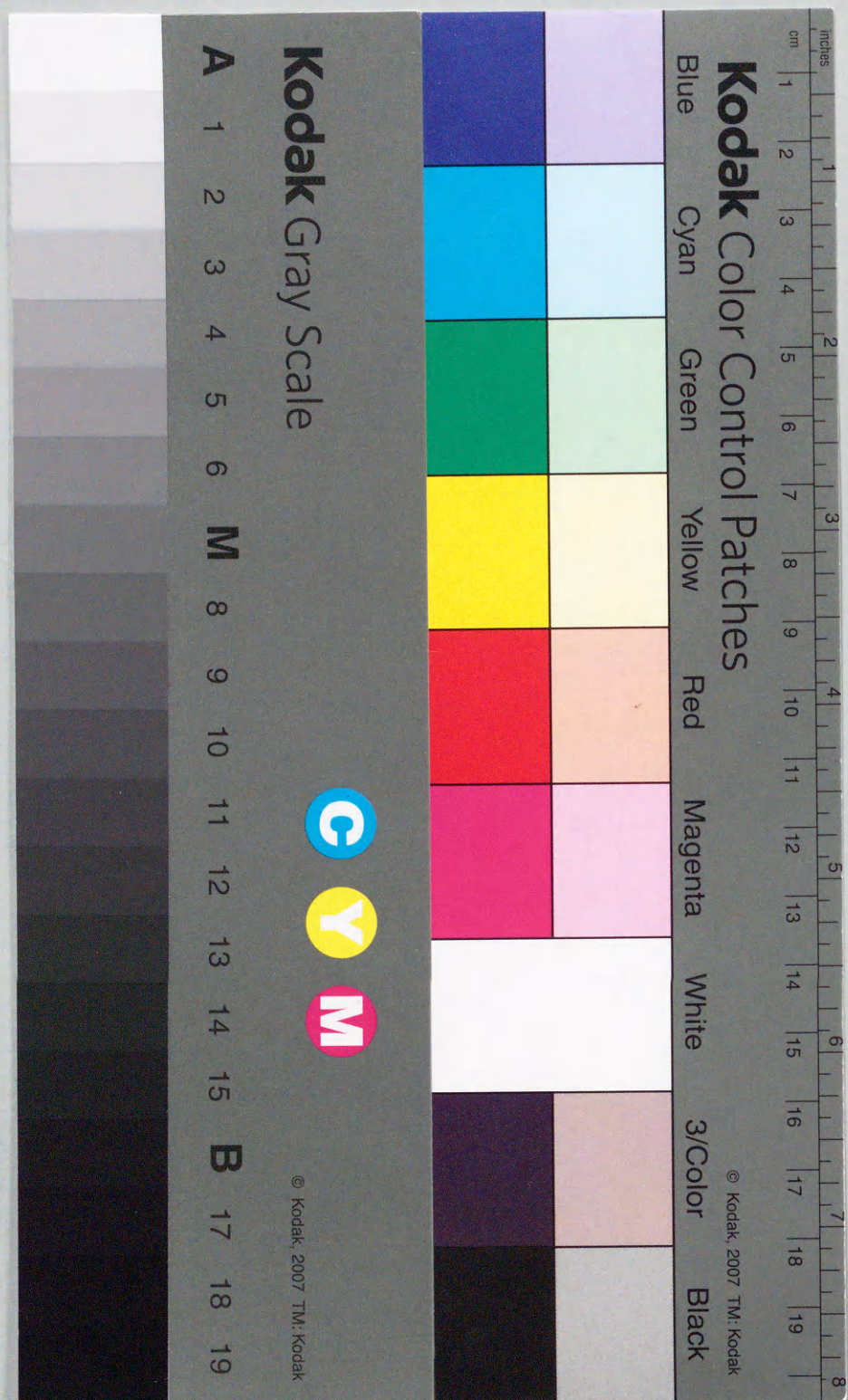


長崎唐人屋敷に関する建築的研究

1996年10月

李 陽 浩



長崎唐人屋敷に関する建築的研究

1996年10月

李 陽 浩

目次

第1章 序論

- 1. 研究の目的と方法 1
- 2. 関連する既存研究 4
- 3. 唐人屋敷に関する資料 9
- 4. 論文の構成 13

第2章 長崎唐人屋敷の沿革

- 1. 序 17
- 2. 長崎における唐人渡来の経緯 17
- 3. 唐人屋敷開設の理由 19
- 4. 唐人屋敷の創設 20
- 5. 立地条件 21
- 6. 唐人屋敷の末期 23
- 7. 結 24

第3章 前期長崎唐人屋敷の構成

- 1. 序 28
- 2. 文献資料 28
- 3. 絵図資料 32
 - 3. 1. 屋敷地の構成
 - 3. 2. 敷地内部における建物
 - 3. 3. 敷地内部における道
 - 3. 4. 上に挙げたもの以外の付帯的なもの
- 4. 前期唐人屋敷の特徴 40
 - 4. 1. 「土神堂」とその前面空地について
 - 4. 2. 「長屋」の配置とその管理について
 - 4. 3. 道の構成について
- 5. 結 43

第4章 後期長崎唐人屋敷の構成

1. 序	47
2. 文献資料	47
3. 絵図資料	52
3. 1. 屋敷地の構成	
3. 2. 敷地内部における建物	
3. 3. 敷地内部における街路	
3. 4. その他	
4. 「自分立」の制度	62
5. 後期唐人屋敷の特徴	63
6. 結	66

第5章 新地蔵の構成

1. 序	71
2. 新地蔵の設営	71
3. 文献資料	73
4. 絵図資料	76
5. 新地蔵の構成とその変容	76
6. 結	80

第6章 結論（総論）

本研究に関連する発表論文・謝辞

絵図資料

第1章 序論

1. 研究の目的と方法

本研究は、鎖国時代の長崎における中国人居留地であった長崎唐人屋敷について建築的視点から考察を行なうものである。周知のように、鎖国時代には長崎を唯一の窓口として唐・蘭貿易が行なわれていた。そこにはオランダ人居留地である出島とともに、中国人の居留地として唐人屋敷が設けられていた。しかし、出島がその敷地形態に独自の特徴を持つことや、西洋対東洋という対立的な問題意識の広範な浸透も相俟って研究者の興味の対象としてあり続けていたのとは対照的に、唐人屋敷はその存在自体すらあまり知られることがないのが実態である。また出島がはやく（大正12年10月）に国の史跡に指定されたのに対し、唐人屋敷が長崎市の史跡に指定されたのがようやく昭和49年のことであった¹⁾事実は、二つの居留地に対する関心の落差を如実に示すものであろう。以上のことは出島関係の研究・文献の量に比べ、唐人屋敷のそれをはるかに少ないことにも反映していよう。

しかし相対的な関心の低さにもかかわらず、唐人屋敷の建築的構成は大きな歴史的意義を持つものであり、当時の日本においても極めて特徴的なものとして位置づけることが出来るものである。それは一つの特徴的な建築物という域を超えたある種都市的な意味も併せ持つほどの内容を持つものであり、それを全体として研究・考察する価値は十分にあると思われる。

長崎唐人屋敷は元禄二年（1689）から明治元年（1868）までの約180年間にわたって存続した²⁾。それは貿易を目的として日本に渡ってきた唐人の居留地として当時の長崎の町の郊外の谷間に設定されたもので、自由な出入りを許さない四方を閉鎖した区画であった。

唐人屋敷はまた唐館ともいわれ、唐人はこれを土庫とも呼んだ³⁾。唐人屋敷は当初は日本側の手、具体的には徳川幕府によって設営されたのであるが、幾度かの大小の火災に伴ってその内的構成を変化させた。その変化を生み出したのは、そこに住む唐人達の営為であり、その結果としてそこには独特（自開的）な建築的・都市的空間が造り出されていっ

た⁹⁾。この点は、幕府側によって設定された空間構成・性格を保持し続けた出島との基本的な差異でもある。内容的にみても、「出島はオランダ東インド会社という国家に準ずる一経営体の賃借で、荷蔵の管理権も商館にあり、船載貨物は市況次第で次年度に売立てられることも多かった。これに対し唐人屋敷は、各「部屋」(棟)はそれぞれ民間の個別経営体である唐船が、入れ替わり立ち替わり、滞在期間中だけ利用するのであるから、唐人はほんの手回りだけで入館し(出入りには厳重な人態・所持品の改めがなされ)、貨物は別に宿町・付町支配の蔵本(元禄十五年からは新設の新地荷物蔵=現在の新地町)に収蔵して奉行所検使の封印をうけ、唐人は荷物の出入れに立会うにすぎず、また売却及び寄進物以外、売残品はすべて積戻りを命ぜられた」⁹⁾のであり、この結果唐館内における唐人達の活動は、貿易活動よりも自身の生活に重きをおいたものになっていたといえる。そして出身地も階層も異なった不特定の唐人達がその中に滞在し、その内部を自身の営為によって造り変えられていた唐人屋敷、とりわけ後期の唐人屋敷は単なる居留地という域を越えて、異国における中国内属の都市といったものを思わせる情景を生み出している。もちろんそこには本国にない様々な制約があったであろう。このことがかえって、その空間構成において本国でははっきりと認識し難い手法(例えば、廟建築とそれらの配置関係における手法・意味等)を、ここで(屋敷地内における廟建築や住居部、市店の配置等における)特定の兆候として顕現化している可能性が予想される。もしくは本国において存在していたであろう空間構成の手法が、海を越えることによって、また幕府設営のものをベースにしたことによってある種の変容をもたらし、日本に存在するのでも本国に存在するのでもない独特なものとなった可能性も考えられる。またここで具現化した唐人屋敷の構成は、居留地空間を媒介としたひとつの都市モデルとして存在したと考えられるわけであるが、それが近世・近代の日本都市にどのような影響を与えたのか、あるいは与えなかったのかという問題も持ち出されよう。このように提起されるであろう諸点を考察する前段階として、設立当初において幕府側によって準備された唐人屋敷地内の空間が、時代を経ることでどのように変化していったかを読み取ることが当面の主要な課題となる。

よって本研究は、このような視点から鎖国時代における長崎唐人屋敷を一つの都市とし

てその構成を考察し、居留地空間としての内実と性格を幾分とも明らかにすることを目的としている。

長崎唐人屋敷の遺構は現在ほとんど残っていない⁹⁾。そこで考察を進めるのには、唐人屋敷に関する文献資料と唐人屋敷を描いた古図資料の二種を用い、長崎唐人屋敷の内部空間を構成する要素一住居部、廟建築等一の相互間における関係とそれによって獲得された空間の性格の考察を中心として行う。

前述したように唐人屋敷の構成・性格は前期(設立期)と後期(完成期)とでは大きく異なる。そこでここでは便宜上唐人屋敷の歴史を二つの時期に区分して考察することにした。すなわち唐人屋敷が設置された元禄年間から享保年間までを前期、元文年間から唐人屋敷の処分が決定された明治元年(慶応四年)までを後期とする。長崎唐人屋敷は幕府による鎖国政策という目的のもとに開設されたのであるが、具体的な開設の理由の中にはキリシタン防止という項目が存在していた⁹⁾。そのため設立当初は唐人屋敷地内には祭儀施設は存在していなかった。しかし、元禄三年に土地神を祀るものとして「土神堂」の建立が唐人側に許可された。また元文年間に入ると、「土神堂」以外に「天后堂(関帝堂)」、「観音堂」が新たに建立され、これらの祭儀施設の設立が出島との顕著な差異を形成することになった。これらの施設は唐人屋敷地内の構成において重要な位置を占めており、その設立が唐人屋敷地に与えた影響は多大なものと考えられる。「土神堂」のみであった時代と、それに新たに「天后堂」、「観音堂」が加わった時代では、屋敷地内の施設構成における空間の意味が変化しており、以上のことから「土神堂」のみであった時代を前期(元禄年間から享保年間まで)、そこに新たに「天后堂」、「観音堂」が加わった時代を後期(元文年間から幕末まで)とする。

2. 関連する既存研究

これまで行われてきた唐人屋敷に関する研究は、唐貿易の規模やその機能に関する商業史的見地からのもの、すなわち貿易をひとつの軸とした研究、もしくは在長崎唐人たちの生活・風俗面からの考察などが殆どである⁹⁾。一方、そのような営為が展開された場としての屋敷地に関する建築的研究はというと、ほとんどなされていないのが現状である。屋敷地内に存在していた廟建築に関する考察と二ノ門修理報告書があるくらいである⁹⁾。

すなわち唐人屋敷の建築的構成に関してはほとんど明らかにされていないのが現状であり、具体的な屋敷地内の構成は不明のままであるといえる。ここでは唐人屋敷について言及している主要な論考を取り上げその内容について瞥見することで、これまでの論考における唐人屋敷の扱われ方を整理し、検討する。

一商業史的、もしくは風俗史の見地からのもの

この分野における諸研究の特徴は、まずなによりも唐貿易もしくは唐人風俗を明らかにする・紹介するところに力点が置かれていることであるといえる。また唐人屋敷については、唐貿易・唐人風俗における一連の歴史的経緯（事柄）の中の一項目として取り上げている場合が多いといえる。以下、代表的な論考を提示し、検討を加える。

a. 福田忠昭：唐人屋敷，歴史地理，第二十七巻，仁友社，大正5年

この論文は唐人屋敷を最初に、かつ体系的に論じた貴重なものである。そこでは以下の章立てによって論が進められている。

- | | |
|-----------|-------------|
| 一、唐の稱呼を用ふ | 五、唐人屋敷の出入 |
| 二、唐人船の來航 | 六、唐通事 |
| 三、唐人宿 | 七、彩舟流 |
| 四、唐人屋敷の造営 | 八、唐人関係行事の一二 |

一、では唐という名の由来について述べており、二、では唐船來航の歴史的な事柄について述べている。三、では唐人屋敷ができるまでの唐人達の長崎での居住形態について述べ

ている。四、では唐人屋敷造営の目的（風俗上、取締上、禁教上）に関して述べた後、唐人屋敷の具体的な造営に関する事柄について言及している。またそこでは唐人屋敷内の建物の構成についての簡単な紹介も行なわれている。五、では唐人屋敷の政務にあたった役人・官吏の構成と役割、また唐人屋敷出入に関する様々な禁止事項について述べている。

唐人屋敷における禁制品の提示、唐人屋敷に出入りする傾城（遊女）に関する事柄も示されている（六、七、八については割愛する）。このように見た場合、この論文では唐人屋敷に関する一通りの事柄が順序よく述べられていることがわかる。ただ論者も述べているように、この論文は唐人屋敷に関する既存文献に基づいて当時の事柄を記述することに重点が置かれており、「批評のごときは省略することとした」となっている。つまり唐人屋敷の紹介という意味合いが強く、ここで具体的な論考が展開されているわけではない。

b. 福田忠昭：長崎市史，地誌編，名勝舊蹟部，清文堂，昭和12年

この文献は一連の「長崎市史」シリーズの中の一部で、この他にも唐人屋敷について言及している部分には同じ論者による「長崎市史 地誌編 仏寺部」（以下仏寺部）がある。

「長崎市史 地誌編 名勝舊蹟部」における唐人屋敷の項は、唐人屋敷に関する沿革が中心となっており、唐人屋敷がどのような経緯で設立され、それがどのような内的構成（建築的及び運営構造的）を持っていたかが紹介されている。以下、当該文献における章別内容を見てみる。文献における一、ではまず唐人屋敷が建築的にどのような構成要素を持っているかが説明されており、その入構に関する禁制が述べられている。また屋敷地の構成が上段中断下段から成り立っていることを述べ、各段差内にどのような建物が存在しているのかを述べている。二、では唐人屋敷の諸政務を担当する役人・官吏の構成・職務について述べている。三、では唐人屋敷がどのような経緯で長崎の地に設置されたかについて、寛永十二年に唐人船の入港が長崎一港に限られたことから始まり、その後の唐人達の長崎における居住形態や貿易形態についてまでを論じている。四、では唐人屋敷造営の目的として風紀上、取締上、禁教上の三つを挙げており、次に具体的な造営工事の概要と開設以後の唐人屋敷における主な出来事について述べている。

以上のように見てみると、この文献では具体的な各項目について論考を行うことよりも、その紹介に力点が置かれており、記録文献に則った唐人屋敷に関する情報の整理が主な目的であるといえる。また「仏寺部」では唐人屋敷の遺構である廟建築についての由来や構成が述べられている。ただここで論じられている廟建築は先程も述べたように（註5）正確に当時のものを表しているわけではなく、また屋敷地内における位置もしくは構成による空間内での働き（性格）について明らかにされているわけでもない。

c. 山脇悌二郎：長崎の唐人貿易，日本歴史叢書6，吉川弘文館，昭和39年

この文献は長崎における唐人貿易を中心としたもので、唐貿易の由来や貿易形態及び貿易法の変遷をたどり、考察を加えたものである。まずそこでは唐人貿易が長崎一港に集中された時期から幕末に至るまでの歴史が幕府の発する貿易令を中心に順次説明・検討されており、唐人貿易の推移が明確に表されている。又、唐貿易における貿易品や貿易商の系譜・構成についての考察、唐貿易における機関、唐貿易の末期等についての考察がそれに続いている。唐人屋敷に関する項は唐人貿易の推移を述べた章の中の一部にあり、そこでは唐人屋敷に関する沿革、唐人屋敷設置の理由、貿易の手順、入構することが可能であった日本人側の商人等についての事柄が順を追って述べられている。つまり唐人屋敷についてはその沿革を述べることに終始しており、文献の性格上貿易に関する事柄が特に中心となっている。それは長崎の唐貿易における一連の流れの中での長崎唐人屋敷、もしくは唐人屋敷が設置された事情については詳しいが、具体的に生活が営まれた屋敷地空間内の状況（構成等）に関する記述は乏しいし、考察の対象にはなっていない。

d. 中村質：近世の日本華僑，外来文化と九州，九州文化論集二，平凡社，昭和48年

この論文は近世日本・長崎における中国人（唐人）の活動について、鎖国以前から鎖国に至るまでの間を中心として論考を加えたものである。そこでは先ず鎖国以前の日本における唐人達の分布や長崎における華僑社会の形成についての考察があり、続いて鎖国令による唐人達の活動の変容、そして鎖国後における貿易の流れに沿った唐人達の活動の推移

が順次考察されている。唐人屋敷については貿易令の推移の中における定高制とのかかわりから述べられており、そこでは唐人屋敷の造営、唐船の入港手順、唐館内における生活の様子が概観されている。つまりここでの唐人屋敷は、長崎という大きな地における唐人の活動を考察するうえでの一つの出来事として捉えられており、この論文での目標はあくまで長崎における唐人の活動のある種包括的に見ることに存しているといえる。

e. 山本紀綱：長崎唐人屋敷，謙光社，昭和58年

この文献は長崎唐人屋敷に関する既存の論文や文献資料をもとに、これまで体系的に扱われることの少なかった唐人屋敷に関する各事柄をひとつの書物として纏めあげたものである。よってそこには長崎唐人屋敷、及びそれに欠かせない唐船もしくは唐人の活動に関する事柄が網羅されており、唐人屋敷に関する殆どあらゆることが述べられているといっても過言ではない。その本文は前編と後編とにわかれており、前編「長崎と唐人」では主に鎖国以前の長崎及び長崎における唐人達の活動が纏められている。後編「長崎唐人屋敷」では文字通り唐人屋敷についてのあらゆる事柄、つまりその開設の理由から造営に関する細目、屋敷地の管理、唐人の風習、唐人の生活等が順を追って続いており、最後に唐人屋敷の末期についての事柄が述べられている。つまりこの文献は長崎唐人屋敷をそれ自身として考察したものとして大変重要なものであるといえる。しかし、例えば「第二章 唐人屋敷の造営・開設とその規模」の「三規模と施設の概要」の項を見てみると、唐人屋敷の位置や規模、内部の建築物に関して既存の文献・論文を駆使して書かれてはいるが、その建築物の具体的な位置や規模、構成についてまでは論は及んでいない。また唐人屋敷は時代が降るごとにその内部構成を変化させているが、その変化に対する考察も存在していない。つまり建築的な観点からみるならば、この詳細な論考といえども唐人屋敷に関する事柄は十分に明らかにできていないといえる。

一建築史的見地からのもの

この見地からの研究は、先ほど述べたようにほとんどなされていないのが現状であるが、その中でも唐館内の廟建築に関する記述・論考は散見することができる。また唐人屋敷以外（以前）に、長崎における唐人が関与した建物には唐寺があるが、その唐寺に関する研究が存在している¹⁰⁾。以下では唐人屋敷地内の廟建築に関して論じた代表的な論文を挙げ、それを検討する。

f. 山口光臣：長崎の唐人屋敷における中国系寺廟建築について，長崎談叢，第七十二輯，長崎文献社，昭和62年

この論文は唐人屋敷の遺構である廟建築に関して、その建立年代や規模等について考察を加えたものである。現在唐人屋敷の跡地に残っている廟建築には「土神堂」、「天后堂」、「観音堂」があるが、それらは全て昭和中・後期に再建されたものである。またそれ以前のものでも火災等の出来事で、唐館内の廟建築は時代毎にその形態を変化させている。よってこの論文では歴史的経緯に沿った時代毎の廟建築の形態・規模について順次考察を加えている。そこでは文献資料のほかに絵図史料も用いられており、絵図を用いた唐人屋敷内の建物の検討として本論考（長崎唐人屋敷に関する建築的研究）の先駆をなしている。よってこれはこれまで明らかにされてこなかった唐人屋敷内の建築に関する研究として重要なものであり、廟建築の建築的側面を明らかにしたものであるといえる。

ただ、この論文では個々の廟建築に関する時代毎の規模や構成についてはわかるものの、それが唐人屋敷内において存在していた位置や他の建物とのつながり等、唐館内を全体としてみた場合の考察はなされていないといえる。

このようにしてみると、唐人屋敷に関して言及している文献では唐人屋敷の沿革についての一応の理解を得ることはできるものの、具体的な建築空間がどのようなものであったのか、もしくはその内部構成が時代を経るごとにどのように変化したのかについては明ら

かにされない。つまり具体的な長崎唐人屋敷の建築的空間については不明のままであり、それが如何様であったのかについて考察することはこれまでなされていなかった重要な事柄であるといえる。様々な屋敷地に関する絵図を見てみると、唐人屋敷の具体的な内部空間は大変特徴的なものとして存在したということができ、本論文の目的である唐人屋敷の具体的な建築空間についての考察は、以上の点で新たな局面を提起するものと思われる。

3. 唐人屋敷に関する資料

長崎唐人屋敷に関する資料には大きく分けて二つの種類がある。ひとつは唐人屋敷に関して記された文献資料（既存論文も含む）であり、もうひとつは唐人屋敷を描いた絵図資料である。先に述べたように、当時の唐人屋敷の遺構で現存するものはない。よって当時の唐人屋敷の構成に関する手掛かりは上記の二つの資料に限定される。

文献資料はまず原資料と論文とに分けられるが、原資料には様々な種別があり、唐人屋敷地内の坪数や建物の棟数、及び規模を記した包括的なものから唐人達の風習を記したもの、もしくは唐人屋敷の特徴やその風説に関するものまで多岐に及んでいる。また長崎唐人屋敷を描いた絵図資料は、かなり存在しているが、建築の分野ではこれまで殆ど言及されることがなかった。絵図資料には大きく分けて二つのものがある。ひとつは唐人屋敷地を平面（配置）図的に描いたもの、もうひとつは唐人屋敷地内のあるひとつの道筋にそって内部空間を順次描いた絵巻図的なものである。これらの絵図はこれまでその製作年代や描かれている年代、絵図製作者等に関して具体的な考察や分類がなされてはおらず、各絵図が掲げている情報に関する信憑性はいまだ確立されていないといえる。しかし当時の唐人屋敷の構成を具体的に記しているという点でこの絵図資料は唐人屋敷の構成を知るには欠かせない重要なものであり、本論考ではその都度絵図の信憑性を計りながら論を進めていかなければならないという困難がともなっている。以下の各章では順次必要な文献及び絵図資料を提示し、両者を比較検討することで論を進めるが、まずここでは唐人屋敷に関する建築的事柄についての資料にどのようなものがあるかについて項目別にまとめてみ

る。

一文献資料

通史的・年表的なもの 唐人屋敷の歴史的経緯（推移）を扱った通史的・年表的なものとしては『長崎實録大成正編』¹¹⁾、『続長崎實録大成』¹²⁾、『長崎畧史』¹³⁾等が基本的文献として挙げられる。そこでは唐貿易に関する事柄（例えば唐船の来航やその数等）を主軸として、唐人屋敷において起こった様々な事柄（火事や唐人騒動、唐人屋敷の敷地拡張等）が年代順にまとめられている。

唐人屋敷の概要 唐人屋敷のあらましを述べた文献資料は多く存在している。またそれらの多くはその造営をも含めて記している。代表的なものとしては、『通行一覽 卷之二百三 唐國總活部六』（嘉永六年）¹⁴⁾、『長崎實録大成正編』（明和元年）¹⁵⁾、『長崎名勝圖繪』（文政元年）¹⁶⁾等が挙げられる。

唐人屋敷の坪数 唐人屋敷はそれが開設された元禄元年から幕末に至るまでに数度の敷地拡張を経ている。唐人屋敷の建築的事柄について述べている文献はそのほとんどに敷地の坪数を記しているが、その坪数の推移をまとめて記したものは少ない。『唐人番日記』¹⁷⁾、『華蠻交易明細記』¹⁸⁾はその数少ない資料のうちのひとつである。

唐人屋敷内の建物 唐人屋敷内の建物は時代毎にその内容を変化させている。よって時代毎にその記述は変化している。唐人屋敷の建築的事柄について述べている文献は概ね三つの部分に分けて唐館内の建物を記している。まずそれは二ノ門内について、次に大門と二ノ門の間について、そして最後に大門の外についてである。これら文献の特徴は唐館内建物の時代的变化にはほとんど触れていないところにあり、それぞれ各時代における内部の建物を記すにとどまっている。以下各建物について。

「唐人部屋」 「唐人部屋」に関する記述には二つの種類がある。ひとつは「唐人部屋」

の間数とその数を記したもの、もうひとつは「唐人部屋」の性格を記したものである。前者についての記述は様々な文献にみることができる。後者に関してはその文献の数は限られており、管見するところでは『袖海編』¹⁹⁾、『長崎歳時記』²⁰⁾等がある。

廟建築 廟建築に関する記述にも「唐人部屋」と同じように二つの種類がある。ひとつはその棟数（と場合によっては間数）を記すもの、もうひとつはその由来・性格を示すものである。前者は唐人屋敷内の建物を扱っている文献にほとんどみることができ、後者は例えば「長崎市史 地誌編 仏寺部」²¹⁾、「史蹟名勝天然記念物調査報告書」²²⁾等にまとめて記述されている。

「市店」 「市店」に関する記述にも二つの種類があり、ひとつはその棟数・規模、もうひとつはその性格について述べているが、前者に対して後者の記述は少ない。『長崎名勝圖繪』（文政元年）²³⁾にはその後者についての記述がある。

新地藏 唐人屋敷の付属倉庫としての新地藏に関する文献は、唐人屋敷自体のものに比べて少なく、かつ詳細に欠いているといえる。この新地藏も時代によってその内部構成を変化させているが、その間の事柄については「長崎市史 地誌編 名勝舊蹟部」²⁴⁾が詳しい。

一絵図史料

唐人屋敷を描いた絵図史料は先ほど述べたように大きくは二つに分類することができる。そのほかにも唐人屋敷を描いたものとしては唐人屋敷を鳥瞰図的に描いたものや唐館内の或る部分について描いたもの、もしくは地図上に唐人屋敷を描いたもの等が挙げられる。ここでは平面（配置）図的に描いたものと絵巻図的に描いたものの特徴について述べる。また主な絵図については本論文の最後に絵図資料として掲載する。

平面（配置）図的に描いたもの この絵図類の特徴は、唐人屋敷の内部構成が一目でわかるところに存しているといえる。一般的には屋敷地の外郭や内部の建物の位置、その数、

もしくは建物以外の道や井戸等に至るまで詳細に描かれている。なかには建物の間数に至るまで記しているものもある。またこの絵図類はそのほとんどに敷地の坪数を明記しており、なかには屋敷地内の建物を用途別に色分けして欄外に個条書きにしているものもある。ただこの種の絵図では内部の配置・構成は判明するものの、具体的な建物の外観・内観・意匠等についてははっきりとしない。

絵巻図的に描いたもの この絵図類の特徴は唐船の来航から唐館内に至るまでの道筋が実際の唐人達の行動と同じようにして展開するところにあるといえる。そこではまず停泊中の唐船があり、その唐船から荷物が新地蔵へと運ばれる様子が描かれている。次に新地蔵内での様子があり、唐館へと渡ってゆく唐人達が描かれる。唐館内では「唐人部屋」において酒宴を開いている唐人達が描かれ、廟建築前では博打を行っている唐人達が描かれている。このようにして唐船の来航から唐館内の生活が順次展開（描写）されている。

そこでは先程の平面（配置）図的なものでは見られなかった唐人達の生活が描かれており、唐館内の細かい点（例えば唐人の衣装や「唐人部屋」内の様子）がわかるようになっている。ただこの絵図類では唐館内の建物が全て網羅されてはおらず、またその数、間数といった具体的な事柄（数字）は記されていない。しかし、平面（配置）図的なものではわからない「唐人部屋」の意匠や廟建築の意匠が描かれているという点で、この絵図類は大変貴重なものであるといえる。

このようにみても、唐人屋敷に関する絵図資料では平面（配置）図的なものと絵巻図的なものがそれぞれ互いの欠点を補う形となっていることがわかる。しかし、そこでの問題点が両者における描写内容の分布の違いに存在している。平面（配置）図的なものは唐館内がくまなく描かれてはいるが、反面意匠的な詳細がわかりづらい。絵巻図的なものでは立面等における詳細な描写があるが、反面描かれる建物が限られてくる。よって両者を完全に比較・対応させて検討することは難しく、本研究ではできるかぎり対応できるかたちで論を進めていくことにする。

4. 論文の構成

本論文は序論と結論を含む六章から成る。

第1章の序論では、研究の目的と方法を述べ、関連する既存研究を検討し、唐人屋敷に関する資料の性格を概略的に提示する。

第2章では、唐人屋敷の沿革として、創設の背景、立地条件、唐人屋敷の末期等について概観し、唐人屋敷の歴史的経緯を明らかにする。

第3章では、前期長崎唐人屋敷の構成について、とりわけ元禄年間を中心として考察を行い、その空間構成の特徴を明らかにする。

第4章では、後期長崎唐人屋敷の構成について、とりわけ天明年間から文化年間の間を中心として考察を行い、その空間構成の特徴を明らかにする。

第5章では、唐人屋敷の付属倉庫である新地蔵について、歴史的経緯にのっとり構成の推移を明らかにし、その空間構成の特徴を明らかにする。

第6章の結論（総論）では、上記の各章で明らかになった特徴をとりまとめるとともに、長崎唐人屋敷の持つ史的意義について言及する。

第1章 註

- 1) 山口光臣：長崎の唐人屋敷における中国系寺廟建築について，長崎談叢，第七十二輯，長崎文献社，昭和62年，p.19
- 2) 唐人屋敷の開設はさまざまな資料から元禄元年着工、同二年竣工ということで一致しているが、その閉鎖時期に関しては諸説が考えられうる。ここでは幕府によってその処分が決定された明治元年（慶応四年）とした。
- 3) 山脇悌二郎：長崎の唐人貿易，日本歴史叢書6，吉川弘文館，昭和39年，p.73
- 4) 『文化二丑年改 乙名頭取惣町乙名勤方 并諸加役大意書』（「長崎乙名勤方 附御触書抄」，長崎文献社，昭和53年，p.99）における「普請方立合」には、「唐人屋舗館内本部屋并市店共、唐人共自分好二而建継修覆、新規ニ小部屋等建替申度、」とあり、唐人達自身の営為によって唐館内の建物が普請されたことを物語っている。
- 5) 中村質：近世の日本華僑，外来文化と九州，九州文化論集二，平凡社，昭和48年，p.187～188
- 6) 現在の館内町（旧唐人屋敷地）には唐人屋敷の遺構として「土神堂」、「観音堂」、「天后堂」のみが存在するだけである。これらの遺構も唐人屋敷時代のものでなく、山口前掲書（註1）「長崎の唐人屋敷における中国系寺廟建築について」（p.19～20）によれば、原爆によって倒壊あるいは破損したため、昭和五十年度から昭和五十二年度にわたって復元・補修されたものである。
- 7) 山脇前掲書（註3）：長崎の唐人貿易，p.75～81
- 8) 浜崎国男：長崎異人街誌，葦書房，昭和50年
山脇前掲書（註3）：長崎の唐人貿易，日本歴史叢書6，吉川弘文館，昭和39年
山本紀綱：長崎唐人屋敷，謙光社，昭和58年
福田忠昭：長崎市史，地誌編，名勝舊蹟部，清文堂，昭和12年
山脇悌二郎：長崎県史，対外交渉編，吉川弘文館，昭和60年

岩生成一：近世日支貿易に関する数量的考察，史学雑誌，第六十二編，第十一号，山川出版会，昭和28年

中村質：近世の日本華僑，外来文化と九州，九州文化論集二，平凡社，昭和48年

- 9) 山口前掲書（註1）：長崎の唐人屋敷における中国系寺廟建築について

福田忠昭：長崎市史，地誌編，仏寺部，下，長崎市役所，大正12年

長崎縣史蹟名勝天然記念物調査委員會：史蹟名勝天然記念物調査報告書，第二號，大正11年

山口光臣：重要美術品 唐人屋敷二の門修理報告書，長崎市教育委員会社会教育課，昭和35年

- 10) 長崎唐寺に関する研究としては、

丹羽漢吉：媽祖からみた長崎唐寺の特性，日本建築学会研究報告九州支部第3号，昭和29年

宮田安：長崎崇福寺論攷，長崎文献社，昭和50年

宮田安：長崎唐寺の末庵，黄檗山萬福寺文華殿，平成2年

山本輝雄：九州の黄檗宗寺院における門形式および天王殿の位置と向きについて，日本建築学会計画系論文報告集第415号，平成2年

古谷一彦，土田充義他：黄檗宗伽藍の特徴について，日本建築学会九州支部研究報告計画系第32号，平成3年

等が挙げられる。

- 11) 『長崎實録大成正編』（明和元年），長崎文献叢書，第一集・第二卷，長崎文献社，昭和48年
- 12) 『続長崎實録大成』（明和七年），長崎文献叢書，第一集・第四卷，長崎文献社，昭和49年
- 13) 金井俊行：長崎畧史，長崎叢書，上巻，長崎市役所，大正15年
- 14) 『通行一覽 卷之二百三 唐國總活部六』（嘉永六年），国書刊行会，明治45年
- 15) 前掲『長崎實録大成正編』（註11)

- 16) 【長崎名勝圖繪】(文政元年), 長崎文献叢書, 第一集・第三卷, 長崎文献社, 昭和49年
- 17) 【唐人番日記】, 海色, 第二輯, 海色社, 昭和10年
- 18) 【華蠻交易明細記】, 長崎県史, 史料編, 第四, 吉川弘文館, 昭和40年
- 19) 汪鵬: 袖海編, 唐人屋敷, 長崎県市, 史料編, 第三, 吉川弘文館, 昭和41年
- 20) 【長崎歳時記】, 長崎県史, 史料編, 第四, 吉川弘文館, 昭和40年
- 21) 福田前掲書(註9): 長崎市史, 地誌編, 仏寺部
- 22) 長崎県史蹟名勝天然記念物調査委員会前掲書(註9): 史蹟名勝天然記念物調査報告書
- 23) 前掲【長崎名勝圖繪】(註16)
- 24) 福田前掲書(註8): 長崎市史, 地誌編, 名勝舊蹟部

第2章 長崎唐人屋敷の沿革

1. 序

長崎唐人屋敷の沿革は、日本における唐貿易の歴史的経緯及びその他の貿易形態(ポルトガル、オランダ等)との関係から述べられるのが一般的である。ここではまず、代表的な論考における記述を抜粋することで唐人渡来に関する大まかな枠組みを確認し、次に順を追って唐人屋敷の創設に関する経緯、立地条件、その末期等について見てみることにする。

2. 長崎における唐人渡来の経緯

長崎唐人屋敷に関する体系的かつ基本的な論考として福田忠昭による「長崎市史 地誌編 名勝舊蹟部」がある。そこでは唐人屋敷設営までの長崎における唐人の居住形態や唐船の来航についての記述がある。以下に引用する。

「唐人船の入港は長崎一港に限られたのは寛永十二年である。従前は薩摩防ノ津、阿久根、京泊、肥前口ノ津、島原、大村、横瀬浦、五島、唐津、筑前博多、豊後府内、長門赤間ヶ關、紀州和歌ノ浦、和泉堺、伊勢安濃津、上總、南部等殆んど日本全國に亘りて着岸して居たのが此の年長崎一港に限られた。古記の記するところに據れば長崎へは慶長五年より入港せしものであると。唐人船が入港して貿易が開始された當時は、輸入品の検査や税金の徴収もなかった。全く自由相對の貿易であるから、唐人等は勝手に上陸して、積荷は知己を便りてそこに止宿し陸揚をなし、その仲介に依りて賣捌いた、之を船宿と稱へた。手輕き唐人は荷物を肩に擔ぎて町々を行商した。富裕なる者は邸宅を構へ、妻妾を娶り奴婢を使用し

て商賣を行った。…（中略）…當時の唐人船輸入品の主なるものは藥種、砂糖、織物、陶磁器類で一船大抵銀拾貫目くらい多くも貳中貫目を超えない程度のものであったけれども、内地人の生活の程度が低かったので一船の口錢銀を得れば優に若干の富を作り、忽ちにして貧富地を換ふることが出来たので、市民は相競ふて船宿たらんことを希ひ、唐船見ゆとの報至れば、市民は時を移さず小船を仕立てて港外に唐船を迎へ、我先にと唐人船に取付き宿舎の約束をなし、或は市内船宿關係者に依頼して宿舎に指定されんことを企てた。斯くて契約なれば唐人等は何町何某方に止宿する旨を表示する。此を差宿と言った。奉行竹中采女正は切支丹より轉べる者にその賞として船宿を命じたこともあった。然るに唐人中で難破の爲め當地に送り越された者や、差宿の氏名が間違つて居た場合は當局に於て適宜の旅宿を指定した。之を振宿と呼んだ。」¹⁾

「寛永十八年唐船々宿に錢銀を一艘三貫目と限定して其の額を超ふることなからしめ、過剰あれば之を町内に分配せしめて不平の聲を封じた。然るに船宿を有する町は常に口錢銀の分配あれども、之を有せざる町は唯傍觀するのみであるので、此等の町々より又々不平の聲が出た。夫れで馬場奉行は種々考慮の末總町配分の法を創定した。即ち先づ内外各町の順次を定めて入港唐船を配當し、而して當該唐船に關する一切の周旋に當らしめ、従つて該船よりする利益は町内に収めしめた。これを宿町と稱へた。夫れで唐船入港すれば所定の町は、全部の積荷は、引受けて其の販賣方を仲介し、其の間其の船長は該町乙名宅に止宿せしめ船員を町中に分宿せしむる。商事終りて後滞在中諸雜費を差引き、口錢銀は町内に分配した。承應二年に至り宿町のみでは一船の周旋不行届の經驗に顧み、別に輔佐町を設けて消防の勤務や、人夫雇入れ監督等の事務に當らしめた。之を附町と云った。」²⁾

寛永十二年、唐船の入港が長崎一港に限られた後、唐人達はこのように長崎の地元住民

との間での様々な形態による滞在・貿易活動を行っていたのであるが、そこでの特徴は唐人達がじかに長崎住民達と接触しながら諸活動を行ったということにある。そこでは唐人達の滞在と貿易活動が一体のものとしてあり、唐貿易に対する具体的な窓口は地元住民に広く開放されていたといえる。唐人屋敷が開設されるまで唐人達と地元住民は上記のような自由な關係を保っており、後の唐人屋敷における閉鎖的な關係とは全く異質であると言える。つまりこのような自由な關係の抑圧が後の唐人屋敷設立のための主要な目的のひとつとなるのである。

3. 唐人屋敷開設の理由

唐人屋敷開設の理由に関しては、諸書にその動機についての考察がある。以下は「長崎市史 地誌編 名勝舊蹟部」におけるその動機に関する記述である。

「一、市内散宿の唐人等は市民と雜居し中には市民と婚姻關係を有する者、或は雇主となりて多數の奴婢を使用する者等が尠くは無い。元來外國人であるから色々の點に於て、取締上の混雜を來し不都合を來せし例も尠く無い。而して長崎市民中には自ら進んで唐人と姻戚關係を作り親交を結ばんとして居る者も相當に居る状態で、随分關係が複雑で取締上非常に困難を感じて居る。

二、船宿即ち小宿と宿町との關係が常に面倒な問題を惹き起すので、是亦取締上よりし市政上よりして當局の頭痛の種となる。

三、特に危険なのは吉利支丹の問題である。幕府は吉利支丹を禁遏せんとして葡人を放逐し、阿蘭陀人を出島に幽閉し、海外に在留する多數の同胞の歸國を禁じ又邦人の海外雄飛を封じ去つたのに、毎年多數の支那人は勝手に長崎に來り又還つて往く。その多數の中には定めし吉利支丹も居るであろう。彼等は長崎在留中如何なる機會に於てか、市民に吉利支丹宗を傳播せんも知るべからず。之を取締るは中々に面倒である。特に幕府が神經を尖らしたのは貞享末年唐人の風説書に

よれば、近年南蠻より邪宗門の宣教師唐國へ渡來して唐國に邪宗門を宣布し、當時唐人間に相當の信者があることの一説である。」⁹⁾

このように唐人屋敷の開設の動機はおおきく三つに分類される。ひとつは禁教上、もうひとつは風紀上、そして貿易上である。ここではこれ以上立ち入らないが、結果、長崎における唐人達の待遇は先程見た地元住民とのある種自由な関係から、唐人屋敷という閉鎖された区画内に隔離されるというものへと変化し、この関係が幕末に至るまで継続することになるのである。

4. 唐人屋敷の創設

唐人屋敷創設の経緯に関しては、様々な文献に關係する記述が存在している⁹⁾。ここでは「長崎實録大成」を基本文献として見てみることにする。そこでは以下のように述べられている。

「元禄元戊辰年、山岡氏、宮城氏在勤之節、上意を蒙り松平主殿頭、松浦肥前守立會に而、新たに唐人屋敷造營有之、但寛永十二年已後、唐船長崎湊一方に着船せしめしより、此年に至るまで凡五十餘年に及へり、然るに是迄唐人町宿にて、諸人に親しく會合する事不可然とて、十善寺村御藥園之地を撰み、山内を開き樹木を伐とり地形を均し、上中下段の道坂石垣等を築き外郭を圍ひ、唐人共住館を造營あり、その年九月廿五日事始、翌二年己巳四月十五日迄に普請成就し、唐人不殘構之内に在住せしめらる、但、普請方諸入目銀六百三十四貫四百四十目餘、此内四百貫目公儀より御取替にて、二百三十四貫目餘は總町中より差出す、右之御立替銀は、唐船主共差出す屋賃銀を以、當巳年より五ヶ年に上納す、」⁹⁾

このように唐人屋敷は、元禄元年（1688）にそれまで長崎の町宿に逗留していた唐人を、

物理的に明確に隔離するために設けられた。そのために藥園⁹⁾の跡地を造成し、周囲に囲いを持つ屋敷を設けた。唐人屋敷が開設されると、当時長崎にいたすべての唐人はそこに居住させられた。その数は元禄二年（1689）、つまり竣工した年において4,888人であった⁹⁾。

屋敷地の施設構成に関する記述内容については後に触れるが、まずここで注目しておきたいことは、公儀（幕府）が拠出した普請金は立替銀として唐人達の家賃によって五ヶ年間に還付された事実である。これによって屋敷地のある種の権利が唐人と残余金の拠出者である長崎総町中に留保されたと考えられる⁹⁾。このことは、出島におけるオランダ人がその家屋敷を終始「賃貸」として借り受けていたこと⁹⁾と比較すると、重要な差異であると思われる。

また元禄十二年（1699）には唐人屋敷の付属倉庫である新地藏が着工し、元禄十五年（1702）に完成している。この新地藏は、多量の物資を荷揚げ・保管する専属の倉庫がない唐人屋敷のために浜先の海中を埋め立てて造られたもので、その規模は東西七十間、南北五十五間、三千五百坪の敷地をもつものであった¹⁰⁾。

唐館設立当時長崎に訪れていたケンペルは、十善寺御藥園の地に唐人屋敷が造られたことについて、「極めて短日月の間に長屋風の木造家屋が幾棟も建てられ、外に濠溝を巡らし、格子戸をつけ、二重門を設け、頑丈な番所を置き、全域は五月にはシナ人を閉塞して住まわせる嫌な牢屋の姿に変わった」¹¹⁾と述べ、屋敷地の構造を素描すると同時にその持つ性格を指摘している。實際唐人たちは、「ここから一步も出ることができない」¹²⁾のが原則で、妻子やその他女性の渡來が禁じられている彼らの楽しみは「酒宴を催すか、歌舞音曲などによってその退屈をまぎらわすか、又は日本人で出入りを許されている唯一の女性である傾城（遊女）を呼び入れて戯れる」¹³⁾位のものであった。

5. 立地条件

唐人屋敷が長崎の地に設けられたのは、出島が、市中に散宿していたポルトガルおよびイスパニアの商人を移住させるために寛永十一年（1634）に江戸町の地先海上に築造され

たのち、寛永十八年（1641）にオランダ人商館として指定されたという時代背景のもとで
 のことであった。そして出島と唐人屋敷は実際に設けられた場所も近かった。図1（肥前
 長崎図）は当時（文政四年）の長崎を描いたものである。この図でわかるように、唐人屋
 敷と新地蔵、そして出島はそれぞれ海を挟んで並ぶようにして存在していた。しかし出島
 が海上を埋め立てた土地であったのとは対照的に、唐人屋敷が三方を囲まれた内陸部に存
 在していたことは、これらの施設の近接性とは裏腹に、出島と唐人屋敷の地理的な意味づ
 けによる差異を表している。鎖国体制を完成させるという名目からすると、そのどちらも
 が一般の長崎住民との接触を阻むという点で、閉ざされた空間を形成することがその目標
 となるところだが、出島が陸地と出島をつなぐ線として、（船を除けば）ひとつの橋しか
 持っていないのに比べ、唐人屋敷は陸続きの地に存在していたということである。「シナ
 人には日本の商人が食料品を毎日門の入り口の処まで持って来て並べ、直接購入すること

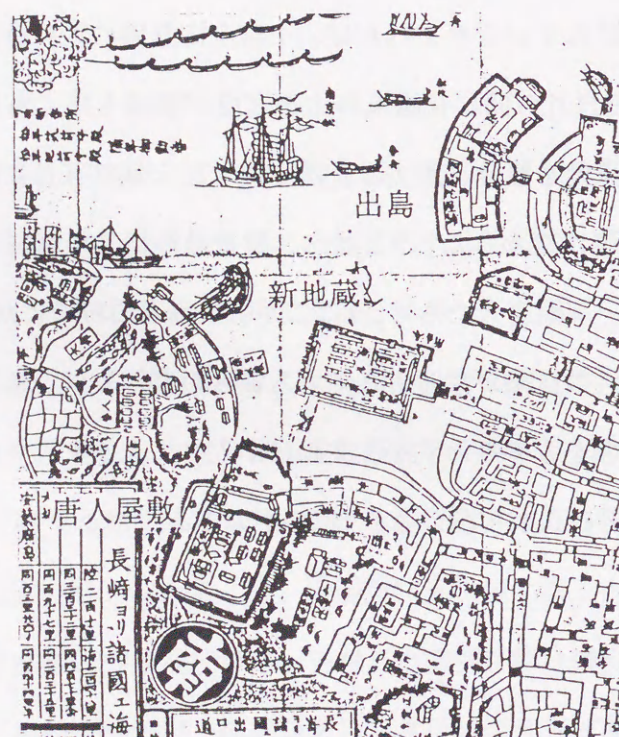


図1 肥前長崎図（部分）（『日本の古地図』所収，創元社，p.109）

が許されている」¹⁹とあり、このことは唐人と地元住民との地理的および心理的な距離の
 近さを物語っている。

6. 唐人屋敷の末期

長崎唐人屋敷は年表的には慶応四年にその解体が始まっている。つまり唐人屋敷は元禄
 元年から慶応四年までの約180年間もの長い間、長崎の地において唐貿易の中心として
 活躍したのである。唐人屋敷の解体に関する文書が「唐館新地処分書類」として現在残っ
 ている。以下に引用する。

「慶応四戊辰三月起

唐館新地処分書類 租税第二部地理係

唐商引立之議に付申上候書付 唐人屋敷差配役

一 元禄元辰年 唐人屋敷御取建 書面之趣窺仕候

新地

唐館居掛役

惣坪九千四百三拾三坪

此地子銀三貫九百六拾三匁一厘九毛五

此作徳銀壹貫七百廿匁五分一厘五毛四

一 船主部屋 拾参軒但追々崩落、当時三軒相残居申候

一 小部屋 七拾軒但追々崩落、当時凡三拾軒相残居申候

右者初発旧幕府二而建渡相成其後は総而自普請に而仕出建替等仕申候

一 館内土神堂 但土神ヲ祭り有之候

一 天后堂 但船神ヲ祭り有之候

一 観音堂 但観音 関帝を祭り有之候

右者追々渡来之船主共依願自普請を以取建

ここでは唐人屋敷における主要な建物である「船主部屋（本部屋）」や「小部屋」が「追々崩落」し、その数を減じていることがわかる。「廟建築」はその数を増しているが、その「廟建築」に詣でる唐人達の数減少がここでは推測される。唐人屋敷解体をもたらした状況はこのようにその内部における建物の状況からも窺うことが出来るが、本論文の目的はこのような唐人達の減少の契機・理由について問うものではないので、ここで詳しく掘り下げることはしない。この時期、唐人達は明治四年の日清修好条規の締結まで無条約国民として残されていた。唐人屋敷の解体は唐人貿易における拠点の喪失を意味しており、場を失った唐人達はそれでも様々なかたちで長崎における貿易を続けている。現在の長崎中華街は当時という新地蔵のあった場所に存在しており、これも唐棺を失った唐人達の活動におけるひとつの名残であるということが出来る。明治四年の日清修好条規以後、日本と中国とは新たな貿易関係に入った。この結果、唐人屋敷及びそれを含んだ唐人貿易は終結したといえる。

7. 結

以上、寛永十二年の幕府の令による唐人船の長崎一港への集中から唐人屋敷の創設、そしてその末期について概観したわけであるが、唐人屋敷の創設はそれまでのある種自由な雰囲気の中で行なわれていた唐貿易の性格を一変させる重要な事件であったといえよう。

各唐船とそれに対応するかたちで地元住民が取り持つ役割は当初は個別でかつ自由なものであった。それが唐人屋敷が創設されることで貿易及び唐人達の滞在がひとつの窓口に限定されることになり、以降幕末までに至っている。このことは建築的視点から見れば、長崎町中に分散していた唐人達がひとつの場所に集められることにより、ある種の「場」の形成が行われたことを意味する。具体的なその場は同じ居留地である出島とは異なった内陸部にあり、はるかに大きな規模で設けられている。結論先取的に言えば、後の

長崎唐人屋敷においてはそこに「異国の都市」が形成されるのであるが、唐人屋敷においてひとつの場所への集中という事柄と出島とは異なった位置（内陸部）・規模（約二倍半）という事柄は、後の変化を準備する前提条件としての役割、つまり唐人屋敷の特徴を表している事柄であるといえる。

第2章 註

- 1) 福田忠昭：長崎市史，地誌編，名勝舊蹟部，清文堂，昭和12年，p.744～746
- 2) 福田前掲書（註1）：長崎市史，地誌編，名勝舊蹟部，p.747
- 3) 福田前掲書（註1）：長崎市史，地誌編，名勝舊蹟部，p.753～754
- 4) 唐人屋敷の創設に関する資料としては、
『長崎實録大成正編』（明和元年），長崎文献叢書，第一集・第二卷，長崎文献社，昭和48年
『長崎港草』（寛政四年），長崎文献叢書，第一集・第一卷，長崎文献社，昭和48年
『長崎名勝圖繪』（文政元年），長崎文献叢書，第一集・第三卷，長崎文献社，昭和49年
『長崎古今集覧 下巻』（文化元年），長崎文献叢書，第二集・第三卷，長崎文献社，昭和51年
『通行一覽 卷之二百三 唐國總活部六』（嘉永六年），国書刊行会，明治45年等がある。
- 5) 前掲『長崎實録大成正編』（註4），p.247
- 6) 「十善寺御薬園」ともいう。
- 7) 山脇悌二郎：長崎の唐人貿易，日本歴史叢書6，吉川弘文館，昭和39年，p.81
- 8) また山脇前掲書『長崎の唐人貿易』（註7，p.74）では唐人屋敷造営費に関して『元禄唐人屋敷覚書』を引いて以下のように述べている。
「総工費六百三十四貫四百四十三匁四分七厘一拂（うち四百貫は幕府から貸し与え、二百三十三貫六十九匁六分七厘一拂は長崎地下配分銀から支出し、残額一貫三百七十三匁八分は、薬園地にあった土蔵解体の古材木、買入れ材木の遣い残りなどを、入札に付して得た）をかけて、翌元禄二年四月二日に出来上がった。」
唐人屋敷の造営は幕府と長崎総町中がそれぞれ普請金を出しあって行なったもの

であり、設立後の唐人屋敷の具体的な運営は長崎総町中が中心となって行なったのである。

- 9) 森岡美子：鎖国期の出島図，『出島図—その景観と変遷—』研究篇，第二章，長崎市出島史跡整備審議会編，昭和62年，p.241～243
- 10) 福田前掲書（註1）：長崎市史，地誌編，名勝舊蹟部，p.770
新地蔵に関する詳しい事柄については第5章参照のこと。
- 11) エンゲルベルト・ケンペル：日本誌（改訂・増補）—日本の歴史と紀行—，下巻，霞ケ関出版，昭和48年，p.123
- 12) 汪鵬：唐人屋敷，外国人の見た日本，1．南蛮渡来以後，筑摩書房，昭和37年，p.157
- 13) 山本紀綱：長崎唐人屋敷，謙光社，昭和58年，p.305
- 14) ケンペル前掲書（註11）：日本誌（改訂・増補）—日本の歴史と紀行—，下巻，p.124
- 15) 『唐館新地処分書類』（慶応四年）：長崎県立長崎図書館蔵

第3章 前期長崎唐人屋敷の構成

1. 序

序論において述べたように、本論考では長崎唐人屋敷の存続期間を前期と後期とに分けている。本章ではその前期の構成について文献及び絵図資料を用いて考察を行う。

前期は唐人屋敷が創設された元禄元年から享保二十一年までをその対象としているが、その中でも特に元禄年間を中心とした時代に関する文献及び絵図資料が存在しているため、ここではその元禄年間を中心として論を進めることにする。

開設当初の長崎唐人屋敷は幕府側によって整備された空間に唐人達が収容されていた。

よって元禄年間における長崎唐人屋敷の構成に関する記述は、その幕府側によって設けられた内部空間の構成の特徴を中心として行うことになる。

研究方法としては、唐人屋敷に関する文献と唐人屋敷を描いた絵図の二種の資料を用い、唐人屋敷の内部空間（とりわけ二ノ門内）を構成する要素－住居部、廟建築等－の相互間における配置関係とそれによって獲得された空間の性格の考察を中心として行う。

2. 文献資料

前期唐人屋敷の建築に関する文献は、そのすべての時代を補えるほど豊富に存在しているわけではなく、唐人屋敷が開設された元禄年間に関するものもあまり存在してはいない。

ここでは比較的まとまった史料である『長崎覺書』（『通行一覽』内所収）を用いて元禄期の唐人屋敷の様子を伺ってみる。『長崎覺書』はその出版年代が不明とされているものであるが、そこに記述されている内容をみると、建物の間数、棟数、及び敷地の坪数等においてそれらを表す数字が具体的に細かく記載されており、建設時の文書にのっとって記されたものと考えられる。またその記述は「初年より元禄七戌年迄」という言葉に続いて記されており、元禄年間初めの頃の唐人屋敷に関する記述とみることが出来る。

『長崎覺書』は元禄期の唐人屋敷について以下のように記述している。

「一 初年より元禄七戌年迄、屋敷間數圍内、東之角より南之角まで五十七間半程、南の角より西の角迄九十三間程、西角より北の角迄七十六間程、但折廻し北の角より東の角まで九十六間程、惣坪數八千十五坪半、自注但畠地千六十五坪、辰未申三年に加はる、中門より外長屋總廓六百五十四坪六勺、自注、但此内戌年百五十四坪廣かる、四方練堀高さ七尺五寸より一丈二尺迄、自注、厚二尺七寸、北四拾七間程箱の小樋、餘は中門内外境合四方堀忍返し、自注、元禄戌年出來す、但間數四百五十四坪、自注、一間に付八匁四分二厘五毛、地子銀三貫八百四十七匁六分五厘、
一 長屋十九棟、部屋數五十 三間に十八間七棟、但十四部屋、三間に二十間二棟、但四部屋、三間に二十七間八棟、但二十四部屋、三間に三十六間二棟、但八部屋
風呂屋一棟、自注、三間に七間一間に折廻し、庇有、自注、是は元禄三午年立、腰掛一棟、自注、二間に十五間、元禄七戌年年立、辻番所五棟、自注、一間に一間半、裏門一ヶ所、自注、□八尺程、
一中門の外長屋、自注、二間に三十四間、但折返廻し、内、二間は御檢使部屋 三間は大門 二間は内外町乙名部屋 八間は乙名部屋 九間は通事部屋 五間は番所 五間は通事部屋 札場は 三間に五間一軒 但、折廻し一間の庇、又一間半に三間御檢使部屋
中門の外北の堀際 番所一棟、一間に一間、同出御番所一棟、自注、一間に一間半、但後半間の庇有、
一大門の外波戸、自注、古來之通り筋に、薩摩屋敷二ヶ所と町屋敷一ヶ所之處、内外町中より買足、東北の間二十八間程、南西の間二十五間程、東南の間三十二間半程、西北の間十七間程、坪數六百五十五坪半、大藏一軒、自注、三間に二十間、番所一軒、自注、三間に三間半、但一間半に二間の仕續有、」¹⁾

以上の記述において、まず唐人屋敷の総坪数が語られ²⁾、次に唐人屋敷内の施設について三つの部分に分けて、その内容が語られている。その三つの部分についての記述では、まず唐館の構内（中門内）には唐人達が居住する「長屋」とよばれる施設、「風呂屋」、「腰掛」等、唐人達の為の主要な生活用施設があり、次にその唐人達を管理するための役所の機能を持った施設（大門と中門の間）、最後にその他の施設（大門の外）があると記されている。

しかしここではそれらの施設が実際どのような構成をもって配置されているかは述べられていない。このことはまた『長崎覺書』だけではなく、その他の唐人屋敷を扱った記述の殆どにあてはまる事柄である。その中で唐人屋敷の内部構成について述べてある数少ない例が『長崎市史 地誌編 名勝舊蹟部』である。引用、参照その他について何も述べていない以下の記述は、『市史』著者による独自の考察と思われるが、これまで殆ど述べられたことのない唐人屋敷地内の空間構成（地形及び施設配置）について触れている点で、ひとつのモデルになると思われる。その分類内容については後に検証するが、『長崎市史』では唐人屋敷地内の構成について、その内部空間（中門内）を「地形によりて之を三別し、建物の配列によりて四に區別することが出来る」³⁾としている。以下その分類方法を記す。

「地形に依るもの」

上段 稲荷岳に接する部で横貳拾間位の地は構内の最高部であり開拓の際懸崖を削りて平地を造つた部分で南北一列に石壁を築きて屋舎九棟 参間に参拾六間貳棟、参間に貳拾七間四棟、参間に拾八間参棟を建て元禄二年正月入港の唐人達を収容した所である。（中略）

中段 上段より巾約貳拾間位の地域で二ノ門に近き處は其の間更に二段となって居る。新開當時は二ノ門に近く東西に相並びて五棟 参間に貳拾七間貳棟、参間に拾八間参棟 土神堂の北隣上段に四棟参間に貳拾七間参棟、参間に拾八間壹棟 其の南方に上段に近く壹棟 参間に拾八間 （中略）

下段 土神堂の南北に亘る地で此の部には土神堂背後に壹棟 参間に拾八間 南隅

に浴場壹棟」⁴⁾

上記の事柄については「以上は建設當時のものである」とされている。また「建物の配置に依るもの」⁵⁾としては、

- 一、構内の中央部
- 二、宿舍部
- 三、一と二の南に接する部
- 四、一の南西側なる塀に沿へる狭長の區域

の四つを挙げている。次に「更に唐人屋敷全部に就いては同じく三別することを得る」⁶⁾として以下の三つの区分を用いている。

- 一、構内唐人在住地
- 二、官吏駐在地
- 三、一及び二を除ける地域

最後の三つの分類方法は先ほど挙げた『長崎覺書』における記述スタイルと同じものである。しかしこのように述べられても実際の唐人屋敷内の空間が如何様であったかは分かり難い。そこで次に古図を用いて当時の模様をより具体的に伺ってみたい。

3. 絵図資料

長崎唐人屋敷を描いた古図資料は、かなり存在しているが、建築の分野ではこれまで殆ど言及されることがなかった。この種の古図には大きく分けて二つの種類が存在している。

ひとつは屋敷地全体を平面（配置）図的に描いたもの、もうひとつは唐人屋敷地内のあるひとつの道筋にそって内部空間を順次描いた絵巻図的なものである。そのような中で元禄頃の様子を描いた古図としては長崎県立長崎図書館所蔵の「唐人屋敷図」（図1）と神戸市立博物館所蔵の「唐蘭館図巻」（図2）とがある。前者は平面（配置）図的なもの、後者は絵巻図的なものに相当する。「唐蘭館図巻」は御用絵師渡辺秀石によるもので、元禄十二年（1699）頃の様子を描いたものとされている。『唐通事会所日録』には、元禄十二年（1699）四月、幕府巡見使・萩原重秀と林忠和が唐蘭館を視察し、御用絵師の渡辺秀石に命じて両所の絵画を作らせたとある⁷。絵画の製作時期とその描かれた時期とが一致している保証はないが、「土神堂」が存在していること、竹林が存在していること（元文元年にはここに「天后堂」が建てられる）により、まずこの絵が元文年間以前のものであるのは確かである。

「唐人屋敷図」は筆者は不明であるが、年代に関しては「長崎市史 通交貿易編 東洋諸國部」において元禄年間とされており、その描写内容が上で述べた「唐蘭館図巻」における描かれ方と内容が一致すること（土神堂の存在と長屋の位置、及び竹林の存在）から、「唐人屋敷図」が元禄年間のものであるならば、「唐蘭館図巻」における描写が少なくとも元禄年間、もしくは元禄年間を含んだそれ以降の期間（元文年間まで）を表している可能性は高く、先の元禄十二年頃の描写という記述と照らし合せた場合に、この絵が少なくとも元禄年間の状況を含んだものであるのは、ほぼまちがいないと思われる。よってこれら二つの絵図をここでは元禄年間の状況を現わしているものと仮定し、そこで上の二つの絵図史料に基づいて唐人屋敷の構成をみてゆくことにするが、ここではその内部空間の特徴を際立たせるために唐人屋敷地内におけるさまざまな要素を取り出して、中門（二ノ門）内を中心に、それらの位置関係から内部空間を記述してゆくことにする。

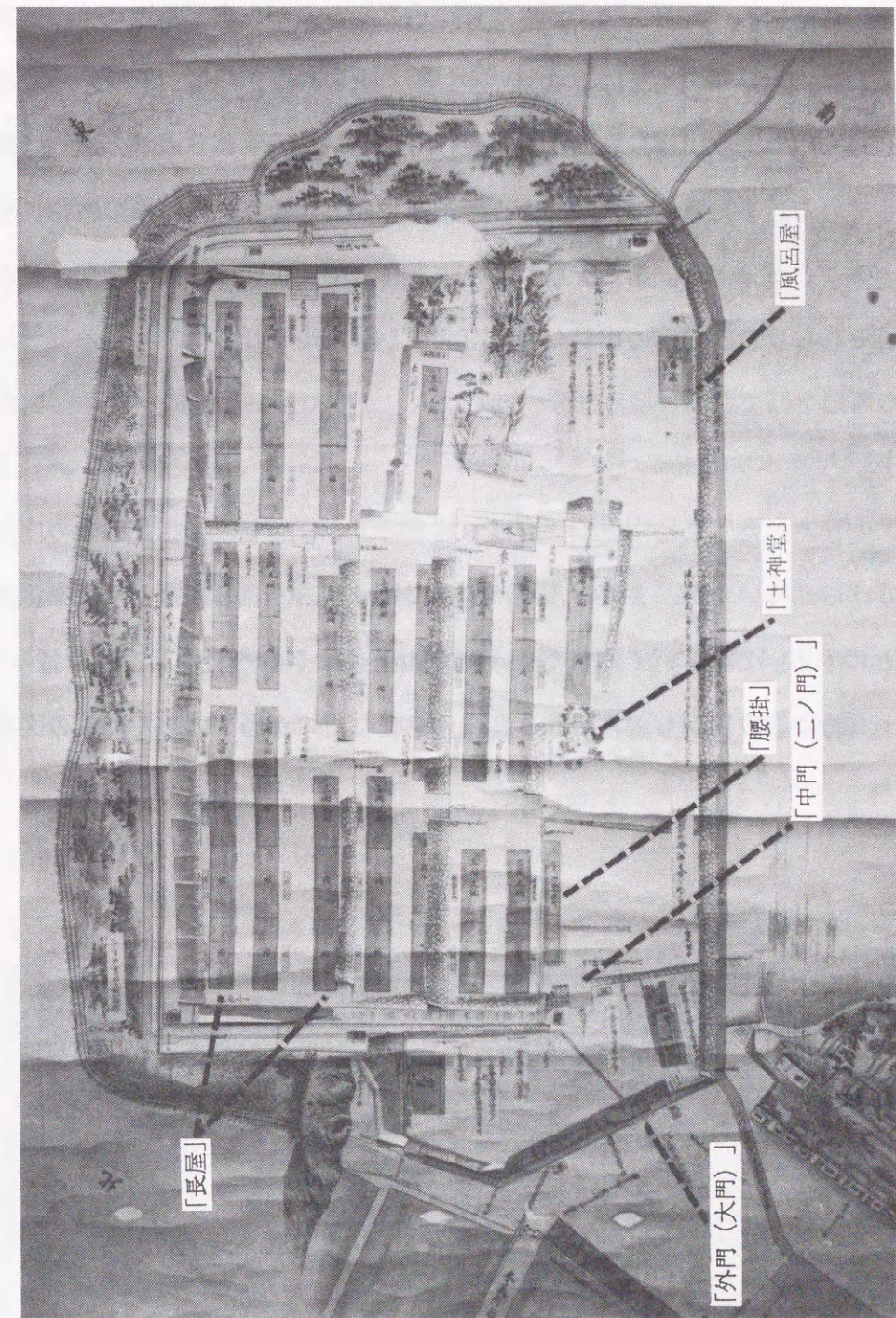


図1 「唐人屋敷図」（長崎県立長崎図書館蔵）

3.1 屋敷地の構成

境界の構造 唐人屋敷の境界を画するものについてであるが、まず敷地はその四方ほとんどを濠（または谷川）によって囲まれている。その更に外側、敷地の北端から東端を巡って南端にかけて（つまり山側）には竹柵が設けられている。これらの部分から唐館内までは崖になっている。また敷地の南端部から西端部を経て北端部までは濠の内側に石垣が設けられていることが分かる。構内を取り囲むようにして辻番所（一間に一間半）が五つ建っている。それらは、唐館内の山側の部分（北端から東端を経て南端に至る部分）に対して南端から西端を経て北端に至る部分、即ち出入りがしやすい部分に多く存在している。

敷地割り 先程述べた『長崎市史』における地形による分類では、唐人屋敷の内部は三つの部分に分けられていたが、まずここでは絵図に見られる内部の敷地割りを高低差から見てみることにする。2.において述べたように唐人屋敷はその内部に高低差を持っていた。そして図1（特に石段）から読み取れる高低差を表したのが図3である。この図から敷地

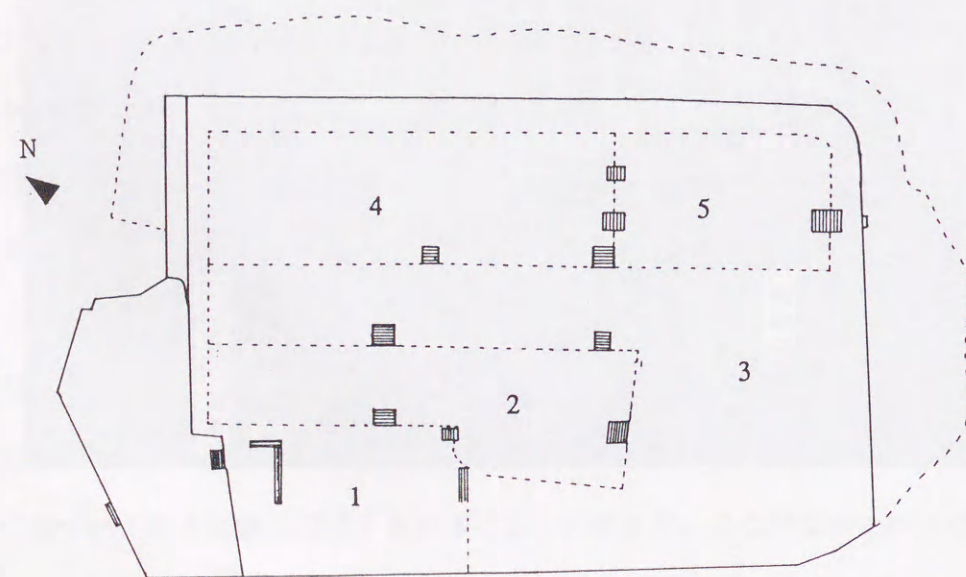


図3 唐館内敷地割りモデル図（1<…5<高）

内部は大きく分けて五つの部分に分割されることが分かる。まず中門（二ノ門）から土神堂までの部分、そしてそこから順次一段ずつ昇った四つの部分である。東の角の部分が敷地内の最も高い部分となる。『長崎市史』の分類における上段、中段、下段は敷地を北東から南西にかけて短冊状に三分割したものであるが、絵図によるともう少し入り組んでいたことが分かる。

3.2 敷地内部における建物

—「長屋」— まず唐人達が居住していた「長屋」とよばれる施設であるが、図2に総数十九棟、内、「三間二十八間」七棟、「三間二十間」二棟、「三間二十七間」八棟、「三間三十六間」二棟が間数を表示して描かれている。その描き方は「三間九間」もしくは「三間拾間」をひとつのユニットとしており、それがいくつ繋がるかによって「長屋」全体の長さが決められている。このことからこの「三間九間」、「三間拾間」がひとつ

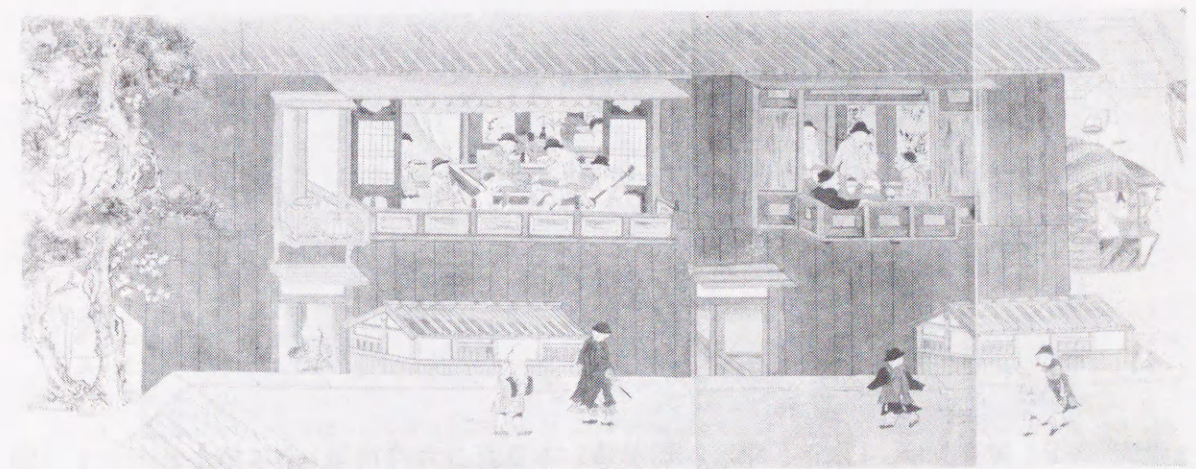


図2-a 「唐蘭館図巻」(部分)

のモジュールを表していると思われる。それはまた「雪隠湯殿」が「三間ニ九間」、「三間ニ拾間」の「長屋」ひとつひとつに対応するようにして置かれている事からも推察される。

次にその配置であるが、すべての「長屋」が東南から西北に向かって長手をとっており、段差で構成されるそれぞれの区画内に規則正しく並べられているのが分かる。「雪隠湯殿」も同じようにして規則正しく配置されている。これらから前期の唐人屋敷地が、極めて整然とした、しかし画一的な配置計画の上になっていたことが明らかである。そこには唐人町としての特徴的な都市的内容を認めることはできない。ただ「長屋」の建築そのものは図2-aに見られるように、日本的ではない異国風の雰囲気具备了たものであったことが伺える。

一廟建築一 「長崎覺書」では記述されていないが、図1および図2では廟建築として「土神堂」が描かれている。「土神堂」の前には小さな池が描かれ、そこにかかった橋を越えて詣でるようになっている。また「土神堂」の周りは木によって取り囲まれている。

「土神堂」は元禄三年（1690）福建省泉州の唐客によって創立されたとされている⁸⁾。

「長崎名勝圖繪」では「土神堂」創建に関する事柄について以下のように記している。

「昔堂の傍に古い一本の樹があった。元禄二年（1689）福建省泉州の唐商が一夜夢みて、眉の長い老人が杖をついた姿で現われ、われは土公神なり、古樹の下にあり、われを祀らば汝衆人必ず福あらん。と告げたという。その話を聞いた唐商達は、翌朝早くその樹の下に蠟燭線香を立てて、一同で恭しく礼拝していると、役人達が何をしているかと尋ねるので、わけを答えた。そのことがあって、この土神堂は建てられた。翌年夢に現われた姿を刻んだ像が、唐船で運ばれた。奉行所では、命じてこの像を堂内に祀った。」⁹⁾

当時の「土神堂」は、「木造、単層、切妻造、本瓦葺、六坪前後」¹⁰⁾に描かれている（図2-b）。図1では「土神堂」以外の廟建築は描かれてはいない。このことは創設当初の屋敷地には宗教施設が一切なかったこと、しかし土地神の信仰を認め、その神像に中国で製作されたものを用いさせることで、宗教政策上と土地の精神的支配権をめぐる妥協

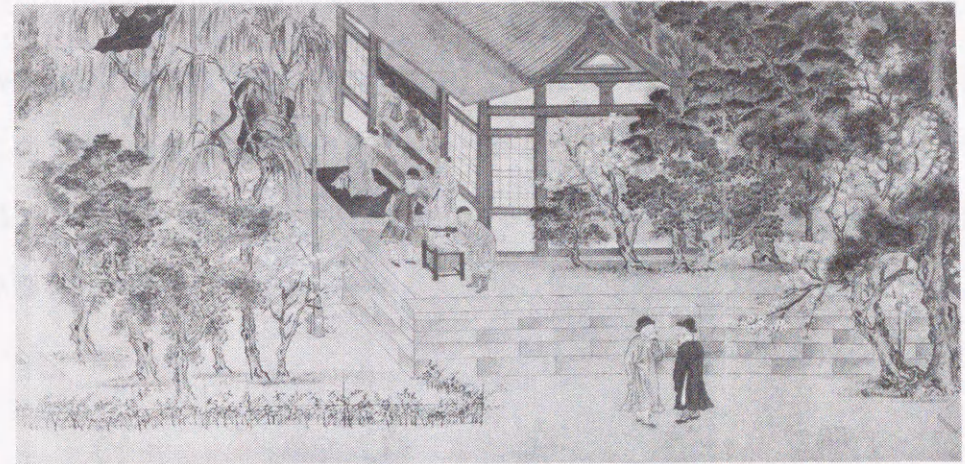


図2-b 「唐蘭館図巻」(部分)



図2-c 「唐蘭館図巻」(部分)

策が計られたことを推測させる。これは以降の唐人屋敷地の性格を方向づける重要な出来事であったと考えられる。

—官吏駐在地— 官吏駐在地は大門と二ノ門（中門）の間に集中して設けられている。そこには三つの建物がある。ひとつは大門とつながった長屋門形式のもの、あとの二つは独立した建物で、そのひとつは「札場」、もうひとつは「御検使部屋」である。これら三つの建物によって囲まれた広場があり、そこで唐人達が交易活動を行ったり、必要な生活物資を調達していた（図2-c）。

3.3 敷地内部における道

唐人屋敷地内（図1）における道はそれ独自としては描かれてはおらず、敷地内に存在している高低差を解消するために階段（石段）が造られている以外は、道の敷設による空間内の分節化はほとんどない。「長屋」やその他の施設の余白部分がそのまま道となっており、あるところ（とりわけ敷地南西部）ではそれが広場のようになっている。唐人屋敷の内部における唐人達の動線は、高低差を補う階段によってかなりの部分決定されていたと考えられる。

3.4 上に挙げたものの以外の付帯的なもの

屋敷地の中央から南寄りに溜池のようなものが二つ造られている。これらは地表から数段下ったところにあり、湧き水を利用した給水施設と考えられる。また小さな溜池が敷地の東端から西端までを結んだ線の以南に六つ存在している。最も大きな溜池の背後には竹林があり、建物としては「風呂屋」だけを含んだ敷地南隅部は他の居住部とは違った性格を与えられている。「風呂屋」は敷地内の南隅に存在しており、そこには「三間梁七間ニ打通シ壹間ノ庇」と記されている。そして内部には「釜屋」、「湯風呂」と書かれている。

「腰掛」は二ノ門（中門）を入ってすぐの左側にあり、「二間二十八間」と書かれている（図1）。「腰掛」内部では唐人が縄を結っている姿が描かれている。また内部側壁には（消火の際に使われる）鳶口と思われるものと梯子がかけられている（図2-d）。すなわ

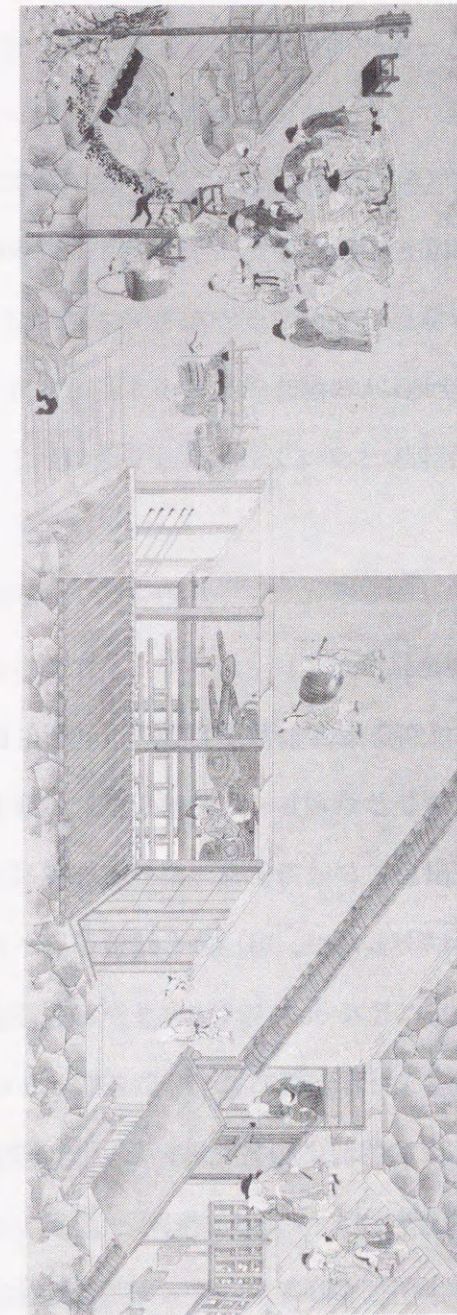


図2-d 「唐蘭館図巻」(部分)

ちここは唐館内に火事が起こった場合の消火活動の拠点となる場所であつたらしく、この鳶口と梯子、そして唐館内に散在している小さな溜池を使って消火活動が行われていたと思われる。これら二つの施設はいずれも屋敷地内の隅の部分に存在しており、住居部とは区分されていることが分かる。

4. 前期唐人屋敷の特徴

以上、元禄期における唐人屋敷の構成について文献と古図の二つの史料にまたがって記述したわけであるが、ここではそれらに対する考察を行ってみたいと思う。考察は以下の三つの分野について行う。

1. 「土神堂」とその前面空地について
2. 「長屋」の配置とその管理について
3. 道の構成について

4.1 「土神堂」とその前面空地について

元禄期における唐人屋敷には廟建築として「土神堂」が存在していた。

唐人屋敷が設立された理由のひとつとして、キリシタンの取り締まりが関わっていたことは序論において述べたが、出島において信仰・祭儀の施設が一切なかったことと比較すると、土地神祭儀という形ではあったが、廟建築の建造が許されたことは、以降における唐人屋敷の性格の方向づけの基点となった¹¹⁾。「土神堂」は先程も述べたように、外門（大門）を入り中門（二ノ門）を通ったちょうどすぐの突き当たりが存在している（図1）。

ここは中門内におけるいわば玄関口に相当している。「土神堂」の前面には空き地があるが、それは中門を挟んだ管理駐在地の広場的空間とは別の一角をなしており、「腰掛」が存在してる反面「長屋」が存在しておらず、よってここは住居部とは別種の広場の性格を持った場であったと考えられる。その持っていた意味としては以下の事柄が挙げられる。

まずひとつめとして、図2-dを見てみると、「土神堂」前において唐人たちが集まっ

て賭け事と思われる行為をしているところ等が描かれており、このことからここが隣り合った管理駐在地における広場的空間とは異なった、打ち解けた雰囲気を持つものであったことが分かる。つまり先ほど述べたように、管理駐在地における広場的空間は交易や生活物資の調達といった活動が行われていたのであるが、そこは常に日本側の役人と相対する空間であり、反面「土神堂」前の広場的空間は、中門内には原則として唐人以外は入れないことから、唐人達専用の独自の雰囲気を持った空間であったと考えられる。次にこの場には唐館内での消火のための施設が置かれてもいた。そして最後に「土神堂」の持つ機能である祭儀・礼拝としての空間である。以上のようにこの空き地には礼拝、遊戯、消火などの諸行為を行う場としての意味が付与され、それが住居部との大きな差異を形成していたと考えられるのである。後章において述べるであろう後期の唐人屋敷が持つ、中国人街としての独自の性格は—それが出島との決定的な差であるが—広場的な性格を備えはじめていたこの空地において、すでに萌芽しはじめていたと考えられる。

4.2 「長屋」の配置とその管理について

唐館内における唐人達の住居である「長屋」は、唐人屋敷内部の主要な部分をほとんど占めていることから、この「長屋」が唐人屋敷の役割のほとんどを物語っていることが分かる。そのような「長屋」は中門内における唐人屋敷の空間構成を決定するのに多大な影響を及ぼしている。先程も述べたように唐館内において「長屋」は一定の方向を向いて配置され、ある種のモジュール（「三間二九間」、「三間二拾間」）を基本単位としてそれを連続させることにより内部空間を構成していたのであるが、その結果生じる配置計画は極めて機械的なものとなっている。敷地内の土地段差に沿って敷地割りが存在していたことが「長屋」構成に多少の陰影を与えてはいるものの、基本的には限られた敷地内に唐人達をいかに効率的に収容するかが問題であったと思われる（元禄二年における唐館内の唐人数は4,888人）、その結果、機能的で画一的な「長屋」配置が取られたと考えることができる。

ケンペルが述べているように、極めて短日月の間に建てられた唐人屋敷は「シナ人を閉塞して住まわせる嫌な牢屋の姿に変わった」¹²⁾、つまり収容所的な性格を持つものであつ

たといえる。そのような「長屋」群に対する管理に関しては、多人数の唐人達を管理するために個々の「長屋」に対応した管理体制が敷かれていた。各部屋は船毎に部屋割りがなされて、別の船の乗組員が一つの部屋に混住することは許されていなかった¹³⁾。そして各部屋に対しては『崎陽群談』所収の「唐人屋舗之事」という史料に「唐人部屋附与号ヶ候而、軽き者共一部屋へ五人三人ツツ、何れの部屋へも昼夜相詰候事」¹⁴⁾とあり、部屋毎に複数の下級監視員が配置され、昼夜管理（監視）がなされていたことが分かる。以上のことから唐館内における大部分を占める「長屋」の配置から、当時の唐人屋敷が、その名まえの持つ異国風の雰囲気とは異なった、整然とした画一的な内部構成を持っていたことが分かり、またその「長屋」群は厳重な管理下に置かれていたことが分かる。

4.3 道の構成について

唐人屋敷地内における道の敷設はそれ自体としては行われてはおらず、敷地内に存在している段差を解消するための階段（石段）と、「長屋」の配置によって生じた余白とによって読み取る以外にはない。出島を見てみると（図4）、島内を中央に横断する道と島周

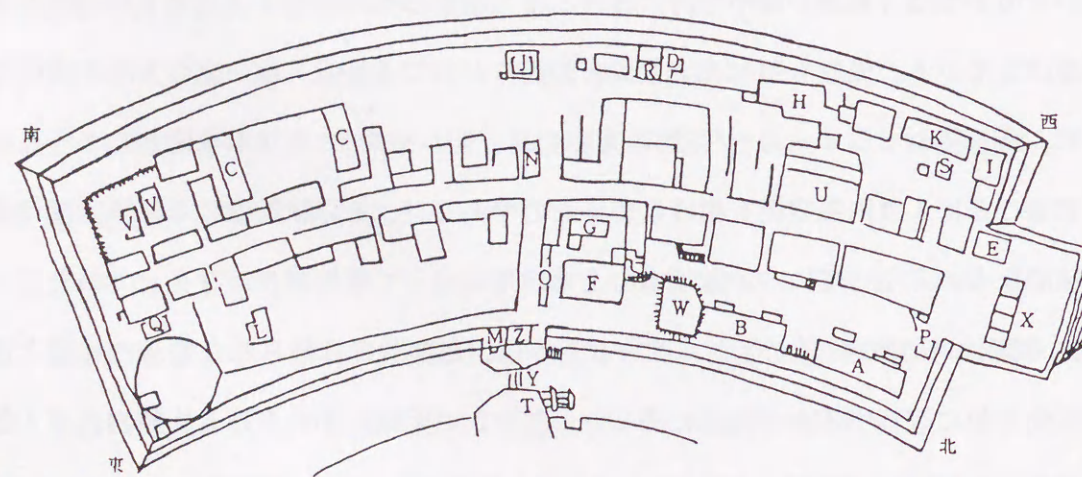


図4 出島図（『出島図—その景観と変遷—』所収, p.243）

囲を巡る道とが設定され、それに沿って建物が適宜に配置されている。これに対し初期の唐人屋敷の図に明確な道空間を見い出すことは困難である。強いていえば中門から「土神堂」の前を通り、屋敷南端部の「風呂屋」を含む水場を中心とした空き地に至る道が、主たる道であったらしい（それは「唐蘭館図巻」の描写の順序でもある）が、それとて自然発生的なもので計画的なものとは認めがたい（後期の唐人屋敷では道はそれ独自として敷石がなされている）。つまり前期の唐人屋敷内部は道によっては区分されず、「長屋」群部分と「土神堂」や「風呂屋」のある空地部分という緩やかな区分が存在するだけの領域であったといえる。このような道に関しての出島と唐人屋敷との明確な違いが、何に基づいているのかは明確でない。しかし道に関しての前提的条件（既定の条件）がなかったことが逆に幸いして、後期の独自の街区の発達をもたらすことになるのである。

5. 結

以上元禄年間における長崎唐人屋敷の構成について文献と絵画資料を用いて考察したわけであるが、そこで明らかになったことは、前期の唐人屋敷地における内部構成は画一的で整然とした配置を持ったものであり、都市的な性格を感じさせない、収容所的なものであったということである（このことは後期との大きな差でもある）。設立当初の構成では、規則的で二種類の規模のものに固定された「長屋」の機械的な配置と敷地内部における明確な道構成の不在が上記の点を補完する。しかしその中において「土神堂」及びその前面空地は、唐館内部における唐人たちが独自の活動を行う上での（広場的）拠点として存在している。よって以上のことから元禄年間の唐人屋敷は、幕府及び長崎総町中側が設けたもの（画一的な「長屋」配置等）を主軸としていた、それに対してその中で生活した唐人達が設けたもの（「土神堂」）が付加的ながらも唐人たち独自の性格を与えるものとして萌芽し、拮抗する空間を部分的に形成していたということがいえる。

第3章 註

- 1) 【長崎覺書】、「通行一覽」、卷之二百三 唐國總活部六、p.301

「通航一覽」は嘉永六年にそれまで存在していた史料を纏めたものである。

- 2) 唐人屋敷の総坪数に関する記述は諸書において異なっている。それは、「1691（元禄四）年から1786（天明六）年までに数度の拡張があったからである」（山脇悌二郎：長崎県史 対外交渉編、吉川弘文館、昭和60年、p.514）。ここではいくつかの史料を挙げてその違いを記述してみることにする。

【長崎實録大成正編】

「惣坪數九千三百七十三坪八合内 六千八百七十四坪 唐館構之地 但二之門内 六千五十四坪六勺 大門内乙名部屋通事部屋番所共ニ 千八百三十五坪七合四勺 外郭竹垣之内」

【長崎記】（「長崎古今集覽」内）

「惣廻り六千八百坪、但し明地札幌前二ノ門前共ニ又千六十五坪、末年十善寺村畑地加ル、合七千八百六十五坪也、」

又、敷地拡張に関する記述が存在するので以下に述べる。

【長崎實録大成正編】

「一、元文元丙辰年（1736）唐人屋敷南方裏手ノ畠地五百九十七坪餘、唐館構ノ内ニ加ヘ入、部屋數建添シム。」

【長崎誌續編】

「同（天明）六丙午年、唐館外圍竹垣大破に付造替有之、尤是迄之堀幅を廣め、竹垣元場所より少し宛、外畑地之方に廣め出す、此坪數五十九坪二合、尚又畑外殘地之場所にも、間數三十一間通り廣め、構内に加ヘ入、」

このように唐人屋敷の敷地面積は時代によって変化しており、逐次周囲の畑地等を包摂しながら増加していったことが分かる。

- 3) 福田忠昭：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、清文堂、昭和12年、p.734

- 4) 福田前掲書（註3）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.734

- 5) 福田前掲書（註3）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.736

- 6) 福田前掲書（註3）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.736

- 7) 東京大學史料編纂所：『唐通事會所日録 五』、大日本近世史料、東京大學出版會、昭和29年、p.26

- 8) 福田忠昭：長崎市史、地誌編、仏寺部、下、長崎市役所、大正12年、p.782

- 9) 【長崎名勝圖繪】（文政元年）、長崎文献叢書、第一集・第三卷、長崎文献社、昭和49年、p.103

- 10) 山口光臣：長崎の唐人屋敷における中国系寺廟建築について、長崎談叢、第七十二輯、長崎文献社、昭和62年、p.23

- 11) 幕府の規制は当初から緩かったのではない。それは唐人達自身が切支丹宗徒ではないということを主張するために唐寺を長崎の地に建立している事から窺える。そのことについて『長崎唐人屋敷』（山本紀綱：長崎唐人屋敷、謙光社、昭和58年、p.147）では、以下のように述べている。

「その創建の直接の動機は、江戸幕府の鎖国方針に基づくキリスト教（切支丹）宗徒に対する幕府の厳しい禁圧からその嫌疑を避けるためであったといわれている。当時幕府が最も警戒したのは、切支丹宗徒が唐人らに混入して渡来することであったので、その人別取調べは非常に嚴重であった。これらの宗門改めは仏教寺院と、五人組制度が官掌するところであり、もしも禁制に違反するような不法があれば、日・中両国商民の貿易商売も阻害される破目に陥るため、唐人らは自発的に仏寺を建立し、本国出身地方の同郷僧侶をその住持として、これによって彼らが切支丹宗徒でないことを明らかにし、唐土の往来と貿易上の安全とを確保しようとする自衛上の緊急措置を講じたのである。」

それら唐寺の中で「唐三箇寺」と呼ばれるものの建立年代は次のようになっている。

・興福寺 元和九年（1623）

・福濟寺 寛永五年（1628）

・崇福寺 寛永六年（1629）

12) エンゲルベルト・ケンペル：日本誌（改訂・増補）－日本の歴史と紀行－，下巻，霞ケ関出版，昭和48年，p.123

13) 『唐通事會所日録 七』（註7，p.230）、宝永四年六月十日の条には、「春船唐人先乗終了セシ場合殘餘ノ唐人ヲ二艘分宛一室ニ収容スルコトノ可否如何」という問いに対して「不可ナル旨ヲ答フ」とあり、その理由として「只今之通ニ而さへ失物等有之由ニ而出入御座候、増而打込ニ成候事存〔寄〕も無御座、難成段申上候…」と述べている。すなわち「三間ニ九間」、「三間ニ拾間」の「長屋」は、その一つ一つが来航した唐船に対応しており、その別がそのまま管理する場合の一つの目印となっている。

14) 『崎陽群談』（享保元年），日本史料選書 10，中田易直、中村質校訂，近藤出版社，昭和49年，p.99

『崎陽群談』は宝永八年四月より享保二年四月まで長崎奉行を勤めた大岡備前守清相により編まれたものであるとされている。

第4章 後期長崎唐人屋敷の構成

1. 序

元禄期から幕末に至るまで約180年の間存続していた唐人屋敷は、廟建築の建立年代から、前期（元禄年間から享保年間まで）と後期（元文年間から幕末まで）とに分けることができた。前章ではその前期の構成について、とりわけ元禄年間における中門（二ノ門）内の建築構成に関して考察を行った。そして前期の唐人屋敷は端的に言えば収容施設的なもので、日本側（幕府）が設けた官制の機能的・画一的な配置を持つ「長屋」群を基本構成要素としており、文化的・生活的な潤いに欠けた場であることを指摘した。しかしその中であって、唐館内唯一の廟建築である「土神堂」が建てられ、その前面空地は、唐館に住む唐人達の祭儀・遊戯・消防活動の拠点となっており、そこに僅かながら唐人達独自の雰囲気を持つ空間が醸成されつつあったことを明らかにした。

これに対し後期の唐人屋敷は、前期とは異なった唐人文化の香りを漂わせた生活の匂いのする独特の都市的空間を作り出していた。本稿では天明年間から文化年間までの間に視点を据えて、この後期長崎唐人屋敷の内部構成について考察するものである。天明年間から文化年間までを取り上げる理由は、この時期の唐人屋敷を描いたと思われる絵図が最も多く、文献資料も比較的豊かだからである。研究方法としては、前稿と同様、唐人屋敷に関する文献と唐人屋敷を描いた絵図の二種の資料を用い、唐人屋敷の内部空間（とりわけ二ノ門内）を構成する要素－住居部、廟建築等－の相互間における配置関係とそれによって獲得された空間の性格の考察を中心として行う。

2. 文献資料

後期の唐人屋敷内の建築構成に関する文献資料としては、『長崎實録大成正編』明和元年（1764）、『天明七年長崎記』天明七年（1787）、『長崎名勝圖繪』文政元年（1818）、『新

地唐館処分書類】慶応四年（1868）等がある。それらから本論に必要な部分（二ノ門内に
関する記述）を抜書する。

文献 a.【長崎實録大成正編】¹⁾

一 唐人部屋 二拾 各二階造り
但一部屋 三間ニ九間 又ハ四間ニ七間
市店 百七 但一間半ニ二間宛
土神祠 一棟 但六坪
關帝堂 一棟 但十六坪
觀音堂 一棟 但六坪
涼所(スミシヨ) 一棟 但九坪
溜池 三
井 五

文献 b.【長崎記】²⁾

唐人部屋 二拾 二階造り
但一部屋三間ニ九間 又 四間ニ七間
市店 百七 但一間半ニ二間宛
土神祠 一棟 但六坪
關帝堂 一棟 但拾六坪
觀音堂 一棟 但六坪
涼所 一棟 但九坪
溜池 三
井 三
右者二ノ門内六千八百七拾四坪之地

文献 c.【長崎名勝圖繪】³⁾

唐人の部屋は二階造りにして一部屋凡三間に九間或
は四間に七間廿餘ありまた市店百餘有て唐客の小商
等店を開き牌を掛け酒菓及び雜碎の品物を陳ね設け
てこれを市る土公祠關帝堂觀音堂涼み所溜池靈魂堂
等あり

靈魂堂 土神祠の前より右に轉じてゆく路の右傍牆
壁の前にあり板を以て外屏をなし柵門より出入す俗
に幽靈堂という乃ち船商死亡する者の神主を列ね置
處なり

天后堂 館内の南にあり土神祠と塲を隔てて前後の
對をなす堂内壇を分つて關聖帝を併せ祀る天后は舟
神なり媽祖と稱す船客の尤重んじ尊ぶ所なり元文元
年（1736）南京人等始て建石門あり海一天'活一佛
と題す門外左右に刹竿を設け紅旗を掲ぐ常に風雲に
翻翻たり

歌舞庫 天后堂の前の傍にあり踊の道具藏なり歌舞
に用る所の衣裳器物をおさむ舞臺舞局もまた常は取
疊みて此庫中に在り用る時其塲に装ひ立つ

觀音堂 東南の方にあり天后堂と左右をなす石門あ
り上に莊一嚴'福一地と題し、左右に法一雲永蔭'慧
一日常'懸'と分刻す門を入て右にめぐりて堂前にい

たるに泉水あり瓢簞池といふ其形壺盧に似たるを以

て名とす橋を架して堂前に通ず

文献 d.『唐館新地処分書類』⁴⁾

一 船主部屋 拾三軒

但追々崩落當時三軒相残居申候

一 小部屋 七拾軒

但追々崩落當時凡三拾軒余相残申候

右者初発旧幕府二而建渡相成其後者總而自普請ニ而

仕出建替等仕申候

一 館内土神堂 但土神を祭り有之候

一 天后堂 但船神を祭り有之候

一 観音堂 但観音并関帝を祭有之候

右者追々渡来之船主共依願自普請を以取建其余靈魂

堂聖人堂等右之振合ニ御座候

まずこれらの文献に拠って唐人屋敷を構成する主要な建物である「唐人部屋」、「市店」、
廟建築の後期における実態をみることにする。

唐人部屋 「唐人部屋」とは唐人達の居住施設のことであり、前期では「長屋」と呼ばれ
ていた。それは幕府が造営・管理するもので、前期では「三間二十八間」、「三間二十間」
等の長棟の建物であり（それらは「三間二九間」、「三間二拾間」の基本単位を持つ）、そ
の数は棟数十九、部屋数五十であった（棟数と部屋数の違いはこの「長屋」が連棟形式で
あったことによっている）。

後期の「唐人部屋」は a、b、c においてその数が「二拾」であり、d ではその数「拾
三軒」に減じ、それも最後には「三軒」のみとなる。また d では記載がないが、その他の

三資料では「唐人部屋」は全て「二階造り」で、規模は一部屋「三間二九間」もしくは
「四間二七間」で統一されている。つまり後期「唐人部屋」の数は二十を上限として、時
代が降るにつれさらに減少しているといえる。「唐人部屋」数のこうした減少は幕府の指
示による渡来唐船数の減員と対応するもので⁵⁾、唐船毎に「唐人部屋」が割り当てられる
様子をよく示している。なお寛政九年（1797）の『長崎歳時記』は「唐人部屋」について
以下のように述べている。

「華館船頭の部屋部屋は多く二階すみにて外向にかけを仕出し是を露臺とよぶ、右
見物のとき又は涼ミなどの時ハ此臺に毛氈をしきならべ、椅子をたておのおの寄
かかりて觀をつくす、」⁶⁾

このような張り出した形の「露臺」は前期にはなかったものであり、当時の唐人屋敷で
の生活体験者であった汪鵬も「唐人部屋の二階は、いずれも見はらしがよく、前や後ろに
露台をつけたり、右や左にたてましをしたりしている」⁷⁾としている。

市店 この「市店」は前期では全くみられなかった二ノ門内の新しい施設であり、「小部
屋」とも称されている。具体的な内容に関しては c に「牌を掛け、酒菓その他こまごまし
た物を列べて、唐人が小店を出している」とのみ記されている。二ノ門内は唐人以外出入
が禁止であるから、「市店」は唐人達が唐人を相手にして営む小商店であったといえる。

a ではその棟数は「百七」とされていたが、d では「七拾軒」と減少している。それも
慶応四年では「凡三拾軒」となっている。「市店」は「一間半二二間宛」の規格を持つ小
規模なものであった（文献 a、b）。

廟建築 前期において唐人屋敷地内に存在していた廟建築は「土神堂」だけであったが、
後期ではそれに新たに「天后堂（関帝堂）」、「観音堂」、「靈魂堂（幽霊堂）」、「聖人堂」が
加わっている。これらの廟建築はすべて唐人達自身による建立であり、文献 c をみると中
国廟そのものともいえる内容を持っている。「土神堂」、「天后堂」、「観音堂」は a から d
の記述に至るまで継続して存在しており、c で「靈魂堂」、d で「聖人堂」が現れる。す

なわち廟建築の数に関しては時代を経るごとに増加していたことがわかる。

「観音堂」及び「靈魂堂」の建立年代は文献cには記されていないが『唐人番内田氏諸書留』によれば、それぞれ元文元年（1736）⁹⁾、安永八年（1779）⁹⁾となっている。

以上、全体的に幕末では明和期に対して内部施設の絶対数が減少しており、後期の構成は明和・天明期（a、b）までを盛期として、以降はその規模を縮小していたといえる。

しかしこれらの文献の記述は、建物の規模（坪数、間数）や棟数を明らかにするものの、それらが具体的にどのように配置され、どのような形態であったかについては語っていない。そこで次に絵図に基づいて後期、特に天明年間から文化年間における唐人屋敷の模様をより具体的に窺ってみたい。

3. 絵図資料

後期唐人屋敷を描いた絵図資料には前期と同様、唐人屋敷図がある。またこの時期の屋敷図には同様の描画形式をとったものが複数存在している。後期唐人屋敷を描いたと推測される絵図には、平面（配置）図的なものとして「長崎諸役場絵図」、「長崎諸官公衙図」（文化五年）、「長崎諸役所絵図」、「長崎諸官公衙及付近ノ図」（すべて長崎県立長崎図書館蔵）等があり、絵巻図的なものとしては「在長崎日清貿易図」（松浦史料博物館蔵）、「長崎唐館交易図巻」（神戸市立博物館蔵）等がある¹⁰⁾。

今回はこれらの中でも特に絵図上の描写・記述がはっきりしているもの、年代が明確なものという二点から長崎県立長崎図書館所蔵の「長崎諸役場絵図（長崎諸御役場絵図、貳巻之内貳）」（図1）と松浦史料博物館蔵の「在長崎日清貿易図」（文化五年、ここでは部分のみを掲載し、それらを各々図2-a、b、cとする）を取りあげる。

「長崎諸役場絵図」は制作年次を明らかにしないが、天明五年以降の状況である四つの裏門を描くこと¹¹⁾、文化五年製作とされる「長崎諸官公衙図」（図3）と描写内容がほぼ一致することから、天明五年（1785）以降から文化五年（1808）前後のものと推測される。

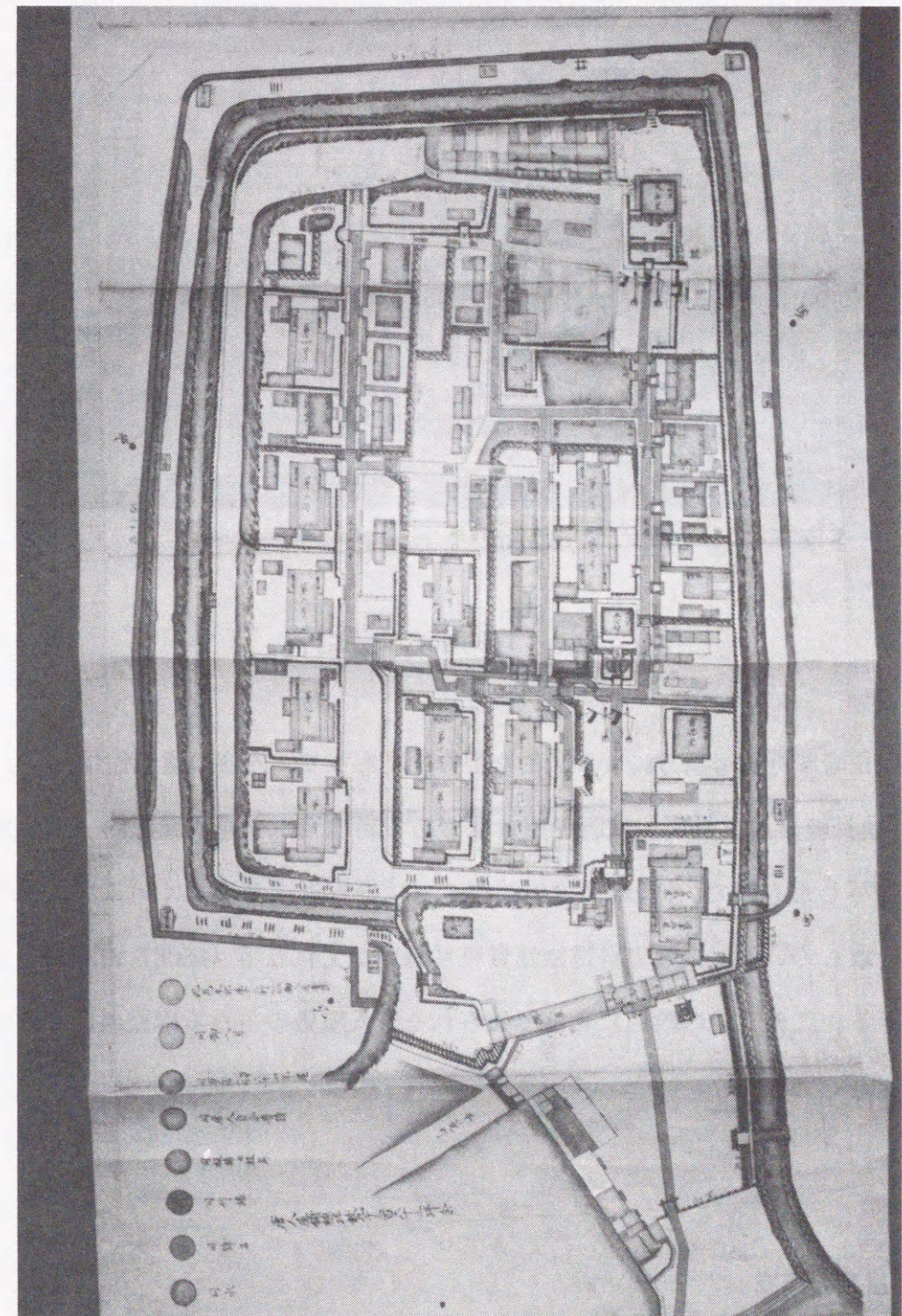


図1 「長崎諸役場絵図（長崎諸御役場絵図、貳巻之内貳）」

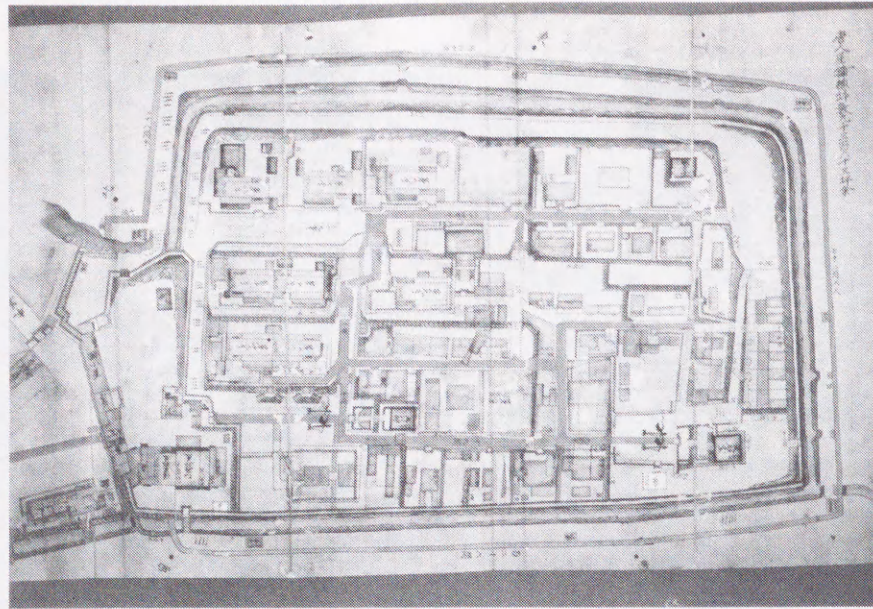


図3 「長崎諸官公衙図」

この図は長崎奉行諸普請方による公的な製作物であって、内容の信憑性は高い。

次に、「在長崎日清貿易図」は唐船用倉庫である新地蔵から唐人屋敷内「天后堂」に至る道筋を描写したもので、「長崎諸役場絵図」とは描写形式が違っているが、描写内容においては一致している。松浦史料博物館資料目録では文化五年（1808）のものとしているが同意できる。この二つの絵図によって知られる唐人屋敷の主たる構成要素の内容・特徴は以降のごとくである。

3.1 唐人屋敷の構成

境界の構造 屋敷地は外側から竹垣、濠（谷川及び空堀）、垣の三重の遮蔽物によって周辺から完全に隔てられている。濠外には番所（一間に一間半）が五つ建っており、その間には辻番所が四つ建っている¹²⁾。前期に比べると屋敷地の四方は完全に囲まれ、唐館をほぼ均等に取り囲むようにして番所の数が増されており、後期唐人屋敷における管理の厳重

さを窺うことができる。なお後期に入ると唐人屋敷の敷地面積が漸増する傾向があるが¹³⁾、それは主としてこの囲い部分に起こったものであった。

敷地割り 次に絵図に見られる内部の敷地割りを段差から見てみることにする。後期における二ノ門内の敷地割りは大変入り組んだものとなっている。前稿においては、唐人屋敷二ノ門内は段差（高低差）によって大きくは上段、中段、下段の三つに分割され、詳しくは五つに分割されるということを指摘した。それに対して図1によると後期の段差（高低差）による敷地の分割が前期よりも細くなされている。図4は図1から読み取れる段差を表わしたものである。この図によると二ノ門内部は九つの部分に分割されていることがわかる。前期の区分（五つ）に対して特に敷地の南部において細分化が起こっているといえる。

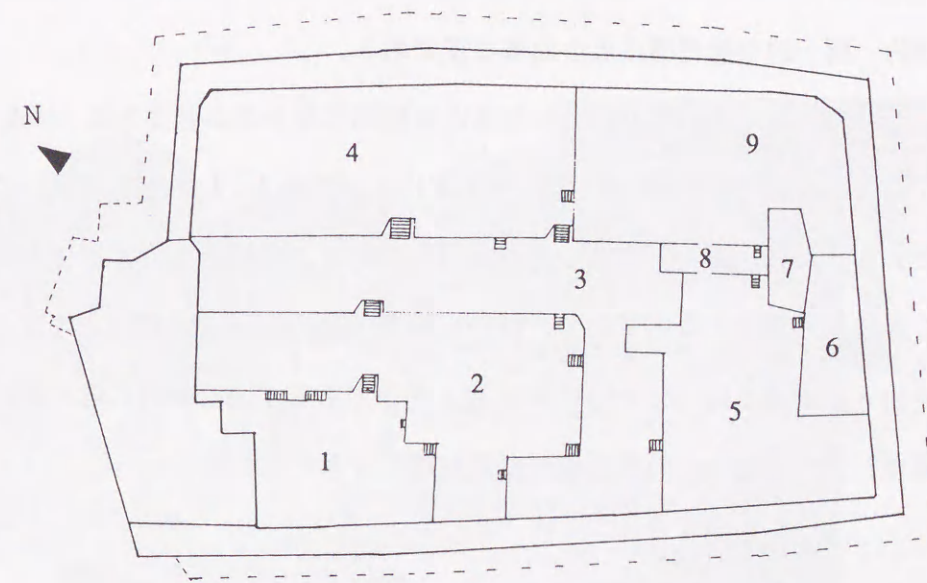


図4 唐館内敷地割りモデル図

3.2 敷地内部における建物

A. 「唐人部屋」

図1をみると、「唐人部屋」は「土神堂」裏のものから順に反時計まわりに番号がふられており、それは「第一」から「第十三」までである（ただし「第三」は紙で伏せられている）。屋敷地の中心から北東部に多く存在している「唐人部屋」は同じかたちを基本単位として持ち、それに幾つかの要素（図には「自分立」とある）を付加することでそれぞれの差異を形成している。その基本単位は「三間九間」と記されており、同一規格を構成していたものと思われる（文献資料における「四間二七間」のものはここにはない）。「三間九間」の「唐人部屋」は一つで独立したものと二つが連続したものとがある。すべて東南から西北の方向に長手をとっている。またすべての「唐人部屋」には前期にはなかった垣による囲いがなされている。垣で囲まれた敷地内では、基本単位の建物（「三間九間」）がほぼ中央に置かれているものの、それぞれが「自分立」の建物を付加・構成で独自の平面形態を造り上げている。これは前期の「三間二九間」、「三間二拾間」だけの単純な「長屋」形態の規則的・画一的な配置構成との顕著な差である。

建築意匠 そのような「唐人部屋」の建築意匠は絵図にみることができる（図2-a）。

図が示す「唐人部屋」の規模も柱間から三間に九間である。『長崎歳時記』の記述と同じく露台が大きくはり出した特徴的な形態を持っている。前期のものと比べると、外壁が板張りから漆喰風の白壁となっており、開口部は中国風の意匠（円形の窓等）となっている。二階で唐人達が宴を催しているのは前期と同様であるが、全体的に見て後期「唐人部屋」の意匠は、日本的ではない異国風の要素が勝ってきている。

B. 廟建築

後期において増加した廟建築は唐館内の各隅部に分散して配置されている。「土神堂」は二ノ門を入って正面にあり、「靈魂堂（幽霊堂）」はその右手にある。「観音堂」、「天后堂（關帝堂）」はそれぞれ敷地の東端と南端部分に存在している。北端部分にはないものの、廟建築は各々方角と対応して建っているといえる。また各廟建築は、すべて自身の垣

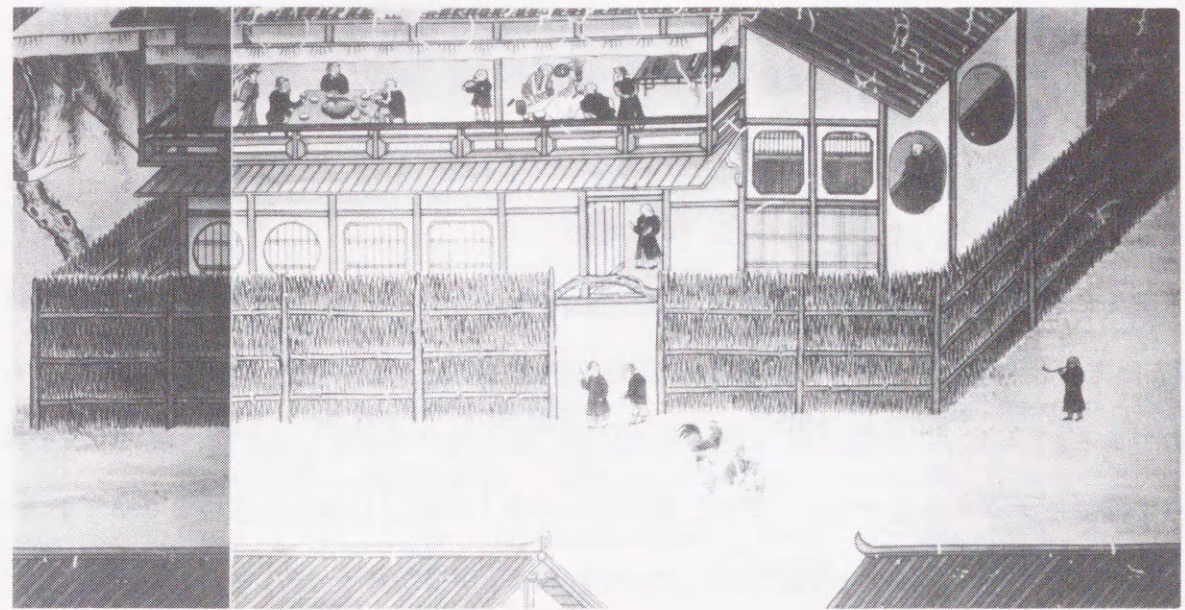


図2-a 「在長崎日清貿易図」(部分)

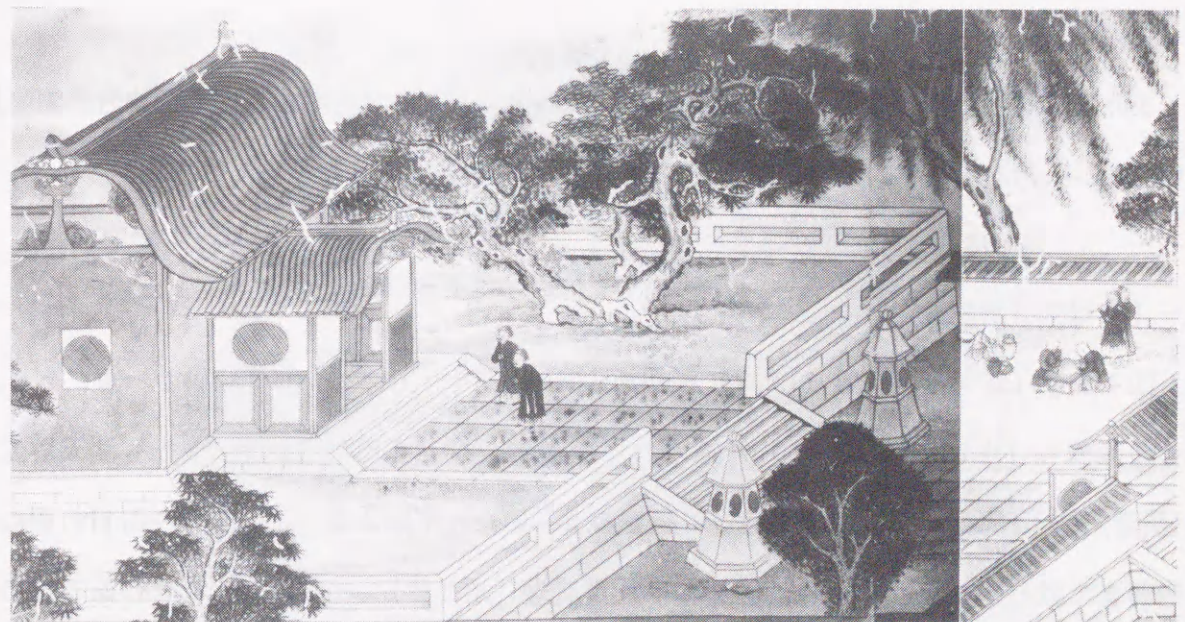


図2-b 「在長崎日清貿易図」(部分)

いを持っており、その内部を境内としている。「土神堂」は前期と位置を変えず、同じ構成（池を越えて詣でるということ）を保持している。以下新たに加わった廟建築の内容について記す。

－「天后堂（關帝堂）」

図1において「天后堂（關帝堂）」は屋敷地内の南端部分に存在しており、その規模は「五間方」として描かれている。図2－bは当時の「天后堂（關帝堂）」の様子を描いたものである。「天后堂（關帝堂）」に至るまでには二重の囲いが存在しており、順次階段を昇って詣でるようになっている。その二重の囲いの間（境内）は小さな広場となっており、そこでは唐人達がなにやら遊戯をおこなっている様子が描かれている。

－「観音堂」

図1では「観音堂」は屋敷地内の東端部分に存在しており、その規模は「五間半三間半」として描かれている。「観音堂」は他の廟建築と違って側面からアプローチするようになっている。

また図2には「観音堂」の様子は描かれておらず、ここでは参考として『長崎名勝圖絵』（文政元年、1818）中に描かれているものをあげておく（図5）。

－「靈魂堂（幽霊堂）」

図1では「靈魂堂（幽霊堂）」は二ノ門を入って右手、「土神堂」前の広場の一角にある。その規模は「七間五間半」として描かれている。この「靈魂堂（幽霊堂）」も「天后堂（關帝堂）」と同様、二重の柵を通して詣でるようになっているが、こちらは一番目の堀の内側まで敷石がなされている。図2には「靈魂堂（幽霊堂）」とおぼしきものがあるものの、その立面が明確にはわからないため、ここでは参考として「唐船来舶図巻」（長崎市立博物館蔵）¹⁴中の図をあげておく（図6）。

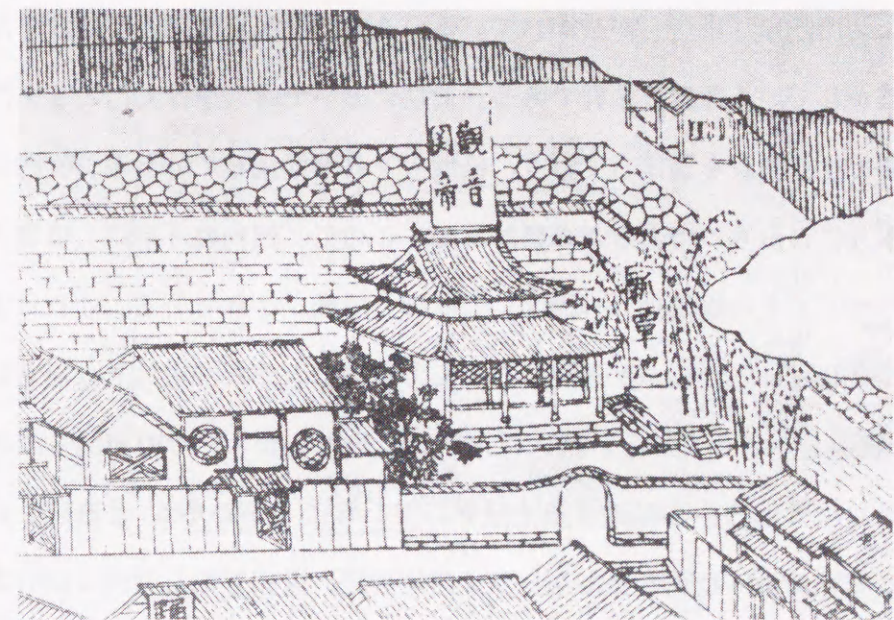


図5 「長崎名勝圖絵」（部分）

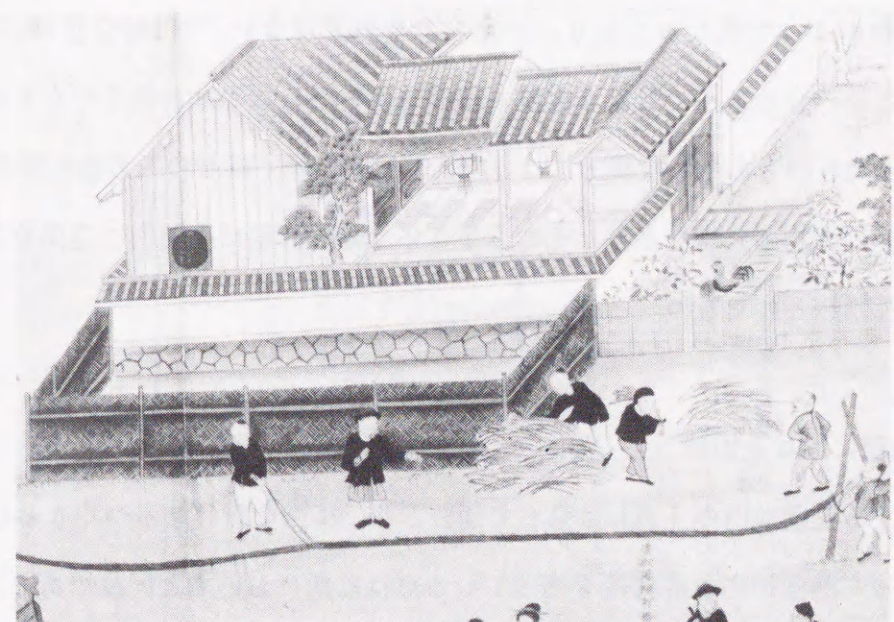


図6 「唐船来舶図巻」（部分）

C. 「市店」

図1には二ノ門内に「市店」が描かれている。その数は図上の記述では64部屋とされているが、描かれている数は38軒である。前期において唐人達は大門と二ノ門の間にある広場的空間で生活物資を調達しており、後期もそれが継続していたが、大門と二ノ門間の出店が日本人によるものであったのに対して、この二ノ門内の「市店」は唐人達自身によるものであった。その規模は「一間半に二間宛」で統一されている。これは文献資料と同様であり、それらは二つ三つが連棟したかたちを持つ。また「市店」は場合によっては「自分立」と組み合わせられている。次に「市店」の分布を表したものが図7である。この図で「市店」は屋敷地の中心付近に多く分布していることがわかる。「市店」は唐館設立時には存在していなかった要素であり、二ノ門内の唐人達相互の日常的な商行為が形成されてきた事実を物語っている。

D. 「自分立（自分普請）」

図1では「自分立」と注記されたたくさんの建物が所狭しと建てられている。その規模や形態は建物によって異なっており、一定したものではない。「自分立」は「唐人部屋」や「市店」と組み合わせあって豊富な配置・構成を生みだしており、独立したものでは独自の囲いを持ったものもあり、規模的には「唐人部屋」を凌ぐほどのものすら存在している。

「自分立」の建物の豊富な存在とそのさまざまな平面形態は唐館内の空間を前期とは異なったある種雑然としたものへと導いている（図7）。

3.3 敷地内部における街路

後期における屋敷地内の「道」は敷石で舗装され、街路を思わせるつくりとなっている。

石段によって屋敷地内の高低差を補っている点は前期においてと同様であるが、後期では「道」がそれ自体としてはっきりとしたかたちで屋敷地（二ノ門）内を縦貫しながら内部空間を分割している様子が伺える。図8は図1から「道」の構成を読み取ったものである。二ノ門内の「道」はまず二ノ門から始まって「土神堂」前まで続き、その後左右に分

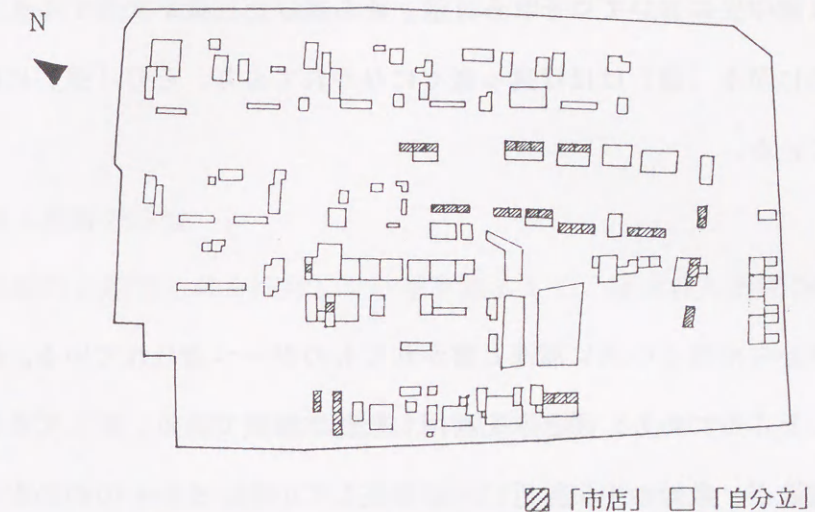


図7 「市店」・「自分立」分布図

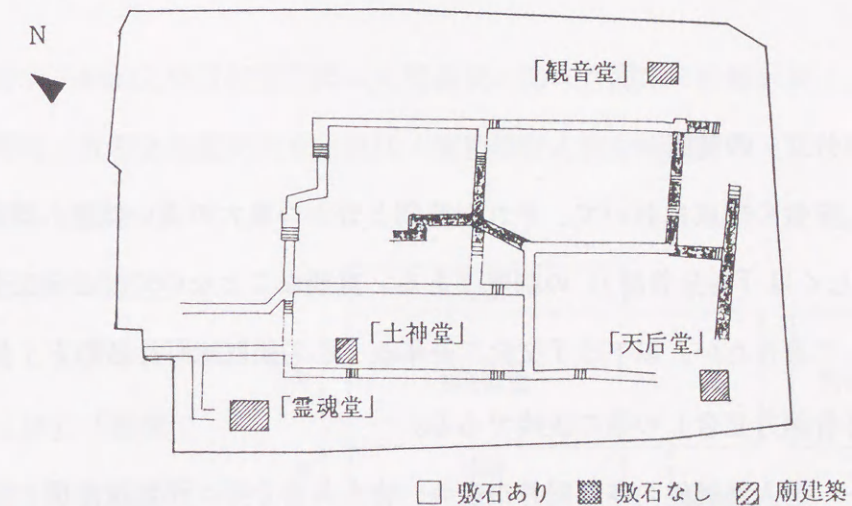


図8 道の構成

かれてそれぞれ敷地の南端（「天后堂」前）と東端（「観音堂」前）に達するようにコの字型に造られている。即ち廟建築にそれぞれ到達するように造られていることが分かる。

次に敷地のほぼ中央においてはそれら「道」から延びた枝道が交差するようになっている。また廟建築に至る「道」はほぼ真っ直ぐにひかれており、その「道」に面して建物が出入口を設けている。

3.4 その他

屋敷地の中央から南寄りの所に溜池と書かれたものが一つ造られている。これらは地表から数段下ったところにあり、湧き水を利用した給水施設である。そしてそれよりも少し規模の小さい溜池が、敷地の中央付近に三つ存在している。またその他の水（溜池）に関することでは、「土神堂」、「観音堂」にそれぞれ池が存在しており、また「観音堂」と「天后堂（關帝堂）」の傍には小さな溜池（もしくは井戸）が存在している。次に「天后堂（關帝堂）」の傍に土蔵がある。これは先ほどの『長崎名勝圖絵』において述べられていた「歌舞庫」であると思われる。図1ではその規模は「三間四間」として描かれている。（文献に記されていた「涼所」は図1、図2には描かれていない。）

4. 「自分立」の制度

後期唐人屋敷の構成において、それを前期と分かち最大の違いは唐人達自身による「自分立」（もしくは「自分普請」）の制度である。重要なことなので「自分立」について若干の説明をしておきたい。以下は『文化二丑年改 乙名頭取惣町乙名勤方 并諸加役大意書』における「普請方立合」の条の抜粋である。

「一 唐人屋鋪館内本部屋并市店共、唐人共自分好ニ而建継修覆、新規ニ小部屋等 建替申度、銀札并四歩銀等差出、」¹⁹⁾

このように「自分立」とは唐人達が自分達の好きなように建物を普請（新築・増築・改築）することを指している。実際の工事は日本側の職人によってなされるが、後期唐人屋

敷を構成する主要な建物（「唐人部屋」、廟建築、「市店」）は全て唐人達自身による「普請」として建てられている。このことが、幕府の整備した前期の空間とは全く異なる意味と構成を後期の屋敷地が獲得することになる最も重要なポイントになるといえる。

5. 後期唐人屋敷の特徴

以上、文献資料と絵図史料を検討した結果を踏まえて、後期唐人屋敷の構成上の特徴について述べる。

後期においても「唐人部屋」が唐人屋敷の中核を形成するものであったことに変わりはない。その数は唐船数の減員にともない減少する傾向にあったが、絵図に描かれているところからすると個々の「唐人部屋」は複雑な平面をもち、二階建ての華やかな外観をもつ、それぞれが個性的なものをすら備えたものになっていた。それは前期の「唐人部屋」が単純な長方形の箱形の建築であったのとは明らかに違ったものであった。そのような複雑さ、華やかさをもたらしたのは、「自分立」（あるいは「自分普請」）と呼ばれた唐人自身による工作物の存在である。次に掲げる資料は、後期の「唐人部屋」の構成をよく窺わせる。

「本部屋十三軒船主部屋都而三間ニ九間裏表一間ニ六間宛ノ仕継付妻ノ方ニ凡二間ニ三間宛ノ飯所立但飯焚所并仕継外ノ樓臺等唐人自分修理」¹⁹⁾

これを図示すると図9のようになる。九間の「船主部屋」を本体として、それに一間幅の「仕継」、「飯焚所」付きの二間に三間の「飯所」、及び「樓臺」が付属するのである。

後期「唐人部屋」のこう

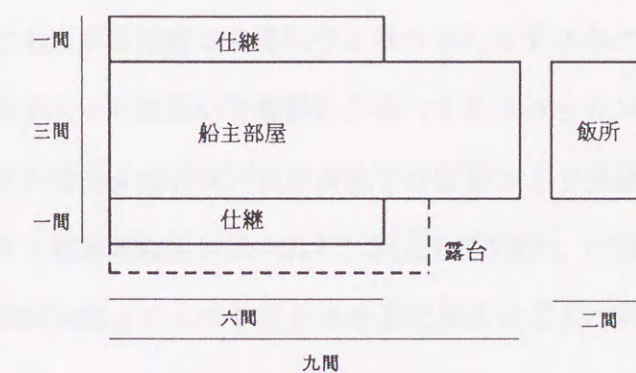


図9 「唐人部屋」復元平面図



図2-c 「在長崎日清貿易図」(部分)

した構成は絵図にも明確に描きだされている(図2-c)。「樓臺」は二階から道側に張り出た日除け付きの露台上、「仕継ぎ」は一階の底部分に相当しよう。「船主部屋」本体は、「三間二九間」あるいは「四間二七間」の規格をもつ。しかし「露臺」等は「唐人自分修理」とあるように唐人側の責任において建てるか修理するものであった。「三間二九間」という部屋本体の規格の存在は前期と変わらず、幕府側の建築政策は基本的に変化がなかったといえる。しかし、それに唐人側が建て添えることを許した(恐らく一定の規制の下においてであろうが)のであった。それは前期との大きな変化であった。建て添え等は本体の外側になされるので、特に「樓臺」は道側から見て本体を覆い隠すことになった。このことは結果として後期の「唐人部屋」の外観を前期のものとは大きく異なったものにした。「自分立」が認められたことによって、「唐人部屋」の構成はある程度の自由度と個性を持つようにもなったと考えられる。そのような動向は「唐人部屋」以外のところでも展開していた。最も顕著なのは「市店」である。「市店」は前期にはなかったもので、後期の唐人屋敷の性格を特徴付けるものといえることができる。

「市店」は唐人が経営する小店舗であるが、前期では生活必需品は大門と二ノ門間の広場で日本人商人から購入していたのであり、二ノ門内ではそうした商行為は行なわれていなかったようである。店舗があることは、そこが都市的性格を持つための必要条件といえるが、その観点からいえば、「市店」の存在は唐人屋敷の都市化を示す有力な指標であるといえる。「市店」は一間半に二間の小屋にすぎないが、牌をかけ、酒菓その他の小間物を売っていた。その数は盛期には百を超え、絵図によると唐人屋敷の中央を縦断する主道の所々に櫛比して建てられていた。唐人屋敷での日常生活の無聊は、こうした「市店」の存在によって潤いを得、都市としての質の向上を促すものになったと考えられる。

次に都市的性格という点では廟建築の存在も重要な事柄としてあげられる。前稿において指摘したように、前期では廟建築である「土神堂」及びその前面空地(広場)が唐人達独自の活動を窺わせる唯一の場所であったが、後期においてはそれに新たな廟建築が加わり、図1では「土神堂」、「天后堂(関帝堂)」、「観音堂」、「靈魂堂(幽霊堂)」の四つとなっている。これらはすべて唐人達自身によって普請されたもので、その祭祀内容の違いから創建当初「土神堂」だけに集中していた祭祀施設が、時代を経るごとに唐人達の様々に異なった要求に応じるかたちで多様化し、新たに建てられたものと考えられる。

たとえば「靈魂堂(幽霊堂)」の建立は、唐人達が唐人屋敷で生活することから生じた問題(霊牌の安置)を解決するための方途であり、他の廟建築もこの地に渡って来て住むという生活スタイルに対応したかたちで舟神や土地神等を祀っている。このような祭祀施設の多様化は、精神生活面での充足度の向上を意味するものであろう。それは「市店」の存在とともに、前期とは違ったものへの生活内容の変化を思わせる。

またこのような廟建築の増加はそのまま内部空間の多様化へと繋がっている。図1では東、西、南のそれぞれ端部に建てられた廟建築は各々方位に対応しており、分散している。

そこに至るまでには「道」が敷設され、それぞれが独自の道空間を形成し、内部に住む人々に異なった行動形態を与えている。廟建築に至る「道」は基本的に平行・直行しており、これと廟建築が方位に対応していることをあわせ鑑みると、この「道」と廟建築の位

置によって唐館内の空間は規則的な構成を持つことになる。つまり「道」と廟建築の対応が唐館内の空間秩序を構成しており、これは後期二ノ門内の大きな特徴となっている。また廟建築に至る「道」以外の道も「唐人部屋」の建て増し、「市店」の出現、廟建築の増加・多様化と対応するかたちで増加している。

そして後期では全ての建物が基本的に「道」に面するようになる。これは段差のみによって区切られた敷地にはほぼ均等に建物が配置され、建物間の余地が通行空間であった前期とは全く異なった様相である。「道」と建物とが密接な相互関係を持つのが都市的空間の構成原理であるが、唐人屋敷は後期に至ってその構成原理を獲得するのである。

6. 結

以上、後期長崎唐人屋敷の構成について文献と絵画資料を用いて考察したわけであるが、そこで明らかになったことは、幕府側によって設けられた前期の唐人屋敷地における画一的で整然とした内部構成とは異なり、後期のそれは唐人達自身の趣向を盛り込んだ都市的な性格を感じさせる、特徴的なものであったということである。

後期の唐人屋敷では「自分立」建物を付加した「唐人部屋」の一つ一つが各々異なった配置・構成を持つものであり、明確に敷かれた「道」は細かく区分された屋敷地内を縦貫する具体的な形態が与えられていた。屋敷地内のいたるところには「市店」や「自分立」建物が建てられ、さまざまな規模・形態を持つそれら建物とその領域間をつなぐ道空間から生まれる情景は、前期とは全く異なる相貌を持つ都市的性格を持ったものであったと言える。また新たに建てられた廟建築とそれらをつなぐ「道」は、屋敷地内における方角と対応した基盤としての役割を持つものであり、二ノ門内は「道」と建物との密接な関係からなる都市的な構成を持つものであった。よってトータルして考えるならば、後期の唐人屋敷の特徴は前期の仮住まい的なものから具体的で独自の内容をもった生活的なものへと推移しており、そこでは形態的・内容的にも多様化の進んだ唐館内の空間が明確な都市的性格を持ったものとして存在していることにあるといえる。そして以上の内部構成は唐人

達自身の具体的な営為によって導きだされており、このことは後期唐人屋敷が単なる収容施設の域を超えたものであることを表している。つまり結論的には、後期長崎唐人屋敷は鎖国時代の日本内部における唐人達による異国の「都市」としての姿を現していたといえる。

第4章 註

- 1) 【長崎實録大成正編】(明和元年)：長崎文献叢書，第一集・第二卷，長崎文献社，昭和48年，p.249
- 2) 【天明七年長崎記】(天明七年)：長崎県立長崎図書館蔵
- 3) 【長崎名勝圖繪】(文政元年)：長崎名所圖絵，長崎史談會，昭和6年，p.205～p.207
- 4) 【唐館新地処分書類】(慶応四年)：長崎県立長崎図書館蔵
- 5) 唐船定限は数的には元禄年間をピークとして徐々に減少している。「増補長崎畧史上」(長崎叢書，三，長崎市役所，大正15年)中の年表から唐船定限の推移を抜書すると以下のようになる。

「元禄元年 唐船定数を七十艘
正徳五年 唐船定限三十艘
享保十八年 唐船定限明年より減して廿九艘とし、
元文元年 唐船定限を廿五艘とす
元文五年 唐船定限を二十艘とす
延享三年 唐船を十艘
寛延二年 唐船の船数を十五艘
明和元年 唐船定数を十三艘とす
寛政三年 唐船定限を減し十艘」

このように唐船数の減少と「唐人部屋」数の減少は歩調を合わせており、互いが密接に関連した事柄であることを示唆している。
- 6) 【長崎歳時記】，長崎県史，史料編，第四，吉川弘文館，昭和40年，p.874
- 7) 汪鵬：【袖海編】，「唐人屋敷」，長崎県市 史料編，第三，吉川弘文館，昭和41年，p.309
- 8) 「唐人番内田氏諸書留」，【海色】第一輯，海色社，昭和10年，p.4～p.5

- 9) 前掲「唐人番内田氏諸書留」(註9)：p.5～p.6
- 10) 唐人屋敷を描いた平面(配置)図的な絵図に関しては拙稿「都市資料としての長崎唐人屋敷図の検討」(日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系，第36号，平成8年7月)において、文献による年代推定を行っている。
- 11) 「唐人番内田氏諸書留」(註9，p.9)では以下のように記している。

「一堀外塹 天明五午年松浦河内守様御在勤之節塹外堅被仰付館内東ノ角北之角貳ヶ所裏門御建被成四ヶ所ニ相成事」
- 12) 「唐人番内田氏諸書留」(註9，p.8～p.9)では以下のように記している。

「元文元辰年(1736)
一 塹外辻番四ヶ所 唐人屋敷辻番風呂場之者共館内辻番所エ勤番仕來候同年細井因幡守様御在勤之節塹外辻番ト名目御改館内辻番所不殘御解取塹外當所五ヶ所之間々ニ辻番四ヶ所御建被成此節ヨリ塹外エ相勤候事」
- 13) 「唐人番日記」【海色】第二輯，海色社，昭和10年，p.2)、「唐人屋舗坪數並間數之覺」の項には唐館坪数の推移に関する具体的な記述が存在するので以下に記す。

「一元禄元辰年建始坪數六千八百坪
文政四年迄百三拾四年成ニ成ル
一同年明地竝畑地ニ而百八拾坪加ル
一同四未年百七拾五坪加ル
一同五申年八百六拾坪三合七勺四才五加ル
一享保六丑年六百拾貳坪加
一同七八兩年百三拾八坪加ル
一元文元辰年五百九拾七坪加
一寛延四未年拾坪加ル」
- 14) 「唐船来舶図巻」，長崎市立博物館蔵，年代不詳
- 15) 【文化二丑年改 乙名頭取惣町乙名勤方 并諸加役大意書】，「長崎乙名勤方 附御触書抄」，長崎文献社，昭和53年，p.99

- 16) この記述は松浦史料博物館蔵「長崎唐館図」上に記載されているものである。この絵図は松浦史料博物館史料目録において明和二年のものとされている。註11及び巻末の絵図史料参照。

第5章 新地蔵の構成

1. 序

これまで3章および4章において前期及び後期の唐人屋敷の構成について検討を加えたが、本章では長崎唐人屋敷の付属倉庫である新地蔵を取り上げ、その構成と変遷を追ってみたい。

新地蔵は、長崎唐人屋敷の付属倉庫として元禄十二年に着工、同十五年に完成した。この新地蔵は、出島と同じように海中を埋立た土地に設けられたものである。唐人屋敷の付属倉庫としての新地蔵は、唐人貿易の隆盛や渡航唐船数の増減にともないその内部構成を時代ごとに変化させてきた。しかし、そのことに対して考察を加えたものは、これまでにほとんどないといってよい。よって本章では、新地蔵の規模や内部構成をできるだけ明らかにし、それが時代によってどのように変化していったかについて考察することを目的とする。

2. 新地蔵の設営

唐人屋敷は、元禄元年（1688）にそれまで長崎の町宿に逗留していた唐人を、明確に、物理的に区別するために設けられた。そのために薬園の跡地を造成し、周囲に囲いを持つ屋敷が造られた。しかし、設立当時の唐人屋敷には多量の荷揚げ物資を保管する専属の倉庫が存在しておらず、そのため長崎市内の江戸町、樺島町、五島町、大黒町方面の民間の土蔵を借り受け、その保管場所としていた。新地蔵の創設については下記の史料がある。

「新貸庫ハ鎮治ノ南海中ニアリ元禄十五年建是唐船ノ貨物ヲ入ル處也舊ト江戸町樺島町五島町大黒町ノ海邊町人ノ土蔵ヲ借り用ヒ唐船ノ貨物ヲ入置ルニ元禄十一年

午四月廿二日長崎回祿ノ時町數廿二町焼失ノ時唐船廿艘ノ貨物入ノ土蔵三十三軒ノ内十八軒其災ニ罹リ貨物多ク焼失ス其後土蔵主ノ者三十九人訴ヘテ海中ニ嶋ヲ築キ土蔵ヲ建ンコトヲ願フ江府御窺ノ上御許容アリテ同十二年ヨリ事ハジメアリテ同十五年落成ス御銀貳百貫目拜借シ十ヶ年ニシテ都合貳百四拾貫目ヲ上納ス東西七十間南北五十五間庫十二ヲ建ツ皆豎三間横廿五間（各開五戸）惣門アリ左右ニ長屋アリ役吏ノ詰所ナリ水門四ツ貨物運漕ココニ因テ出入ス番所東西南北ニ四ヶ所アリ内ニ土神祠アリ門外橋ヲ架東ハ唐館ニ接シ橋アリテ通ズ」¹⁾

すなわち元禄十一年（1698）、後興善町より出火した火災は、西は五島町・樺島町から北は筑後町、東は立山役所に及び、延べ22町、家屋2044戸、土蔵33棟のうち18棟、寺院2ヶ所など市の大半を焼きつくし、焼死者8人までをも出す惨事となった。それは当時の長崎住民のみならず五島町方面の土蔵を借り受けていた唐人達にも甚大な被害を及ぼした。そこで土蔵の持ち主である39人の町人が話し合い、町中より離れた十善寺郷の海岸沿いにある常磐崎の海面を埋立て、荷物蔵を建造することを長崎奉行に願い出て許可を得た。このようにして元禄十二年よりその建設が始められ、同十五年に完成を見たのである。その規模は東西七十間、南北五十五間で、三千五百坪の面積であった。

唐人屋敷が十善寺という当時の長崎の市街からは少し離れた場所、小高い丘で囲まれたすり鉢状の谷間に設けられたのに対して、その付属倉庫である新地蔵はあたかも出島と同じように海上を埋め立てて造られたが、その唐人屋敷と新地蔵との間には橋がかけられていた。新地蔵は現在の長崎の中華街にあたる新地町に相当する部分に存在していた。その後新地蔵は長崎唐人屋敷とともに唐貿易の要所として長い間活躍してきたのであるが、唐貿易の衰退、そして江戸幕府から明治政府への政權の移行にともないその命を終え、今度は開国期の中国人居留地として新たに定義されるようになった。以下は新地献納に関する史料である。

「新地献納之願

新地の儀は元禄十一寅年私共並藏主中先祖共申合地所建立唐商荷藏取建右地料藏敷銀を以て數代之間連綿家族養育仕來候處當節御一新に付路橋等其外於御上も彼是被爲在御處置候趣奉承知候隨而是迄所置の地所並建藏とも私共申合 王政御復古之折柄爲加奉冥献納度奉存候何卒御憐愍を以一統之者共安堵仕候様宣敷被仰付被下度重疊奉願仰願之通御許容被成下候半半難有仕合奉存候此段乍恐以連印書附奉願候以上

明治元年十一月廿九日

深見久兵衛 他三十八名（氏名略）」²⁾

3. 文献資料

新地蔵は元禄十五年に竣工してから幕末まで唐人屋敷とともに中国人貿易の拠点として存在し続けたのであるが、新地蔵の内部構成に関して記された文献はほとんど存在していない。資料である「長崎市史 地誌編 名勝舊蹟部」にはつぎのように記されている。

「…此に於て三拾九人の町人等は翌十二年より工事に着工し埋築するもの東西七拾間南北五十間三千五百坪 此の地子金七拾五兩 土蔵を建設するもの拾貳棟 壹棟入參間間口貳拾五間で之を五區に別つた即ち土蔵數六拾後増して七拾五戸前となる 元禄十五年に至って落成した。…」³⁾

「…構内は土塀を以て圍繞された。西南の梅ヶ崎に接する一方面角今の新地町一番地に西ノ番所元海事部のありし地があった。番所の南、海に面して水門四ありて相並ぶ。一番水門、二番水門、三番水門、四番水門の稱あり。一水門毎に檢使場、改場各壹棟、一番水門に蔵三棟、二番水門に貳棟、三番水門に貳棟、四番水門に壹棟相並ぶ。北、西は今の十八銀行、千馬町に面せる方面でその中央部に北ノ番所あり、明和三年その北角今の新川口橋南詰新地町四番地の地に港御番所設けら

る。北、東の方面は西濱町に面する部で新地橋の突當り新地町十五、十六番地付近に正門があり其の左に各目利最初は諸役人の仲宿右に町年寄の仲宿が並んで居た。南東は廣馬場に面する方面で、此の部の本籠町に近く東番所があった。此の部の南角に近く南門あり。南門と町年寄り仲宿との中間即ち東側岸頭一列に、長崎會所、唐通事、宿老、乙名の各仲宿及び土神堂等が並んで居た。門前の木橋を渡れば廣馬場で此の門は唐人屋敷大門と相對して居た。門の南側今の新地町二十六番地付近に南番所があった。構内の南半部水門に近く、北より南に八棟參間に貳拾五間、壹棟五區、北半部に同四棟の倉庫が建てられて居た。明和年前に於ては係役人控所は西濱町に面する部に多く設けられて居たが、明和二年構内北部の一部に米蔵新設さるるに及び、夫れ等の建物は南門付近に移されたと云う。構内土蔵は最初拾貳棟六拾戸前であったが後拾七棟七拾五戸前となった。即ち左の如し。

荷物蔵 四拾壹戸前 廻銅入蔵 四戸前

園米蔵 十戸前

昆布其他海産物蔵 五戸前

長崎會所荷物蔵 五戸前

粃米蔵 八戸前 他 貳戸前

右の他檢使場、荷役場、諸役人詰所等全備した。…（後略）」⁴⁾

このように新地蔵の内部は、まず唐船によって運ばれてきた荷物を搬入するための水門が海に面して四つ存在しており、内部の倉庫を取り囲むようにして四つの番所や諸役人のための建物が配置されていた。また唐人達がむやみに一般市民と接触しないように新地蔵から唐人屋敷へは一本の橋によって繋がれていたことが分かる。新地蔵はその存在期間中に内部の構成が変化している。それらについては以下のように述べられている。

「明和二年 豊後國宇佐郡石見國三郡の産米壹萬餘石を新に當地に廻着の命があつ

たが、從來の兩瀬崎米廩では收納が出来ざる爲め、當時唐人船入港数が減少して新地蔵中空蔵となれるものがある。即ち新地蔵創設當時の倉庫の一部は不用に歸する状態であつたから、之を利用することとなり、明和二年北半部の更に西半部三百七拾貳坪參拾壹間に拾貳間の地を區劃して追々に米廩七棟貳棟拾間に參間、貳棟拾五間に參間、貳棟貳拾五間に參間、壹棟貳拾八間に參間を建て地役人給興米其の他を貯ふることとなつた。新地御米蔵所と云ふのが夫れである。新地御蔵とは此の米廩を指すので唐人輸入品倉庫とは自ら別である。因に當時の回漕米石見、豊後、肥前、天草等を合して約貳萬五千五百石内一萬九千石は地役人給興米、二千石は扶持米、切米、四千石は市中拂米であつた。」⁵⁾

「寛政十二年 西築町築地に在つた圍籾蔵を當構内北半部の東部今の新地町十一地より二十五番地に至る一區に移された。即ち西濱町及本籠町に面する部分である。此の圍籾は寛政二年時の長崎奉行水野若狹守、永井筑前守が、長崎は穀産少く凶年に際すれば市民の食料直ちに缺乏するの狀態に鑑み、自己等が唐人輸入品購入高より銀拾貫目宛を減じて之を長崎會所の名義とし、此の名義によりて購入せる輸入品賣却の益金を以て籾を購入せしめ置き、以て凶荒に備へしめたもので、最初は西築町の内築地に久松平三郎所有地に蔵を新築し二年十月着手三年九月成就して此處に貯蔵せしめたが、この年新地の北半御米蔵所の東隣全部七百貳拾八坪六合六勺の地に於ける十五間に三間の壹棟を充用したもので、別に番所壹棟が在つた。後貳拾間に參間の二棟となる。」⁶⁾

以上のことから新地蔵は大きく分けて二度、その内部構成を変化させてきたことが分かる。明和二年の改築ではもっとも注目することとして、新たに蔵を建て増ししたことよりも、唐人達の専用であった新地蔵の内部へ地元住民の施設が配備されたということが挙げられる。寛政十二年の改築では此の明和期の前例をふまえて、空いている敷地内に新たに別の蔵が建造されたということが出来る。

4. 絵図資料

新地蔵については上記文献のほかに、当時の様子を描いたと思われる絵図類がある。それらは大別すると二通りに分けることが出来る。ひとつは新地蔵を平面（配置）図的に描いたものであり、そしてもうひとつにはそれを絵巻物として立体的に描いたものである。

今回はその中で、平面（配置）図的に描かれた古図二面－「長崎諸役場絵図（長崎諸御役場絵図）」（図1）、「長崎諸官公衙及附近ノ図」（図2）、いずれも長崎県立長崎図書館蔵－を用いて見ていくことにする。まず絵図がそれぞれいつの時代のものであるかについて検討してみる。これら二面の絵図はその描かれた年代がはっきりと知られてはおらず、よってここでは「長崎市史」に記載されている蔵数の推移とその大まかな配置の記述にもとづいて検討してみる。

まず図1であるが、この図に記載されている蔵数は他の二面に比べてもっとも少なく、「明和二年北半部の更に西半部三百七拾貳坪参拾壹間に拾貳間の地を區劃して追々に米廩七棟貳棟拾間に参間、貳棟拾五間に参間、貳棟貳拾五間に参間、壹棟貳拾八間に参間を建て地役人給興米其の他を貯ふることとなった」⁷⁾とあることと、「土蔵を建設するもの拾貳棟 壹棟入参間間口貳拾五間で之を五區に別つた即ち土蔵数六拾後増して七拾五戸前となる」⁸⁾という設立当初の記述にもっとも近いことからこの図は少なくとも明和二年以前のものであるとした。次に図2であるが、これは先程の明和二年の蔵増築に関する記述と、「寛政十二年 西築町築地に在った園粉蔵を當構内北半部の東部今の新地町十一地より二十五番地に至る一區に移された」⁹⁾とあることからここでは寛政十二年以後のものとした。

5. 新地蔵の構成とその変容

先程「長崎市史」においてみた新地蔵の内部構成とその変容について、ここでは絵図にしたがって見ていくことにする。明和二年以前の絵図（図1）を見てみると、水門が敷地の西端から南端にかけて四つ規則正しく海に向けられており、三間に二十五間の蔵が南半部ではその敷地ほとんどを規則正しく埋めており、北半部においてもその西部において同じ

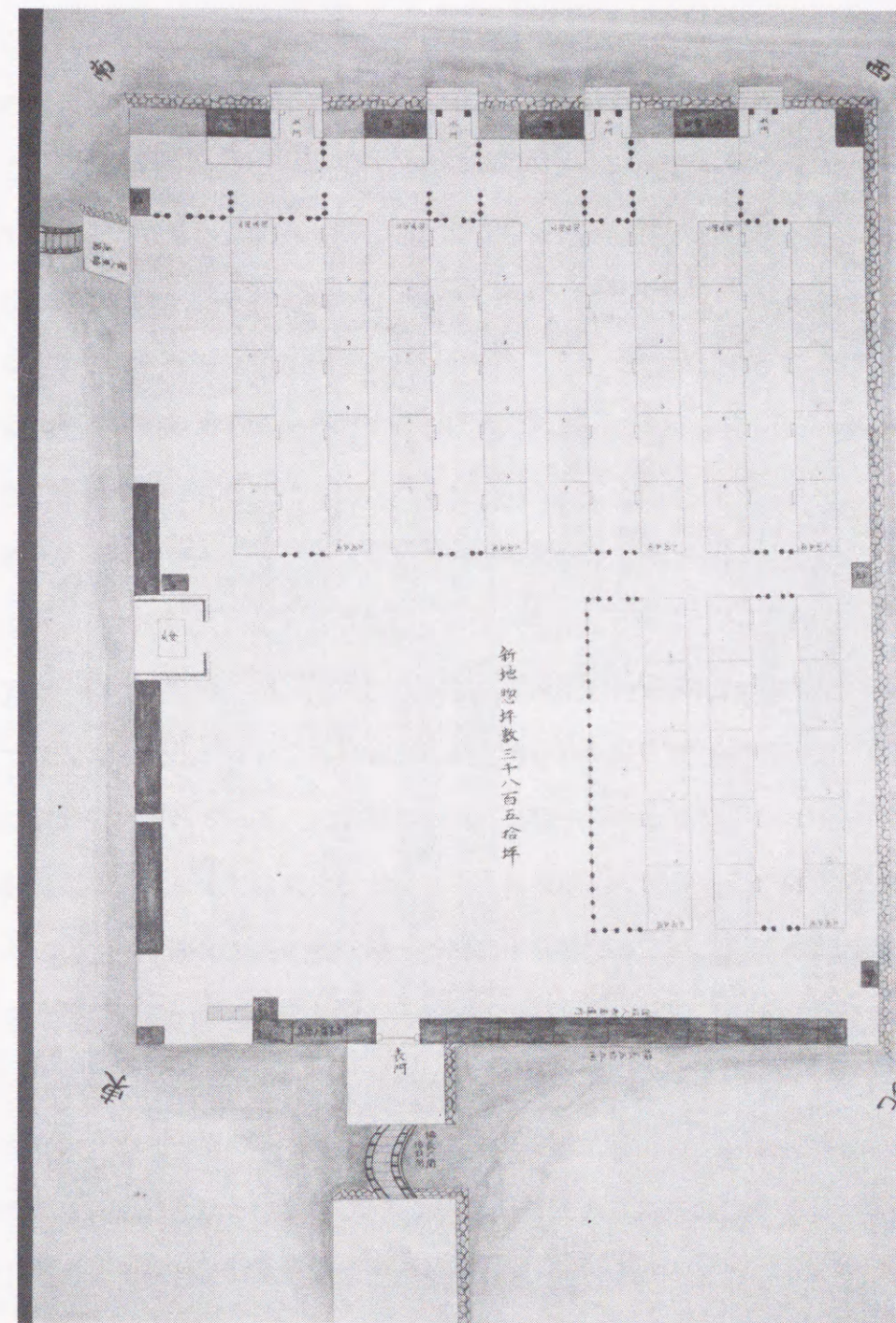


図1 「長崎諸役場絵図（長崎諸御役場絵図）」

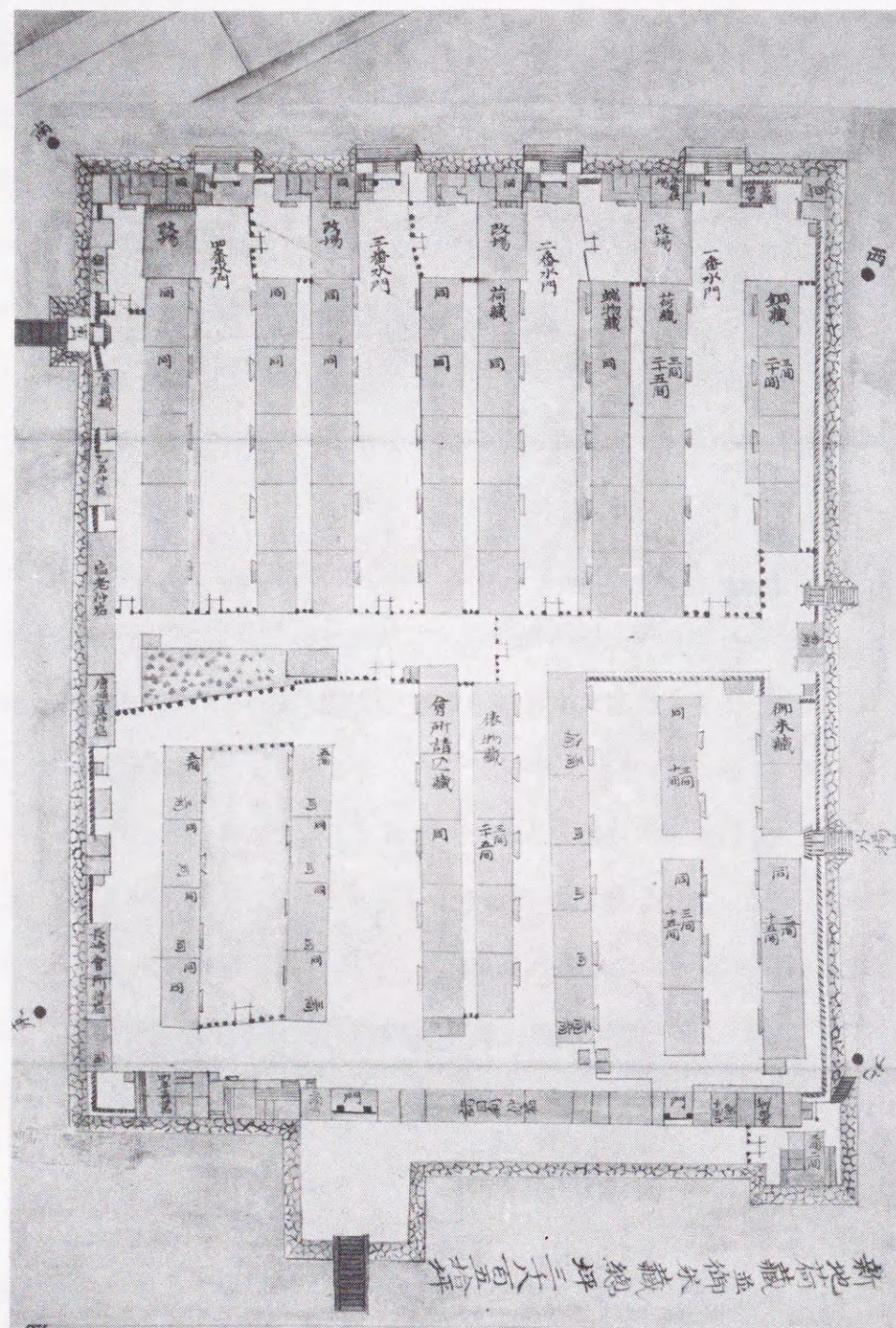


図2 「長崎諸官公衙及附近ノ図」

ように配列されている。この図から分かることは、敷地の南半部においてはひとつの形態が反復されることで内部が構成されているということである。つまり水門ひとつに対して三間に二十五間の蔵二つがセットとなっており、ちょうど水門から入ってきた動線を挟んで二つの蔵の正面が相対するようになっている。また水門のすぐ脇には検使場が存在しており、これもまた同じように反復して配置されている。相対した二つの蔵はそれぞれ端部において柵のようなものによって閉じられており、一番水門から四番水門へ渡る道にも同じようにそれぞれを区切る柵のようなものが存在している。そのほか敷地内部は他に区切るようなものは見当たらない。新地蔵から外に出るための門が二つ存在しているが、ひとつは敷地南部にあるものでこれは唐人屋敷に通じるものであり、もうひとつは敷地の北東部に存在しており、これは長崎市街へと通じている。この門が表門であり、この門を中心にして敷地外周の北端から東端を巡って南端の中部に至る所までに諸役人のための建物が連なっている。また敷地の南東部中央に土神堂が存在していることが分かる。

次に寛政十二年以降の絵図（図2）をみると、南半部においては水門の形態、蔵の配置に関してほとんど変化がないことがわかる。そのかわりに、南半部はそれとして閉じるような形で柵が設けられている。北半部においては様子はかなり変化している。まず、明和二年以前（図1）においては南半部と同じように規則的に配置されていた蔵三棟がなくなり、そのかわりに三間に十間の蔵二棟、三間に二十五間の蔵二棟、三間に十八間の蔵一棟のグループと三間に二十五間の蔵二棟、三間に二十間の蔵二棟のグループの二つの領域が存在している。後者の内部においては三間に二十間の蔵二棟が更にもうひとつのグループをなしており、それらは柵によって区切られている。また敷地の北西部に新たに水門が二つ造られており、それらひとつひとつがこのグループそれぞれに通じるようになっている。

次に長崎の市街から通じている表門がひとつではなく、この二つのグループそれぞれに通じるように二つ設けられている。北半部と南半部の間では、整然とした南半部に比べて北半部はかなりいりこんだ動線を持っており、蔵の配置も方向こそ南半部のものと同じだが配置に関しては異なっている。また北半部と南半部の間には空地が存在しており、領域的に分割されている。

このようにみても、寛政十二年以降の新地蔵は明和二年以前のものに比べて大変複雑な構成を持っており、そこからは新地蔵の機能が細分化している様子が窺える。敷地内部ではそれぞれの機能が互いと干渉しないように領域的に分割されており、動線的にも各領域ごとに出入り口を設けて分離している。つまりそこでは唐人側の蔵と長崎側の蔵といった目的の異なる蔵が同じ敷地内で（交わることなく）隣り合う形になっているといえる。

6. 結

幕府の鎖国体制を完成するために長崎の地に設けられた長崎唐人屋敷が、唐人達と地元住民との接触を極力避けるために唐人達を隔離することを目的としていたのには敷地形態にもその考え方が反映されており、二の門から内部には一般人が入れないような構成であったのに比べ、その唐人屋敷の付属倉庫として造営された新地蔵も、設立当初は唐人達のための専用荷物蔵であり、明和二年以前の絵図を見ても、その内部構成は唐船によって運ばれてきた物資を効率よく搬入・備蓄することができるように、水門ごとにひとつの単位を形成する機能的な蔵配置をなしていたことが分かる。しかし寛政十二年以後の絵図を見ても、機能的な蔵配置に変化はないものの、唐人達専用であった新地蔵の敷地内が長崎住民のための蔵を混在させる形式へと変化し、ほぼ中央の境界線を隔てて同じ敷地内に違った機能と動線を持つ蔵を併せ持つ形となったことが分かる。つまり時代が降るにつれて新地蔵は、その敷地が当初保持していた唐人達専用の荷物蔵という性格を大きく変化させ、敷地内部を分割することで長崎の都市機能を円滑に行う上での一要素へと組み入れられていったといえる。

第5章 註

- 1) 『長崎港草』（寛政四年）、長崎文献叢書、第一集・第一巻、長崎文献社、昭和48年、p.335
- 2) 福田忠昭：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、清文堂、昭和12年、p.111
- 3) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.770
- 4) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.770～772
- 5) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.772
- 6) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.773
- 7) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.772
- 8) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.772
- 9) 福田忠昭前掲書（註2）：長崎市史、地誌編、名勝舊蹟部、p.773

第6章 結論（総論）

本研究は、鎖国時代の長崎における中国人居留地である長崎唐人屋敷について建築的視点から考察を行なうものである。周知のように鎖国時代には長崎を唯一の窓口として唐・蘭貿易が行なわれていた。そこにはオランダ人居留地である出島とともに、中国人の居留地として唐人屋敷が設けられていた。しかし、出島がその敷地形態に独自の特徴を持つことや、西洋対東洋という対立的な問題意識の広範な浸透も相俟って、関係者の興味の対象としてあり続けていたのとは対照的に、唐人屋敷はその存在自体すらあまり知られることがないのが実態である。また出島がはやく（大正12年10月）に国の史跡に指定されたのに対し、唐人屋敷が長崎市の史跡に指定されたのはようやく昭和49年のことであった。この事実、二つの居留地に対する関心の落差を如実に示すものであろう。以上のことは出島関係の研究・文献の量に比べ、唐人屋敷のそれがはるかに少なく、また不明な点が多いことにも反映していよう。しかし相対的な関心の低さにもかかわらず、実際の唐人屋敷における建築的構成をみると、当時の日本においても極めて特徴的なものとして位置づけることが出来るものである。それは一つの特徴的な建築物という域をこえたある種都市的な意味も合せ持つほどの内容を持つものであり、それを全体として研究・考察する価値は十分にあると思われる。よって本研究は、鎖国時代における長崎唐人屋敷を一つの都市としてその構成を考察し、居留地空間としての内実と性格を幾分とも明らかにすることを目的としている。

本論文は序論と結論を含む6章から成り、第1章の序論では、研究の目的と方法を述べ、関連する既存研究を検討し、唐人屋敷に関する資料の提示を行った。

第2章では、唐人屋敷の沿革として、創設の背景及び立地条件について検討を加えた。

そこで明らかになったことは、唐人屋敷の創設がそれまでのある種自由な雰囲気の中で

行なわれていた唐貿易の性格を一変させる重要な事件であったということである。

各唐船とそれに対応するかたちで地元住民が取り持つ役割は当初は個別でかつ自由なものであった。それが唐人屋敷が創設されることで貿易及び唐人達の滞在がひとつの窓口に限定されることになり、以降幕末までに至っている。このことは建築的視点から見れば、長崎町中に分散していた唐人達がひとつの場所に集められることにより、ある種の「場」の形成が行われたことを意味する。具体的なその場は同じ居留地である出島とは異なった内陸部にあり、はるかに大きな規模で設けられている。結論先取的に言えば、後の長崎唐人屋敷においてはそこに「異国の都市」が形成されるのであるが、唐人屋敷においてひとつの場所への集中という事柄と出島とは異なった位置（内陸部）・規模（約二倍半）という事柄は、後の変化を準備する前提条件としての役割、つまり唐人屋敷の特徴を表している事柄であるといえる。

第3章では、前期長崎唐人屋敷の構成について、とりわけ元禄年間を中心として考察を行い、その空間構成の特徴を明らかにした。

そこで明らかになったことは、前期の唐人屋敷地における内部構成は画一的で整然とした配置を持ったものであり、都市的な性格を感じさせない、収容所的なものであったということである。（このことは後期との大きな差でもある。）設立当初の構成では、規則的で二種類の規模のものに固定された「長屋」の機械的な配置と敷地内部における明確な道構成の不在が上記の点を補完する。しかしその中において「土神堂」及びその前面空地は、唐館内部における唐人たちが独自の活動を行う上での（広場的）拠点として存在している。

よって以上のことから元禄年間の唐人屋敷は、幕府及び長崎総町中側が設けたもの（画一的な「長屋」配置等）を主軸としていた、それに対してその中で生活した唐人達が設けたもの（「土神堂」）が付加的ながらも唐人たち独自の性格を与えるものとして萌芽し、拮抗する空間を部分的に形成していたということがいえる。

第4章では、後期長崎唐人屋敷の構成について、とりわけ天明年間から文化年間の間を

中心として考察を行い、その空間構成の特徴を明らかにした。

そこで明らかになったことは、幕府側によって設けられた前期の唐人屋敷地における画一的で整然とした内部構成とは異なり、後期のそれは唐人達自身の趣向を盛り込んだ都市的な性格を感じさせる、特徴的なものであったということである。後期の唐人屋敷では「自分立」建物を付加した「唐人部屋」の一つ一つが各々異なった配置・構成を持つものであり、明確に敷かれた「道」は細かく区分された屋敷地内を縦貫する具体的な形態を与えられていた。屋敷地内のいたるところには「市店」や「自分立」建物が建てられ、さまざまな規模・形態を持つそれら建物とその領域間をつなぐ道空間から生まれる情景は、前期とは全く異なる相貌を持つ都市的性格を持ったものであったと言える。また新たに建てられた「廟建築」とそれらをつなぐ「道」は、屋敷地内における方角と対応した基盤としての役割を持つものであり、二ノ門内は「道」と建物との密接な関係からなる都市的な構成を持つものであった。よってトータルして考えるならば、後期の唐人屋敷の特徴は前期の仮住まい的なものから具体的で独自の内容をもった生活的なものへと推移しており、ここでは形態的・内容的にも多様化の進んだ唐館内の空間が明確な都市的性格を持ったものとして存在していることにあるといえる。そして以上の内部構成は唐人達自身の具体的な営為によって導きだされており、このことは後期唐人屋敷が単なる収容施設の域を超えたものであることを表している。つまり結論的には、後期長崎唐人屋敷は鎖国時代の日本内部における唐人達による異国の「都市」としての姿を現していたといえる。

第5章では、唐人屋敷の付属倉庫である新地蔵について、歴史的経緯にのっとり、構成の推移を明らかにし、その空間構成の特徴を明らかにした。

幕府の鎖国体制を完成するために長崎の地に設けられた長崎唐人屋敷が、唐人達と地元住民との接触を極力避けるために唐人達を隔離することを目的としていたのには敷地形態にもその考え方が反映されており、二の門から内部には一般人が入れないような構成であったのに比べ、その唐人屋敷の付属倉庫として造営された新地蔵も、設立当初は唐人達のための専用荷物蔵であり、明和二年以前の絵図を見ると、その内部構成は唐船によっ

て運ばれてきた物資を効率よく搬入・備蓄することができるよう、水門ごとにひとつの単位を形成する機能的な蔵配置をなしていたことが分かる。しかし寛政十二年以後の絵図を見てみると、機能的な蔵配置に変化はないものの、唐人達専用であった新地蔵の敷地内が長崎住民のための蔵を混在させる形式へと変化し、ほぼ中央の境界線を隔てて同じ敷地内に違った機能と動線を持つ蔵を併せ持つ形となったことが分かる。つまり時代が降るにつれて新地蔵は、その敷地が当初保持していた唐人達専用の荷物蔵という性格を大きく変化させ、敷地内部を分割することで長崎の都市機能を円滑に行う上での一要素へと組み入れられていったといえる。

長崎唐人屋敷の史的意義

長崎唐人屋敷を語る場合に、人は必ずといっていいほどその当時の時代背景（「鎖国」）、もしくは貿易形態（「唐貿易」）について言及する、いや、むしろ「唐貿易」や「鎖国」時代を説明する・際立たせるために唐人屋敷が持ち出されてくるといったほうが語弊が少ないかもしれない。或る他の目的のために常にその手段であり続けることは長崎唐人屋敷の置かれてきた不遇の立場を物語っている（唐貿易における一項目）。「西洋対日本」といったような、興味をそそる対立形式も展開することがなかった長崎唐人屋敷は、もしかすると「鎖国」や「唐貿易」（これらはいつも一対をなしている）について述べる場合にも言及されない（する必要のない）単なる建築的事柄としてあるのかも知れない。

このような唐人屋敷の歴史的（或る種政治的）背景に対する理解は普遍的ではないが一般的である。またこういった理解はその研究史にも影を落としている。

本研究は長崎唐人屋敷について建築的に考察することをその目的としているが、そのねらいはこのような歴史的（或る種政治的）背景によって培われた関心・理解の分布図には従わず、まず長崎唐人屋敷を単純に建築的立場から考察してみるというところに存している。以下では唐人屋敷の持つ特徴（意義）を少し広い視野から述べてみたい。

各章において明らかになったことを踏まえて長崎唐人屋敷の持つ基本的な枠組みを問うならば、それは収容施設としての側面と内部の独自な都市的構成という側面にあるということができる。

収容施設としての側面は唐人屋敷の歴史的推移を通して一貫して保たれている。具体的には大門、二ノ門という二重の検閲場所、屋敷地の周りを巡る各種の障害物、番所等の建築的な構成である。また唐人屋敷はその敷地は拡張したものの一貫して同じ地理的場所に存在しており、市街地から少し離れたその場所の持つ意味は最後まで変化がなかったものと思われる。

反面、長崎唐人屋敷の内部空間は時代が降るにつれて当初の収容所的なものから唐人達による「異国の都市」的なものへと推移していった。その内容は唐人達独自の生活と風習、そして独自の建築的要素を持つものであり、これらは唐人達自身の営為によって獲得されたものであった。幕府によって当初もたらされた唐人屋敷が、時代を経るごとに徐々に唐人達独自のものへと変貌してゆく様は、長崎という地における唐人達と日本人との間の協同的な関係を想像させ、唐人屋敷内部には日本人は入れなかったものの、地元の職人や商人・役人との関係から織り成された唐人屋敷の歴史的過程は、単なる収容施設という域を越えたものとして建築空間に結実していた。(またこのような特徴を持つ長崎唐人屋敷は日本の歴史において、鎖国という時代を抜きにしても極めて特異な事柄であったということも出来よう。渡来文化が日本において開花した事柄については枚挙に暇がなかろうが、具体的に外国の人々が日本の地に渡り、そこで独自の都市を築き生活した例は管見に入らない。すなわち長崎唐人屋敷は単に建築的にみて興味深い対象であるだけでなく、日本における都市史的見地からみても大変重要なものであるといえよう。)

すなわち長崎唐人屋敷は外部に対する面と内部に対する面とが全く相違(相反)したかたちで存在していたのである。(少なくとも構成上は)その内部空間は敷地の外部へと展開することはなかったし、外部空間は敷地内部では力を持たなかった。このことが唐人屋敷の二つの側面がもたらした結果であり、それが獲得した空間的性格の特徴であるといえる。そしてここで驚くべきことは、「外部に対して閉鎖し、内部では独自の文化・生活を

享受する」という唐人屋敷の構図(特徴)が、そのまま鎖国制度を行っていた当時の日本の構図(特徴)とも重なるという点である。ここではこの符合を指摘するに留めるが、以上の事柄をまとめるならば、長崎唐人屋敷は「鎖国」(閉鎖)と「貿易」(交流)という互いに相容れない事柄の境界線上に位置した極めて特徴的な歴史的事実(事件)であったといえることができ、それは日本における建築史もしくは都市史に大変重要且つ貴重な遺構(事件)として存在しているといえよう。

最後に本論では長崎唐人屋敷の日本における都市史的影響について何ら論考を加えることができなかったが、以降の研究の課題としては各時代の唐人屋敷の構成及びその建設過程のより具体的な解明、また都市史的見地から見た唐人屋敷の構成の特徴、そして中国における建築・都市構造との比較・検討等が挙げられる。

本論文に関連する発表論文

「居留地における空間特性論序説」, 修士論文, 関西大学大学院, 1993年2月

「長崎唐人屋敷の建築的研究」, 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系, 第34号,
1994年

「新地蔵 (の構成) とその変容について」, 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系,
第35号, 1995年

「長崎唐人屋敷における唐人部屋について」, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海
道), 1995年8月

「元禄期における長崎唐人屋敷の構成について—長崎唐人屋敷に関する建築的研究—そ
の1—」, 日本建築学会計画系論文集 第482号, 1996年4月

「都市資料としての長崎唐人屋敷図の検討」, 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画
系, 第36号, 1996年7月

「天明年間から文化年間における長崎唐人屋敷の構成について—長崎唐人屋敷に関する
建築的研究—その2—」, 日本建築学会計画系論文集 1996年8月投稿 (現在審査中)

＊

謝辞

本研究を進めるにあたって、関西大学教授 永井規男先生には終始あたたかいご指導と
ご鞭撻を賜りました。その当初の構想から具体的な手法に至るまで、筆者が受け取った学
恩には計り知れないものがあります。ここに改めて感謝の意を表します。

また関西大学建築学教室の諸先生方にも論文作成を通じてあたたかいご指導・ご鞭撻を
賜りました。ここに心からお礼申し上げます。

なお本研究を進めるにおいて、各機関のご協力を仰ぎました。とりわけ関西大学東西学
術研究所、および長崎県立長崎図書館 日宇孝良氏には資料収集のために多大なご迷惑を
おかけしました。ここに厚くお礼申し上げます。

絵図資料

唐人屋敷図

・平面 (配置) 図的なもの

「唐人屋敷図」, 神戸市立博物館蔵 (1)

「唐人屋敷図」, 松浦史料博物館蔵 (2)

「長崎諸役場絵図」, 長崎県立長崎図書館蔵 (3)

「長崎唐館図」, 松浦史料博物館蔵 (4)

「長崎諸官公衙図 (長崎諸官公衙絵図面)」, 長崎県立長崎図書館蔵 . . . (5)

「長崎諸官公衙及附近ノ図」, 長崎県立長崎図書館蔵 (6)

「長崎諸役場絵図 (諸御役場絵図)」, 長崎県立長崎図書館蔵 (7)

「長崎諸役所絵図」, 長崎県立長崎図書館蔵 (8)

・絵巻図的なもの

「漢洋居留地図巻」, 長崎美術博物館蔵 (9)

「長崎唐館交易図巻」, 神戸市立博物館蔵 (10)

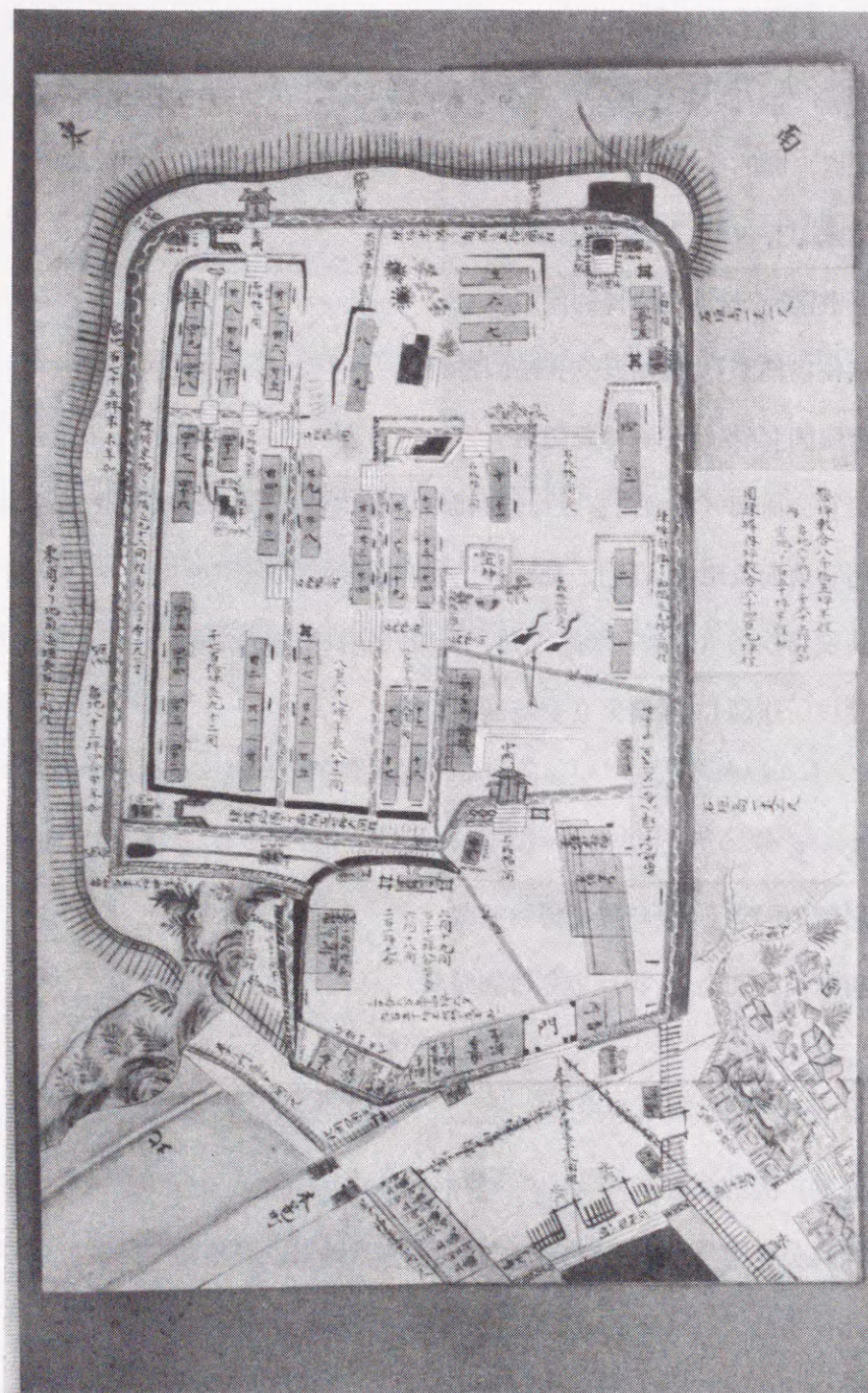
新地蔵図

・平面 (配置) 図的なもの

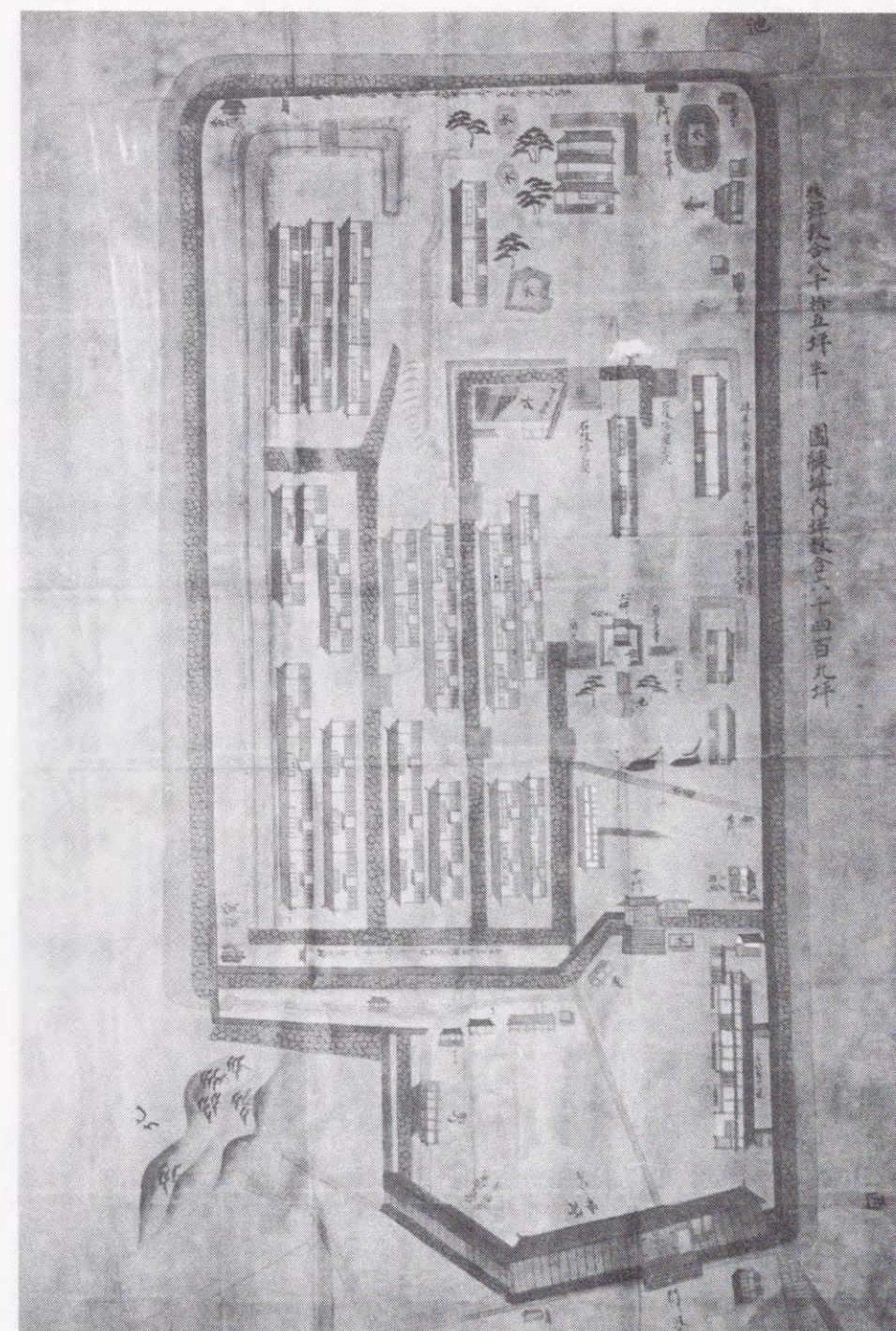
「長崎諸官公衙図 (長崎諸官公衙絵図面)」, 長崎県立長崎図書館蔵 . . (11)

「長崎諸役場絵図 (諸御役場絵図)」, 長崎県立長崎図書館蔵 (12)

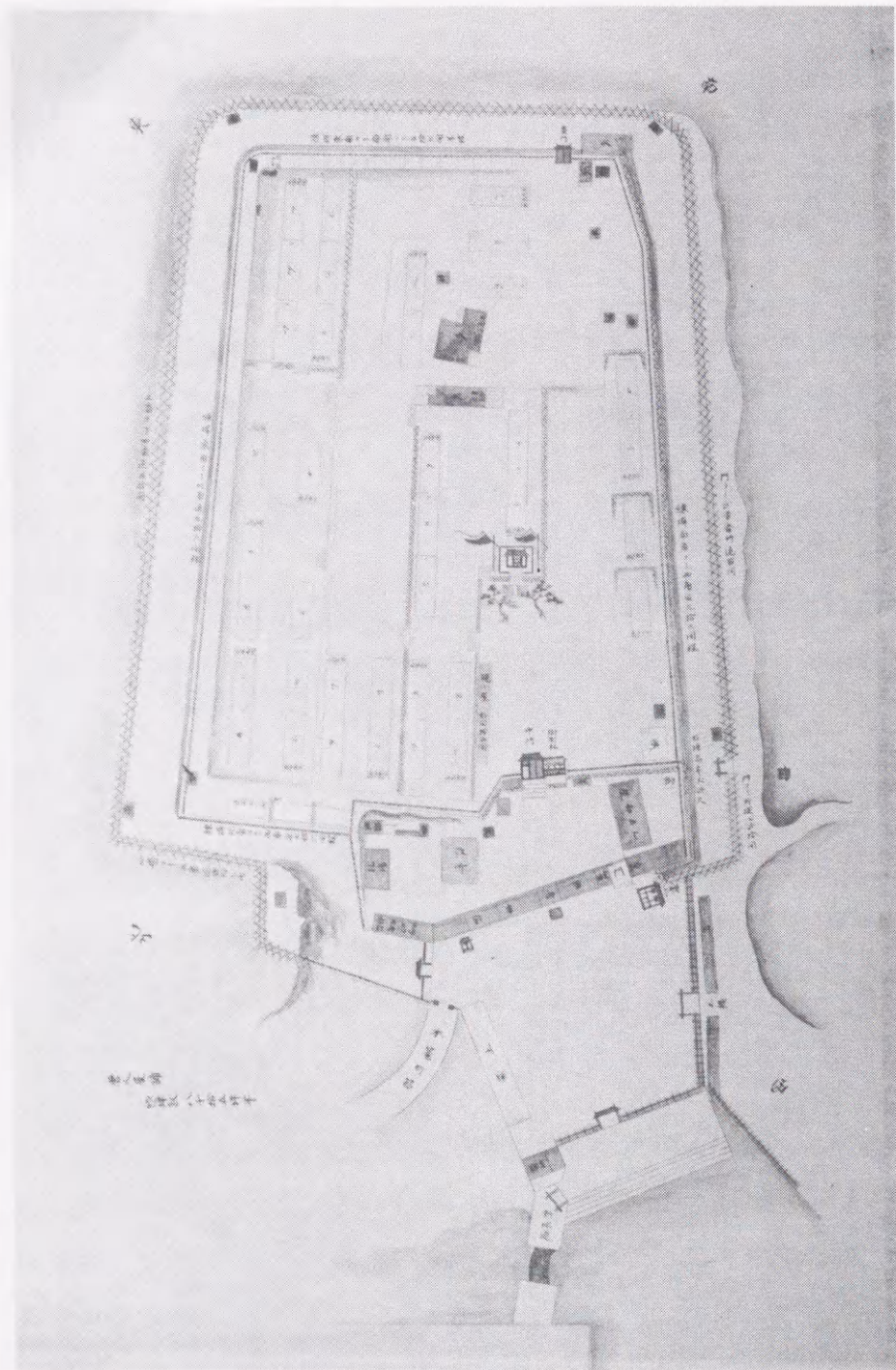
「長崎諸役所絵図」, 長崎県立長崎図書館蔵 (13)



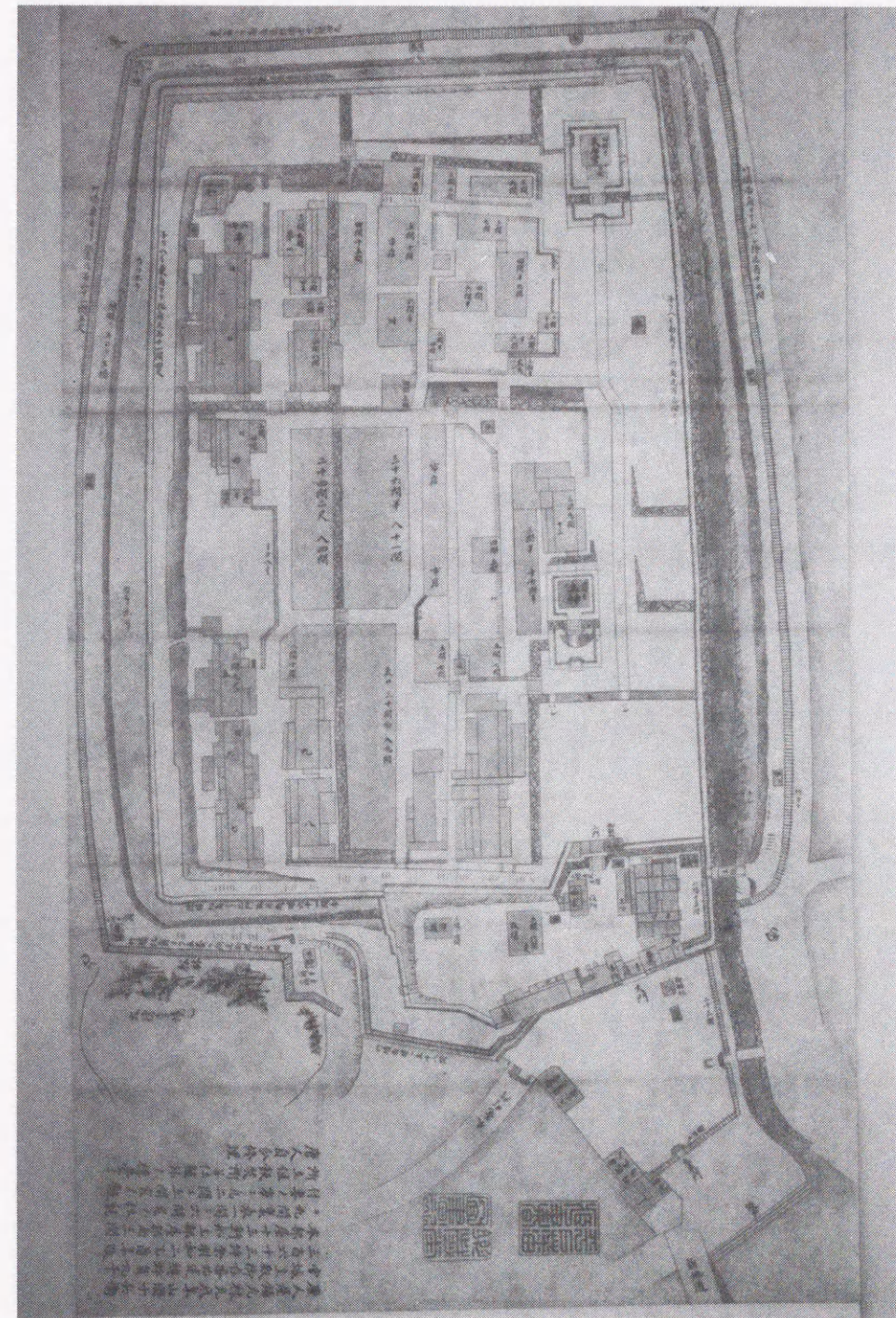
「唐人屋敷図」，神戸市立博物館蔵，年代不詳



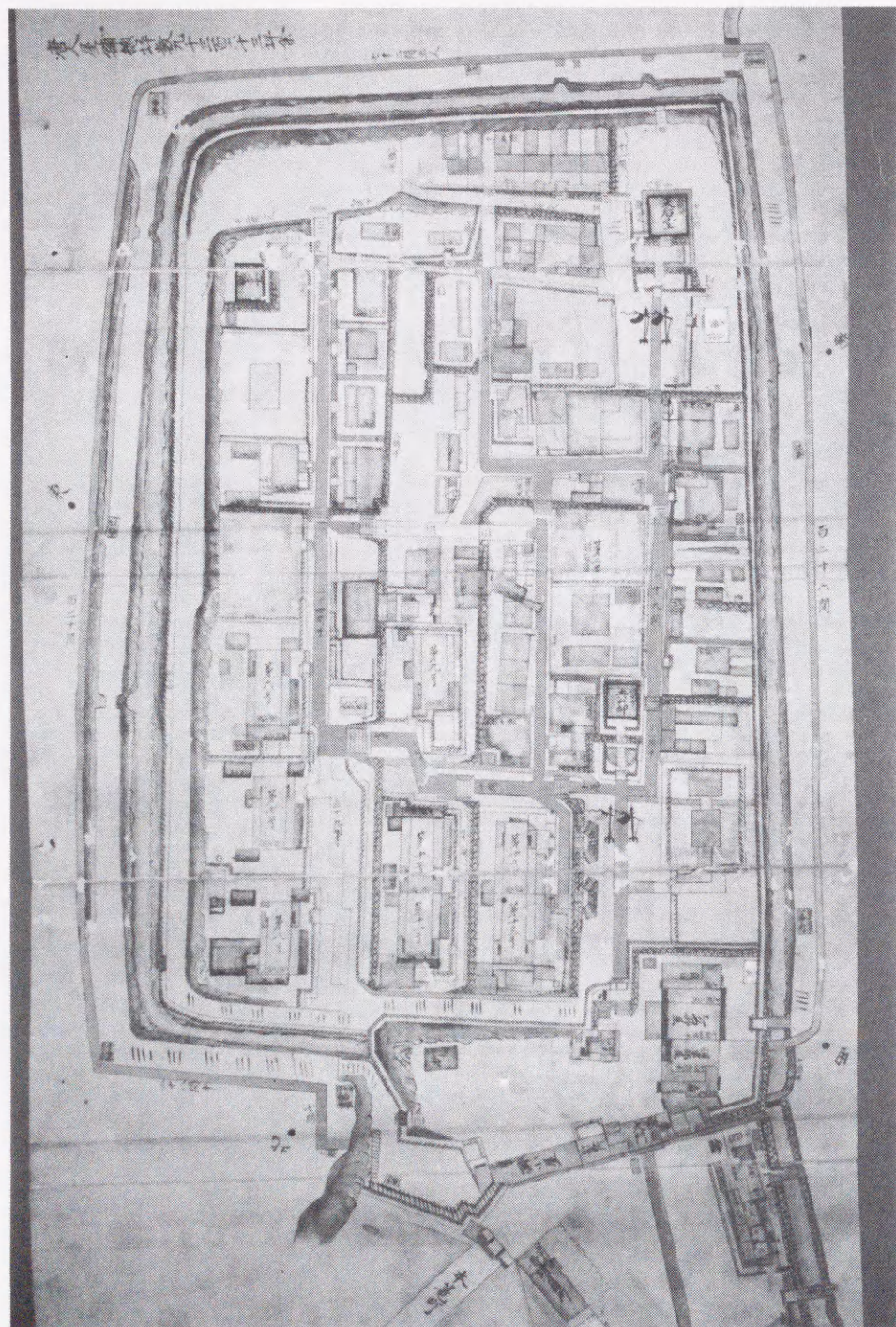
「唐人屋敷図」，松浦史料博物館蔵，明和二年



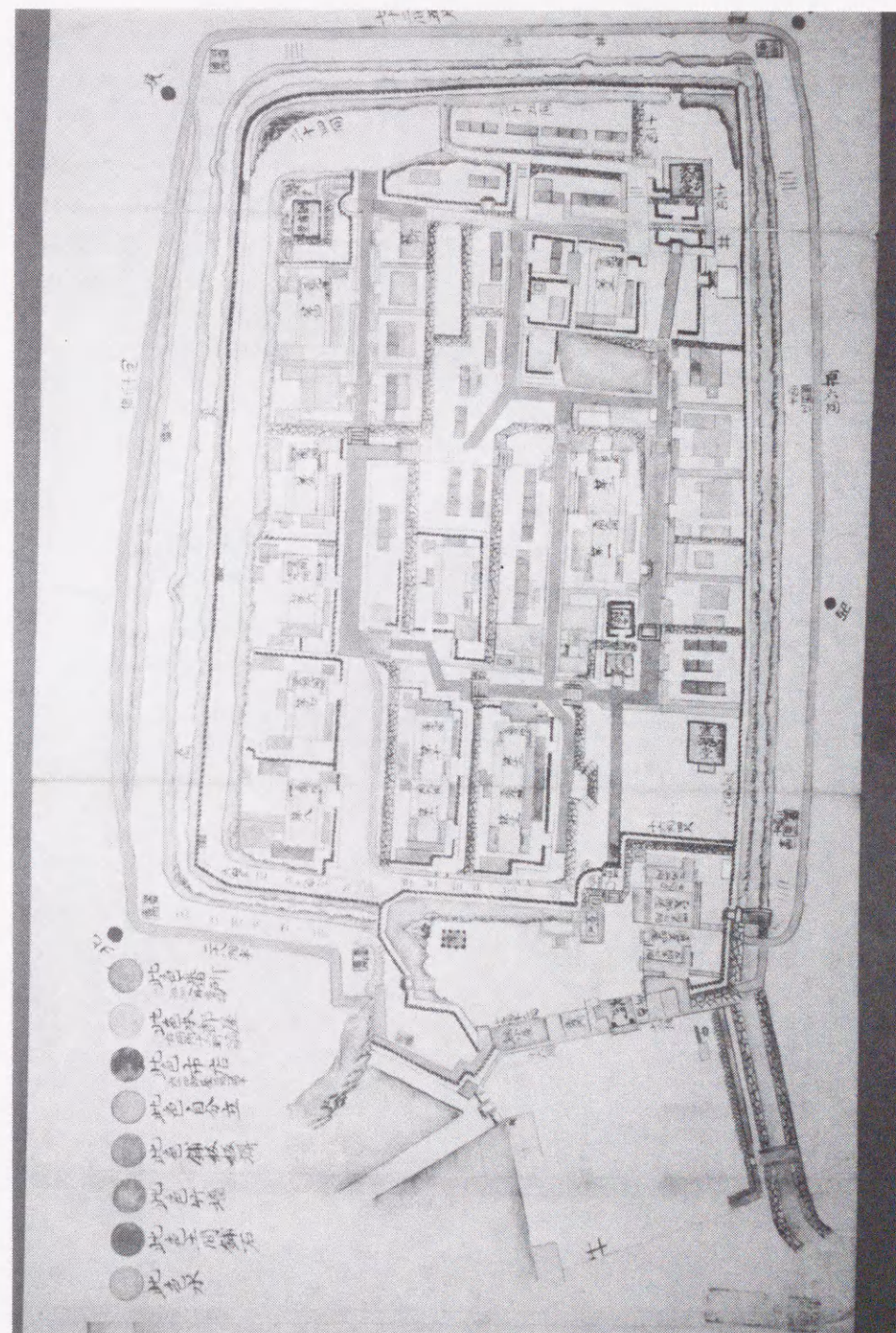
「長崎諸役場絵図」，長崎県立長崎図書館蔵，年代不詳



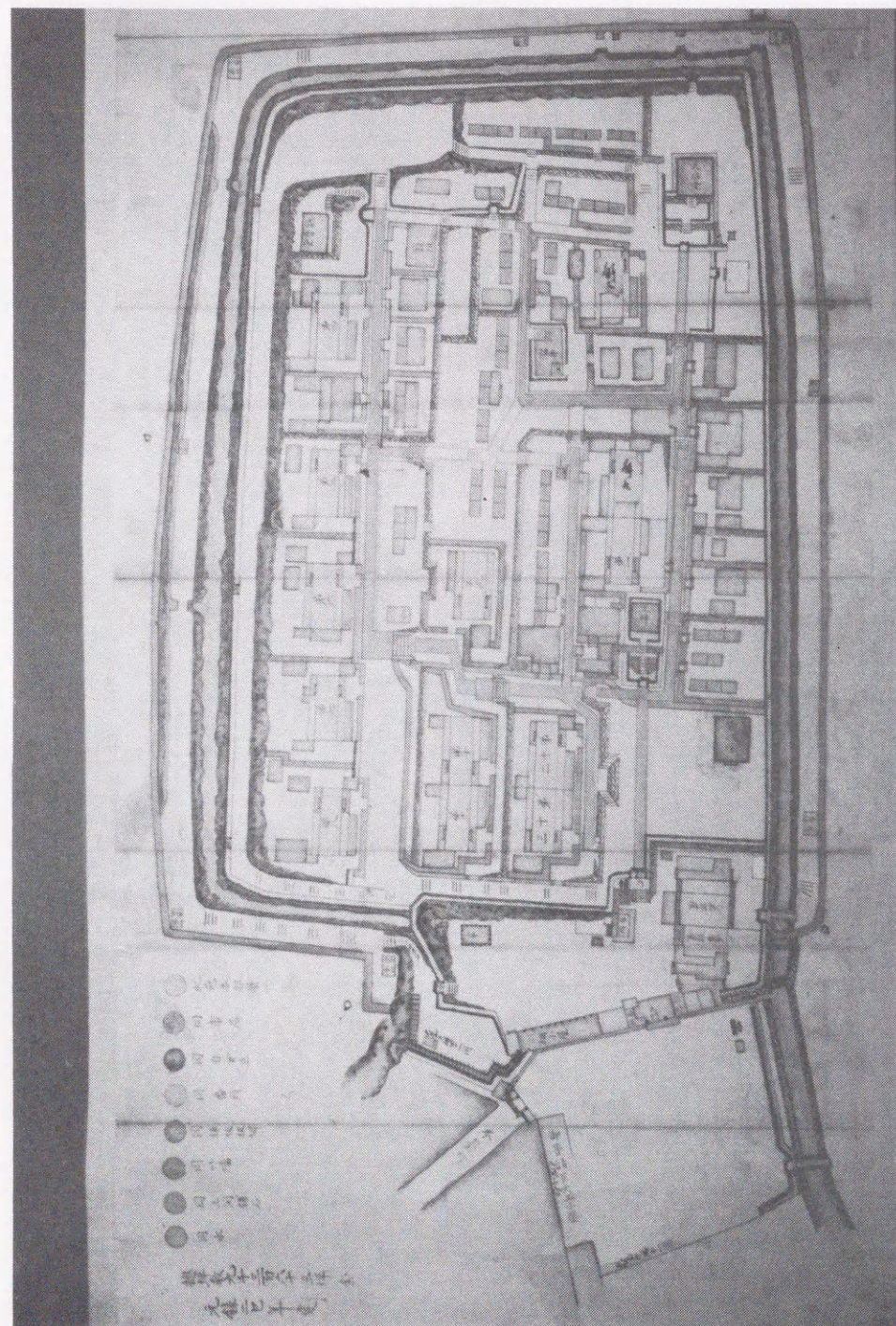
「長崎唐館図」，松浦史料博物館蔵，明和二年



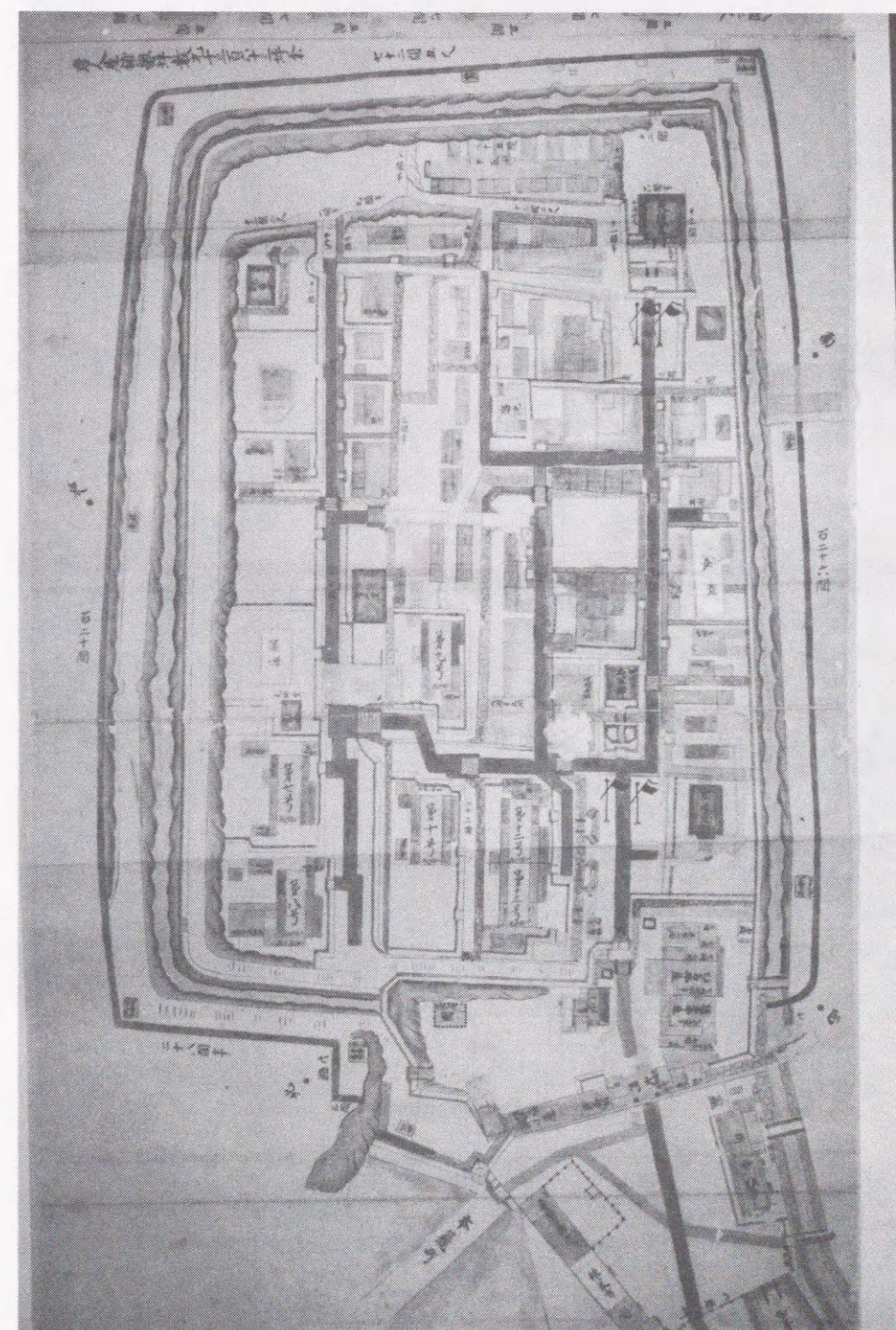
「長崎諸官公衙図（長崎諸官公衙繪図面）」，長崎県立長崎図書館蔵，文化五年（1808）



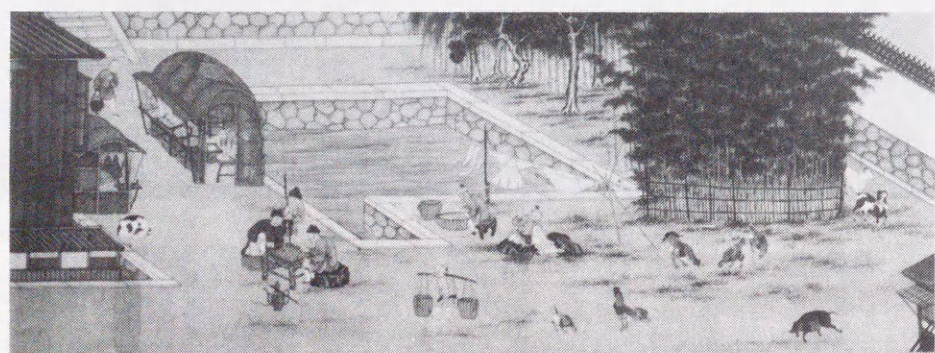
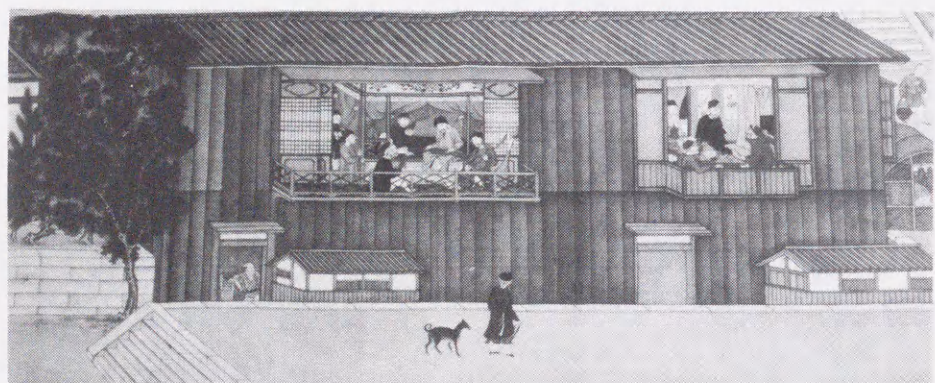
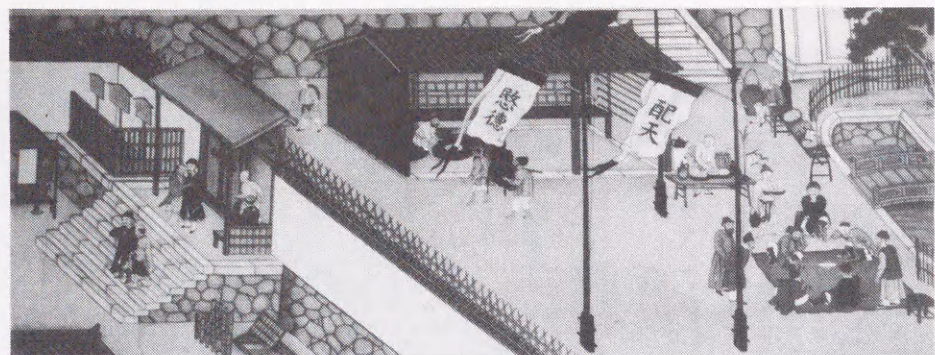
「長崎諸官公衙及附近ノ図」，長崎県立長崎図書館蔵，年代不詳



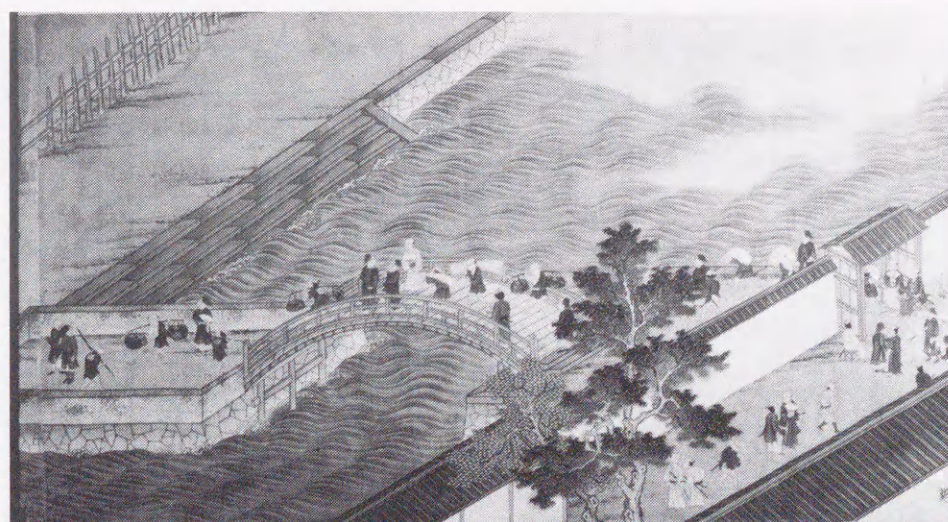
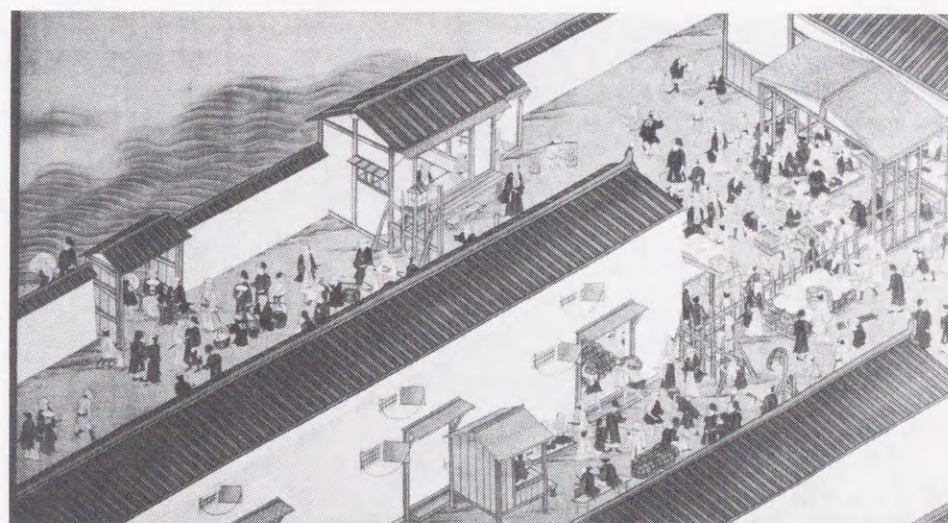
「長崎諸役場絵図（諸御役場絵図）」，長崎県立長崎図書館蔵，江戸後期



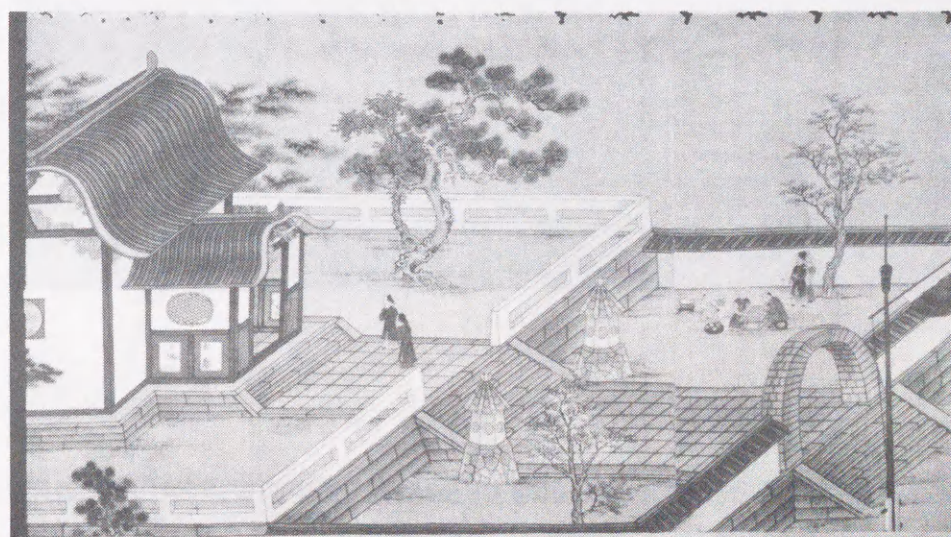
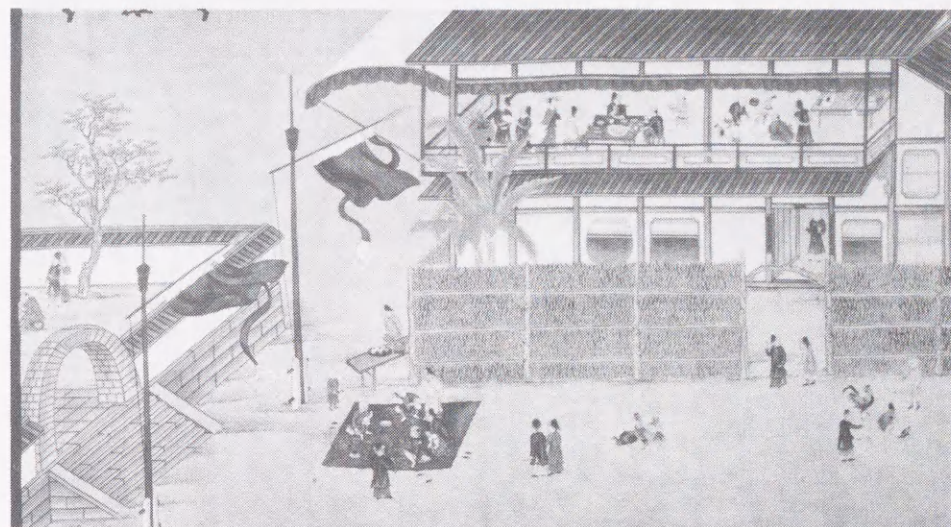
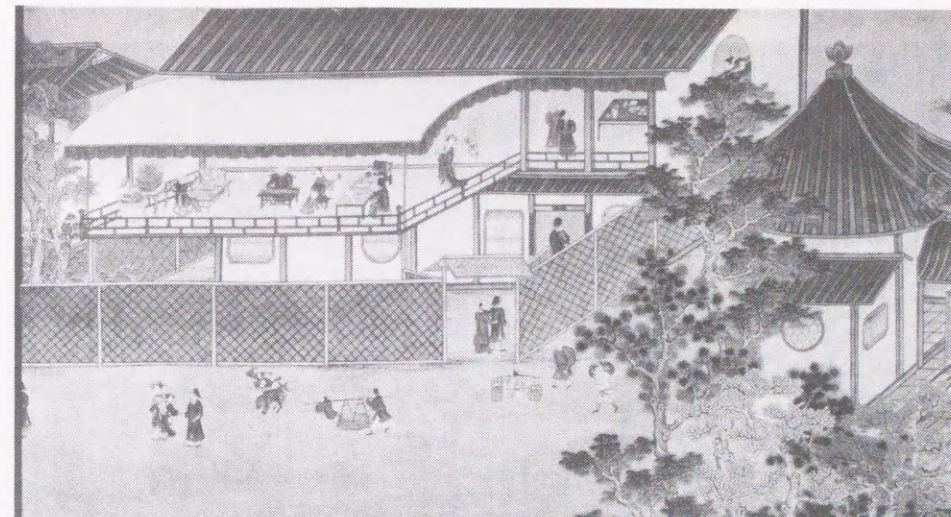
「長崎諸役所絵図」，長崎県立長崎図書館蔵，天保九年（1838）

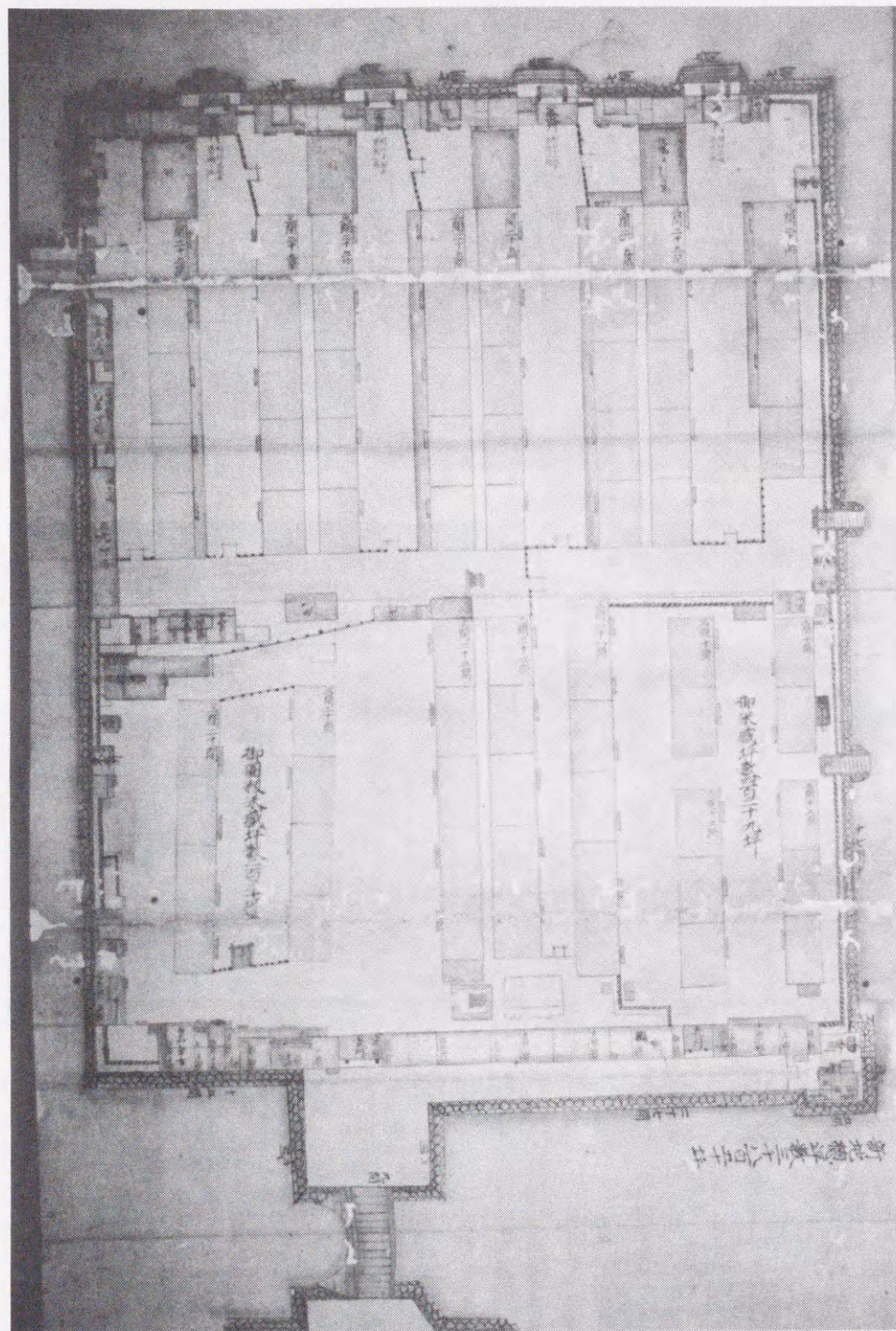


「漢洋居留地図巻」，長崎美術博物館蔵

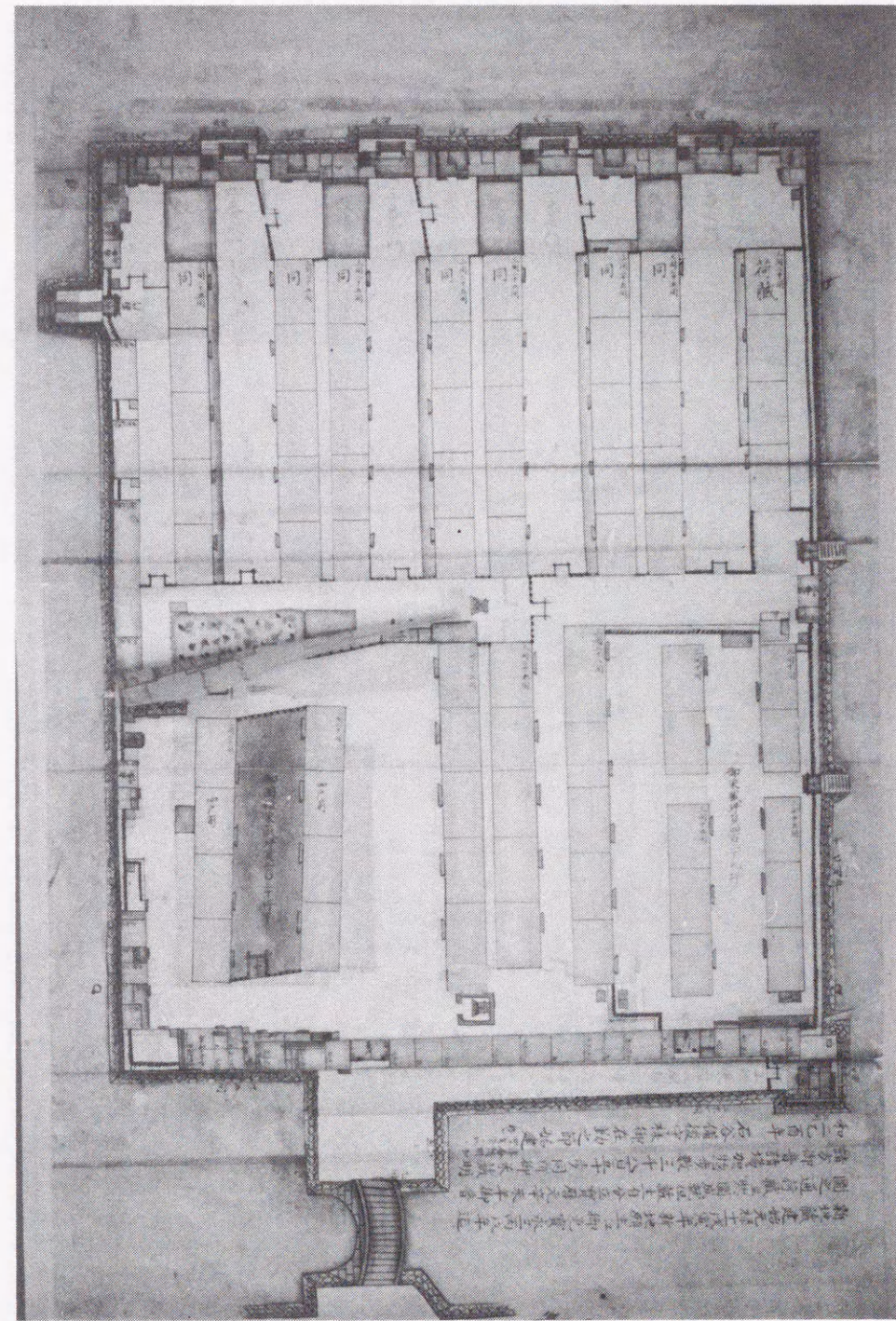


「長崎唐館交易図巻」，神戸市立博物館蔵

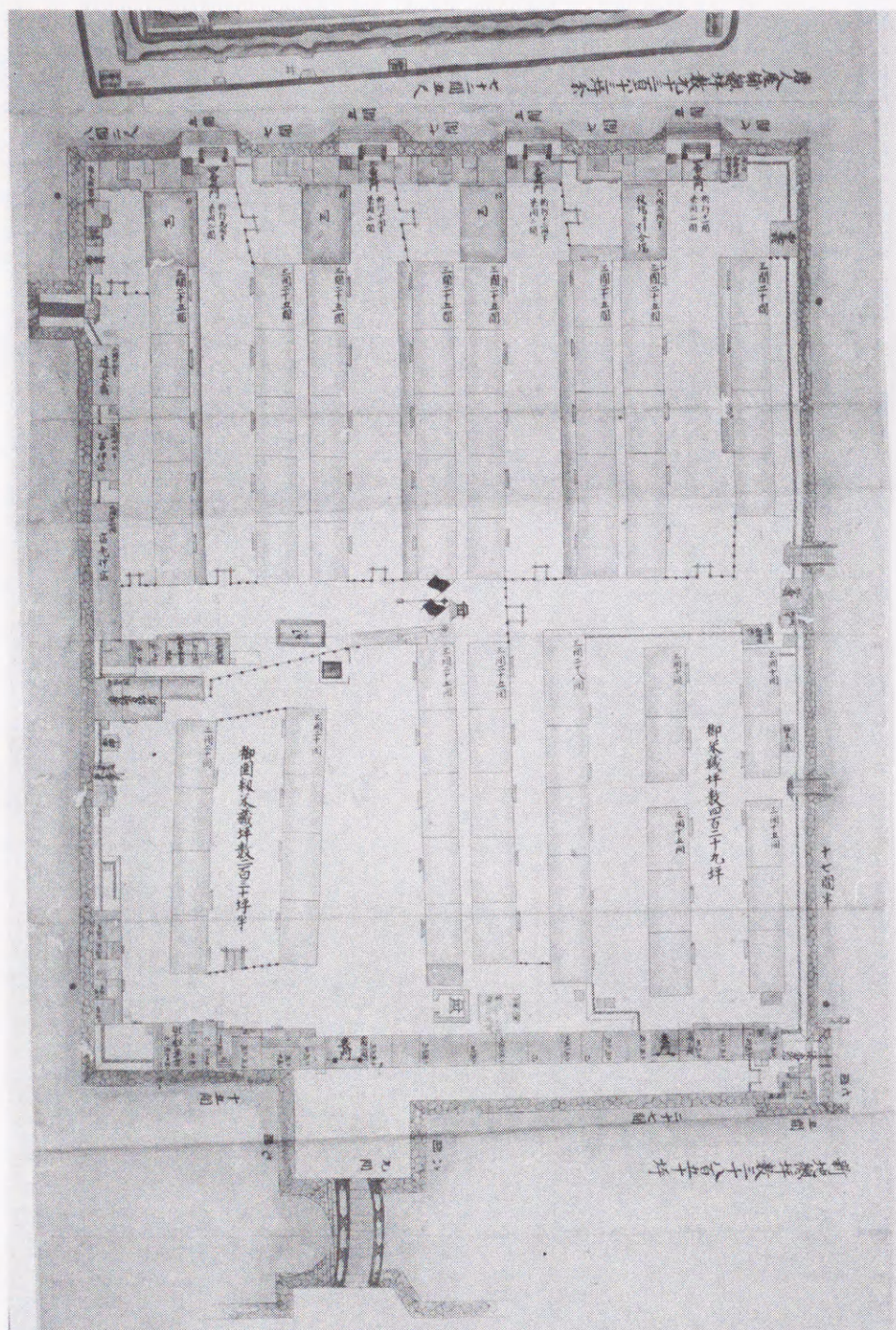




「長崎諸官公衙図（長崎諸官公衙絵図面）」，長崎県立長崎図書館蔵，文化五年（1808）



「長崎諸役場絵図（諸御役場絵図）」，長崎県立長崎図書館蔵，江戸後期



「長崎諸役所絵図」，長崎県立長崎図書館蔵，天保九年（1838）

